

九韶歌。使二湘
靈故瑟兮。令三
海若舞馮夷一。
玄螭蟲象竝
出進兮。形螺
虬而透逝。雌
蜺便娟以增
摯兮。鸞鳥軒
翥而翔飛。音
樂博衍無終
極兮。焉乃逝
以徘徊。
舒并節以馳
驚兮。遠絕根
乎寒門。軼迅
風於清源兮。
從顛項乎增
冰。
歷玄冥以邪

● 祝融、余を戒め止め ● 鸞鳥を使として済水の神女宓妃を迎へ ● 楚の音楽咸池を張り黃帝の音楽歌雲を奏し ● 螭皇女英の二女神の音楽九韶を歌ふ ● 湘水の神 ● 海の神 ● 川の神
玄螭蟲象竝び出でて進む。形螺虬として透進たり。雌蜺便娟として以を増摯
り。鸞鳥軒翥して翔飛す。音楽博衍にして終極なし。焉に乃ち逝きて以て徘徊す。

● 水中の靈物、玄螭虫象などを並び出でて進む、その形曲りうねりたり ● 虹美しくまちはり ● 高く揚りて飛び廻り ● 響き渡りて隔りなし
節を舒并せて以て馳驚し。遠く根を寒門に絶つ。迅風を清源に軼し。顛項に増冰に従ふ。

● 樹を纏めて驅けり ● 遠く北極の門を越えて北に逃み ● 疾風を追い抜きて清源の地に至り ● 北方の神顛項に積氷の中に従ふ
玄冥を歴るに邪經を以てし。間維に乗りて以て反顧し。鸞鳥を召して之を見て。

余が爲に平路に先たしむ。

● 暗き地を歴るに正路を得ず、維の間に顧みて慄む ● 北方の神を召して先道を爲さしむ

四荒を經營し。六漠を周流し。上りて列缺に至り。降りて大壑を望む。

● 四方を歴遊し、六合をめぐり ● 上は天の間隙まで登り下は大海に至る

下は崢嶸として地なく。上は寥廓として天なし。視れども倏忽として見ゆるなし。聴けども倘恍として聞ゆるなし。無爲を超えて以て至清にして。秦初と隣たり。

● 俯すれば山の峻しきのみにて大地を見ず、仰れば茫漠として天を見ず ● 見るなく聽くなく無爲至清の境に至り、太古自然の道と合せり(倘恍は自失するをいふ)

經二兮。乘二同維一
以反顧。召二鸞
羸而見之兮。
爲レ余先二乎平
路一。
經二營四荒一兮。
周二流六漠一上
至二列缺一兮。降
望二大壑一。
下崢嶸而無
地兮。上寥廓
而無天。視
忽而無見兮。
聽倘恍而無
聞。超二無爲一以
至清兮。與二秦
初二而爲隣。

卷之六

卜居第六

(王)卜居は屈原の作りし所なり。屈原忠貞の性を履んで妬嫉せられ、讒佞の臣を念ふに、君に承け非に順ひて富貴を蒙り、己忠直を執りて身放棄せらる。心迷ひ意惑ひ、爲す所を知らず。乃ち往いて太卜の家に至り、神明に稽問し、之を著龜に決し、己世に居りて何か宜しく行ふべき所ならんかを卜し、異策を聞きて以て嫌疑を定めんことを冀へり。故に卜居といふ。

屈原既に放たれて三年。復見ゆることを得ず。知を竭し忠を盡して。而も讒に蔽却せらる。心煩はしく感亂れて、從ふ所を知らず。

乃ち往きて太卜鄭詹尹を見て曰く。余疑ふ所あり。願くは先生に由りて之を決せ

屈原既放三年。不得復見。竭知盡忠。而蔽却於讒。心煩慮亂。不知從。乃往見太卜

んと。詹尹乃ち策を端し龜を拂ひて曰く。君將に何を以て之に教へんとする。

● 卜筮を掌る者の長 ● 筮竹を正しく持ち、龜の甲の腹を拂ひていふ(古は龜の甲を燒きトに用ひしなり) ● 君の卜筮に問はんとする所は何ぞ

屈原曰く。吾寧ろ悃悃款款として朴にして以て忠ならんか。將た往くを送り來るを勞し斯に窮なからんか。

● 誠實質直を旨とし、忠を君國に盡すべきか ● 往くを送り、來るを迎へ、世俗に従ひて困窮を避くべきか

寧ろ草茅を誅劬して以て力耕せんか。將た大人に遊びて以て名を成さんか。

● 農夫となり、密草を刈りて荒地を開き、耕作に勉むべきか ● 官にとままり、貴人に親みて名を揚ぐべきか

寧ろ正言諱まずして以て身を危くせんか。將た俗に従ひ富貴にして以て生を媮まんか。

● 身刑戮せらるゝ迄も君の細を諫めんか ● 身の安樂を事とせんか

寧ろ超然として高く舉り以て眞を保たんか。將た呶訾慄斯啾唧儒兒して以て婦人

鄭詹尹曰。余有所疑。願因先生決之。詹尹乃端策拂龜曰。君將何以教之。屈原曰。吾寧悃悃款款。朴以忠乎。將送往勞來。斯無窮乎。寧誅劬草茅。以力耕乎。將游大人。以成名乎。寧正言諱。以危身乎。將從俗富貴。以媮生乎。寧超然高舉

不_レ明。數有_レ所_レ不_レ逮。神有_レ所_レ不_レ通。用_レ君_レ之_レ心。行_レ君_レ之_レ意。龜策誠_レ不_レ能_レ知_レ此事。

を指していよも足らざる所あり、知も明知し難き所あり ③ 敗(策を指していよ)も及ばざる所あり、神も通じざる所あり ④ 君はたゞ君の思ふまゝに事を行へ、卜筮にては決し難かるべしと

卷之七

漁父第七

(王) 漁父は屈原の作りし所なり。屈原放逐せられて江湖の間にあり。憂愁嘆吟し、儀容變易す。而して漁父世を避け身を隠し、魚を江濱に釣り、欣然として自ら樂むものあり。時に屈原に川澤の城に遇ひ、怪んで之を問ひ、遂に相應答せり。楚人屈原を思念し、因つて其の辭を叙し、以て相傳ふ。

屈原既に放たれて江潭に遊び。行々澤畔に吟ず。顔色憔悴し、形容枯槁せり。

漁父見て之に問うて曰く、子は三閭大夫にあらずや、何が故に斯に至ると。

● 官の名にて楚の王族、昭屈景の三姓を尊る(毎句隱隱の王註にあり)

屈原曰く。世を舉げて皆濁り、我獨り清めり。衆人皆醉ひ。我獨り醒めたり。是

屈原既放遊_二於江潭_一。行吟_二澤畔_一。顔色憔悴。形容枯槁。漁父見而問_レ之曰。子非_二三閭大夫_一與。何故至於_二斯_一。屈原曰。舉_レ世

を以て放たれたりと。

● 世人皆利を貪るるに我獨潔し ● 世皆汚穢の塵別なきにひ我と事理に明かなり
 漁父曰く。夫れ聖人は物に凝滞せずして。能く世と推し移る。舉世皆濁らば。何ぞ其泥を瀾して其波を揚げざる。衆人皆醉はば。何ぞ其糟を餉ひて其醴を飲らざる。何が故に瑾を懐き瑜を握り、自ら放たれたれしむることを爲ししかと。

● 聖人の心は一理一物にのみ留らず、よく世俗に隨ひ、自在に變通するものなり ● 何故に俗に化し、共に濁流に浮沈せざるぞ ● 何故に衆人に隨ひ、共に醉ひ亂れざるぞ(糟は酒のかす、醴は濁き酒なり) ● 瑾も瑜も共に美玉以て立派なる才能に喩ふ

皆濁。而我獨清。衆人皆醉。而我獨醒。是以見放。漁父曰。夫聖人者。不凝滯於物。而能與世推移。舉世皆濁。何不下泥。其泥。而揚其波。衆人皆醉。何不餉其糟。而飲其醴。屈原曰。吾聞之。新沐者必彈冠。新浴者必振衣。安能以一身之察。察受物之汶汶者乎。

歌其謫。何故懷瑾握瑜。而自令見放爲。

屈原曰く。吾之を聞く。新に沐する者は必ず冠を弾き。新に浴する者は必ず衣を振ふと。安んぞ能く身の察察たるを以て。物の汶汶たる者を受けんや。

● 新に髪を洗へるものは冠をもち、衣を振ひてその塵垢を去り身の之に汚されん事を避く ● 潔き身にて物の汚れを受くるに堪へず

寧赴湘流。馳騁於江魚之腹。又安能以皎皎之白。而蒙世俗之塵埃乎。漁父莞爾而笑。鼓枻而去。歌曰。滄浪之水清兮。可以濯吾纓。滄浪之水濁兮。可以濯吾足。遂去。不復與言。

寧ろ湘流に赴き。江魚の腹中に葬らるゝとも。又安んぞ能く皎皎の白を以て世俗の塵埃を蒙らんやと。

● むしろ湘水に投じ、江魚の餌食となるとも ● 潔白の身にて、世俗の塵に汚さるゝに堪へずと

漁父莞爾として笑ひ。枻を鼓して去り。歌ひて曰く。滄浪の水清まば。以て吾が纓を濯ふべし。滄浪の水濁らば。以て吾が足を濯ふべしと。遂に去つて復與に言はず。

● 漁父は、髪み、船ペリを叩きて去り ● 歌ひていふ、滄浪の水濯まば冠のひもを洗ふべし、濁らば吾が足を洗ふべしと(物に滯らず、世と推し移るをいふ、滄浪は川の名、濯水の下流なり) ● 漁父遂に去り、また別見て言ふことなかりき

去不復與言。

て成ることなし。

● 連夜眠らず、眠に迷す ● 夜々鳴き行くを哀しむ ● 年早く半を過ぎ、他郷にありて成ることなし

○

悲憂窮感して獨り靡に處り。美なる一人あり心釋けず。郷を去り家を離れて
徠りて遠客たり。超かに逍遙して今焉に薄る。

● 心に憂寂をいだき、孤立して一方に居る ● 一人の美丈夫あり(屈原をいふ) ● 遠去浮遊して今茲に來り
とゞまる

専ら君を思へども化すべからず。君知らず、奈何すべき。怨を蓄へ思を積み、
心煩憎して食事を忘る。願くは一たび見て余が意を道はん。君が心余と異な
り。車既に駕して謁りて歸りしも。見ることを得ずして心傷み悲しむ。

● 昔に酒を飲し ● 亂れ動く ● 既に車に駕して故國に歸りしも、獨見し得ざりしを悲む

兼兮哀蟪蛄
之宵征時靡
漣而過中兮
蹇淹留而無
成
悲憂窮感兮
獨處靡有美
一人兮心不
釋去鄉離家
兮徠遠客超
逍遙兮今焉
薄
專思君兮不
可化君不知
兮可奈何蓄
怨兮積思心
煩憊兮忘食
車願一見兮
道余意君之

心兮與余異。車既駕兮。謁而歸。不得見兮。心傷悲。

倚結輪兮長
太息涕潺湲
兮下霑軾。恍
慨絕兮不得
中督亂兮迷
惑。私自憐兮
何極。心忤忤
兮諒直。

結輪に倚つて長太息し。涕潺湲と下つて軾を霑す。恍慨して絶えて得ず。中
督亂して迷惑し。私に自ら憐むこと何ぞ極らん。心忤忤として諒に直し。

● 軾の下に縦横に曲ある木 ● 車の前方にある横木 ● 中心亂れていかにすべきか知らず ● 心平正に
して忠貞の道を守る

○

皇天の四時を平分する。竊に獨り此の凜秋を悲む。白露既に百草に下り。
奄ち此の梧楸を離披す。白日の昭昭たるを去つて。長夜の悠悠たるに襲ぐ。

● 一年四季に分る、中にて、この寒き秋を悲しむ ● 白露既に百草の上に降れば、忽ち青樹、あづきの葉を散
ちす ● 昼は短くして暮れ、夜は之に過ぎて長し ● 芳草の茂る時を去り、萎み枯る、季節に入る

皇天平二分四
時兮竊獨悲
此凜秋白露
既下百草兮
奄離披此梧
楸去白日之
昭昭兮襲長
夜之悠悠離
芳藹之方壯
兮余萎約而
悲愁

秋既に先づ之を戒むるに白露を以てし。冬又之に申ぬるに嚴霜を以てす。愀然

又申之以嚴霜。收二恢焯之孟夏。兮。然欲僚而沈藏。葉蒨色而無色兮。枝煩挈而交橫。顏淫溢而將罷兮。柯柯彷彿而萎黃。蕭蕭之可哀兮。形銷鑠而瘵傷。惟其紛糅而將落兮。恨其失時而無當。

の孟夏を收めて。然して欲僚して沈藏。葉蒨色して色なく。枝煩挈して交々横る。顔淫溢して將に罷れんとし。柯彷彿として萎黄し。蕭蕭として哀むべく。形銷鑠して瘵傷す。其紛糅して將に落ちんとするを惟ひ。其の時を失つて當ることなきを恨む。

- 秋すてに露を置き、冬更に霜を降らす
- 盛夏長夏の氣を感む(候宜は廣大なるをいふ、欲僚は止むるなり)
- 木の葉傷み破れ、枝亂れ横はる
- 木の葉散れ、淫溢の氣を帶ぶ
- 小枝黄ばみ損ず
- 蕭蕭已に落ちて枝葉のみ獨り立つ
- 木々皆傷み枯る(終は血の腐るをいふ)
- 木々紛糅して將に枯れんとし好季を失ひ、衰へに趨くを悲しむ

擊驂轡而下。節兮。聊逍遙以相伴。歲忽忽而道盡兮。恐余壽之弗將。悼余生之不時兮。逢此世之僂擻。澹

驂轡を擊りて節を下し。聊か逍遙して以て相伴す。歲忽忽として道り盡き。余が壽の將からざらんことを恐れ。余が生の時ならずして。此の世の僂擻に逢ふを悼む。澹容與して獨り倚れば。蟋蟀此の西堂に鳴く。心怵惕して震盪す。何ぞ憂ふる所の多方なる。明月を仰いで太息し。列星に歩みて明を極む。

- そへうまの轡をとり徐に行く
- 不遇なる時に生れ、薄暮き世に在るを悲しむ
- 徐々して一圓り立てば
- 心傷み明く
- 列星の下に歩み、一夜を明かす

容與而獨倚兮。蟋蟀鳴此西堂。心怵惕而震盪兮。何所憂之多方。仰明月而太息兮。步列星而極明。

竊悲夫蕙華之曾敷兮。紛旖旎乎都房。何曾華之無實兮。從風雨而飛颺。以爲君獨服此蕙兮。羌無以異於衆芳。閔奇思之不申兮。將去君而高翔。心閔

竊に悲む夫の蕙華の曾敷し。紛として都房に旖旎たりしを。何ぞ曾華の實なくして。風雨に従つて飛颺せる。以て君獨り此の蕙を服すと爲ししも。羌以て衆芳に異なることなかりき。

- 悲しいかな、蕙花、堂下に咲き滿ちしも、風雨のために散り失せたり(曾敷は重なり布く也、旖旎は盛なる貌)
- 楚王は蕙花を愛し、之を佩用せんとせしも、之を輕んじ、衆芳と異なるなかりしを悲しむ(初め屈原を信任せしも後に疎んじたるをいふ)

奇思の通ぜざるを閔んで。將に君を去つて高く翔らんとす。心閔憤して懔懔し。一たび見えて明あるを願ふ。怨なくして生ながら離るゝことを重へば。中結軫

して傷を増す。

● 忠信の君に通ぜざるを悲しみ、國を棄て去らんとせしも ● 内自ら哀念して悲みに堪へず ● 一たび君に遇え、思ふ所を明かにせんことを望む ● 君我を愛む筋なきに、斯く我を放逐せらるるを思へば心結ばれて悲しみを増す(重は深く念ふ也)

豈に鬱陶として君を思はざらんや。君の門以に九重。猛犬猶猶として迎へ吠え。關梁閉ぢて通ぜず。皇天淫溢して秋霖あり。后土何の時にか澌くことを得ん。塊として獨り此の澤なきを守り。浮雲を仰いで永く歎ず。

● 如何て我心に憤念滿ちし一君を思はざるべき ● 君門の奥深く、猛犬(獨人に喻ふ)かしましく吠ゆ ● 門の木 ● 秋天雨すれば土乾くことなし(君用あまねくして民樂むに喻ふ) ● 己ひとり君恩に浴せず浮雲を仰いで歎息するのみ(塊はひとり處る貌)

何ぞ時俗の工巧なる。繩墨に背いて改め錯く。騏驎を却けて乗らず。驚駘に策つて路を取る。當世豈に騏驎なからんや。誠に之を能く善く御すること莫し。

憐之慘悽兮。願一見而有明。重無怨而生離兮。中結軫而增傷。豈不鬱陶而思君兮。君之門以九重。猛犬猶猶而迎吠兮。關梁閉而不通。皇天淫溢而秋霖兮。后土何時而得澌。塊獨守此無澤兮。仰浮雲而永歎。何時俗之工巧兮。背繩墨而改錯。却騏驎

轡を執るものを見るに其人に非ず。故に蹢躅して遠く去る。鳧鴈皆夫の梁藻を啜ひ。鳳愈々飄り翔りて高く擧る。

● 世人の偏りをなし ● 正道に背きて曲事を行ひ ● 騏驎(賢者)を斥け、駘馬(愚者)を用ふ ● 操縦その人を稱す ● 駘馬(賢者)ありとも直に遠く逝る、なり(蹢躅ははねをどるをいふ) ● 鳧雁(愚者)は米や藻(重藻)を食み鳳(賢者)は高く飛び去る

驥而不乘兮。策驚駘而取路。當世豈無騏驎兮。誠莫之能善御。見執轡者非其人兮。故蹢躅而遠去。鳧鴈皆啜夫梁藻兮。鳳愈飄翔而高擧。

關鑿而方柄。吾固知其鉏鋸而難入。衆鳥皆有所登棲兮。鳳獨惶惶而無所集。願銜枚而無言兮。嘗被君之濕洽。太公九十乃顯榮兮。誠未遇其匹合。

● 丸い穴に四角な柄をさげる如く、所詮くちがひて入り難きを知る ● 衆鳥みな棲む所あるに、鳳凰のみは居る所なし(小人皆職位を得、賢者のみ困窮するをいふ、惶々一に逸々に作る、嚙なき貌) ● 口をつぐんで言はずとすも、嘗て君の厚恩を蒙る ● 太公望呂尚は年九十にして榮えたり ● 余の不遇なるは、未だその時を得ざるならん

關鑿而方柄。吾固知其鉏鋸而難入。衆鳥皆有所登棲兮。鳳獨惶惶而無所集。願銜枚而無言兮。嘗被君之濕洽。太公九十乃顯榮兮。誠未遇其匹合。

謂騏驎兮安歸。謂鳳凰兮安棲。變古易俗兮世衰。今之相者兮舉肥。騏驎伏匿而不見兮。鳳皇高飛而不下。鳥獸猶知懷德兮。何云賢士之不處。

騏驎を安にか歸ると謂ひ。鳳凰を安にか棲むと謂ふ。古を變へ俗を易へて世衰へ。今の相る者は肥えたるを舉ぐ。
騏驎、安棲は破外し一意に留めざるをいふ。古道を變じ、世俗を易へ。今の馬を見るものは、たゞ肥馬のみを喜び、能の騏驎を知らず。
騏驎伏し匿れて見えず。鳳皇高く飛んで下らず。鳥獸すら猶ほ徳に懐くことを知る。何ぞ賢士處らずと云はん。
今や騏驎伏し匿れ、鳳皇高く飛去れり(仁者隠れ智者去る)。鳥獸すら徳なきには懐かず、賢士の遺く去りて嘗て徳とざるを何ぞ怪むべき。

騏驎不騏進而求服兮。鳳凰亦不食。君棄道而食。君棄道而不察兮。雖願思其焉得。欲寂寔而絕。端兮。竊不三敢忘。初之厚德。

騏驎に進んで服くことを求めず。鳳亦餒を食つて妄りに食はず。君棄て遠けて察せずんば。忠を願ふと雖も其れ焉んぞ得ん。
騏驎は妄りに車に附かず、鳳皇は妄りに餌を求めず(賢士は妄りに仕へざるに似ゆ)。君賢士を遠ざけてその性を馴せざるやうにては、其の己に思ふ多ん事を求むるも得べからず。
寂寔として端を絶たんと欲するも。竊かに敢て初の厚德を忘れず。獨り悲み愁ふれば其れ人を傷ましめ。馮鬱鬱として其れ安んぞ極らん。

獨悲愁其傷人兮。馮鬱鬱其安極。

○ 路を臨みして去らんとするも、向は。憂、胸に滿ちて振りなれし。

霜露慘悽而交下兮。心尙幸其弗濟。霰雪零糅其增加兮。乃知遭命之將至。願微幸而有待兮。泊莽莽兮。與草同死。願自往而徑遊兮。路懸絕而不通。欲循道而平驅兮。又未知其所。從然中路而迷惑兮。自歷

霜露慘悽として交り下る。心尙は幸に其れ濟らず。霰雪零糅して其れ増し加ふ。乃ち命の將に至らんとするに遭ふことを知る。願くは幸を徹めて待つらんことを。泊莽莽として槿草と同じく死れん。
○ 志なき木だ成らず。降りまじる。運命窮らんとするを知る。空の再來を得つも、野草と共に枯死するならん(泊莽莽はその槿に宛れ返さる貌)。
願くは自ら往きて徑に遊ばん。路懸絶して通ぜず。道に循ひて平に驅らんと欲すれば。又未だ其の從らん所を知らず。然も中路にして迷惑し自ら歴按して誦はんことを學ぶ。性愚陋にして以て褊淺なり。信に未だ從容に達らず。竊に申包胥の氣の盛ならんことを羨す。恐くは時世の固からざることを。
○ 人の媒を持たず、直に往きて王に見えんとするも、邪路をおはひて通じ難し。○ 道を循へて見えんとするも、そのたよりなし。○ 而も路にして猶豫して心まどひ疑ひ、憤を抑へ、誦を學んで自ら歴む。○ 性愚にしてか

按而學。師。性
愚陋以編淺
兮。信未達。乎
從容。竊美。申
包胥之氣盛。兮。恐時世之不固。

たよりたり ⑤ 眞に未だ從容として道に安んずるを得ず ⑥ 申の包胥の忠に效はんとするも時勢すてに固より人に信ぜられざるを恐る (申包胥は楚の大夫にして、吳の滅楚を破つて郢都に入りし時、自ら楚に赴きて之を告げ哀求すること七日、遂に救を得て敵を退けし人なり)

何時俗之工
巧兮。滅規渠
而改鑿。獨耿
介而不隨兮。
願慕先聖之
遺教。處濁世
而顯榮兮。非
余心之所樂。
與其無義而
有名兮。寧窮
處而守高。

何ぞ時俗の工巧なる。規渠を滅して鑿を改む。獨り耿介にして隨はず。願くは先聖の遺教を慕はん。濁世に處りて顯榮なるは。余が心の樂ふ所に非ず。其の義なくして名あらんよりは。寧ろ窮處して高きを守らん。
① 法度を捨てて道を變ふ ② 濁り時俗に隨はず、先王の遺教を慕はんとするなり (耿介は俗と合はざるを云ふ) ③ 不顧にして美名あらんよりは、むしろ剛して行を高くせん

食不踰而爲
飽兮。衣不
爲溫。竊慕
詩人之遺風

食は嫌もして飽くことを爲さず。衣は苟もして温きことを爲さず。竊に詩人の遺風を慕ひ。願くは志を素餐に託せん。寒充備して端なく。泊莽莽と

詩人之遺風
兮。願託志素
餐。而無端兮。
泊莽。衣以禦冬
兮。恐。蓋死而
不得見。乎。陽
春。

して根なし。衣裘の以て冬を禦ぐことなくば。恐くは蓋死して陽春を見ることを得ざらん。
① 古詩人の遺風を慕ひ、素餐することなからんとするなり (遺風は禮節に、君子素餐を稱するをいふ、素餐とは功なくして徳を食むをいふなり) ② 心届して爲すべき所を知らず ③ 忽ち死して、春に逢ふことなからん

白日晚晚其

白日晚晚して其れ將に入らんとし。明月銷鑠して滅け毀る。歲忽忽として逝り盡

將入兮明月銷鐸而滅毀。歲忽忽而逝。盡兮老冉冉而逾弛。心搖悅而口委兮。然倡悵而無冀。中憚憚之悽愴兮。長太息而增歎。

き。老冉冉として愈々弛る。心搖悦して日に委ふも。然も倡悵して冀ふなし。中憚憚して悽愴し。長太息して歎を増す。

● 日暮れて將に入らんとし、月また靡々缺く ● 歲月忽々として老いよく迫り至る ● 心に空淵を顧ふも、遂にその望なきを知り、悲傷歎息するのみ

年洋洋以日往兮。老嚶靡而無處。事壘壘而留而留。何汜濫之浮雲兮。森叢叢而蔽此明月。忠昭昭而願見兮。然露晞而莫達。

年洋洋として以て日に往き。老嚶靡として處なし。事壘壘として進むことを留へども。塞淹留して躊躇す。

● 年去りて流水の如し ● 徒に老いて安んずるところなし ● 事、志と通ひ、位に垂むことを得ず、固執徘徊するのみ

願皓日之顯行兮。雲濛濛而蔽之。竊不自聊。而願忠兮。或黜黜而而汗之。堯舜之抗行兮。瞭冥冥而薄天。何險巖之嫉妬兮。被以不慈之偽名。彼日月之照明兮。尙黜黜而有瑕。何況一國之事兮。亦多端而膠加。被二荷之憂。憂一兮。然潢洋

皓日の顯行を願へども。雲濛濛として之を蔽ふ。竊に自ら聊らずして忠を願へども。或は黜黜して之を汗す。

● 白日の顯かならんことを願ふも、雲立ちて之を蔽ふ (羣小君國を蔽ふ) ● 自ら料らず敢て忠を馳し功を立てんとするも、却つて讒人に巧し辱めらる (賢は垢なり) ● 堯舜の抗行。瞭冥冥として天に薄る。何ぞ險巖の嫉妬し。被らしむるに不慈の偽名を以てせる。 ● 精輝の高徳は明にしん天にまされり ● 小人はなほ之を妬み不慈。無名を被らしむるは何故ぞ (位をその子に譲らざりしを以て不慈と爲すをいふ)

而不可帶。既
驕美而伐武
兮。負左右之
耿介。憎風倫
之倍美兮。好
夫人之慷慨。
衆踐蹀而日
進兮。美超遠
而逢遇。農夫
輟耕而容與
兮。恐田野之
蕪穢。事綿綿而多私兮。竊悼後之危敗。世雷同而炫耀兮。何變譽之昧昧。

を伐り。左右の耿介を負ふ。風倫の倍美を憎み。夫人の慷慨を好す。衆踐蹀して日に進み。超遠を美して逢遇す。農夫耕を輟めて容與す。恐くは田野の蕪穢せんことを。事綿綿として私多し。竊に後の危敗を悼む。世雷同して炫耀す。何ぞ毀譽の昧昧たる。

● 蕪穢の無衣を被らんとするも、敗れやすくして著くべからず ● 楚王はその美質と武威とを誇り、又左右の異議を容れず ● 以下田野、官邸に出づ ● 農夫は耕作を輟して遊び嬉しむ ● 國事に私田多し ● 俗人私利して相類し ● 世に私利多し

今脩飾而竄
鏡兮。後尙可
以竄藏。願寄
言夫流星之
儻忽而難當
卒。遂蔽此浮
雲兮。下暗漠
而無光。

今脩飾して鏡を竄はば。後尙ほ以て竄藏すべし。願くは言を夫の流星に寄せん。羌儻忽として當ひ難く。卒に此の浮雲に蔽せられて。下暗漠として光なし。

● 王、今比して徳を修め政を行ひ、よく往事を考へて自ら鑑みば、その身隠れて滅亡せざるべし ● 一言を寄せて思慮せんとするも、遂にその人に過り難し(流星は君側の良臣に喩ふ) ● 日の雲に蔽はる、如く、小人に妨げられ、思慮の心を遮らざるを得ず

堯舜皆有
舉任兮。故高
枕而自適。諒
無怨於天下
兮。心焉取此
休暢。秦驪驥
之瀏瀏兮。以
安用夫強策。
諒城郭之不
足恃兮。雖重
介之何益。
道翼異而無
終兮。惟惜惜
而愁約。生天
地之若過兮。
功成而無
效。願沈滯而無

堯舜皆舉任する所あり。故に枕を高うして自適し。諒に天下に怨なし。心焉ぞ此の休暢を取らん。驪驥の瀏瀏たるに樂れば。安んぞ夫の強策を用ひん。諒に城郭の恃むに足らざる。重介する雖も何の益あらん。

● 堯舜が用ひたる賢はあり ● この憂國に達ふことなし ● 驪馬の疾きものに樂れば(よく賢人を用ふるに喩ふ) ● 諒は水の流る、諒は取するに強ひて諒の弊なし(民自ら治まり、刑罰の要なきに喩ふ) ● 甲(上)をひ(下)を重ねる、惜むに足らざる ● 恐れ備みて備りなし ● 心、憂ひて止まらず(約は窮るなり) ● 生涯はたゞ路を行くが如く、何事をもなさずして死に近かり

沈滯して見るなからんことを願ふも。尙ほ名を天下に布かんと欲す。然く漢洋と

見兮。尙欲布
名乎天下。然
潢洋而不遇
兮。直恂恂而
自苦。
莽兮。洋而無
絲津。忽翺翔
之焉。薄。國有
驥而不知。棄
兮。焉。皇皇而
更索。
零感。靈於車
下兮。桓公聞
而知之。無。伯
榮之善相兮。
今誰使乎。嘗
之。罔流涕以
聊慮兮。惟著
意而得之。紛
純純之願忠兮。妬被離而邪之。

して遇はず。直に恂恂して自ら苦む。

● 隠れて自ら修めんとし、なほ名を世に傳へんと欲せり ● 時に後れ一世に遇はず、愚にして自ら苦めり
● 潢洋として極なきも。忽翺翔して焉に薄らん。國に驥あれども棄ることを知らず。焉んぞ皇皇として更に索めん。

● 四將は廣くして驥りなきも、逐れ去るべき所なし ● 楚國すでに命を用ひざれば、他國に行きて求むるもなし

零感車下に讒ひ。桓公聞いて之を知る。伯榮の善く相ること無くんば。今誰か之を譽めしめん。罔として涕を流して以て聊か慮る。惟れ意を著けて之を得たり。紛純純として忠を願へども。妬被離して之を邪ぐ。

● 伯榮の馬を相する如く、王よく賢士を見るの明なくば、誰か之を稱賛せんや ● 専心忠を盡さんとすも、他人に嫉み妬げらる(純々其事一の與なり)

意而得之。紛純純之願忠兮。妬被離而邪之。

願賜不肖之
軀。而別離兮。
放。遊。志。手。雲
中。雲。精。氣。之
搏。搏。兮。驚。諸
神。之。湛。湛。兮。
白。霓。之。習。習
兮。歷。羣。靈。之
豐。豐。
左。朱。雀。之。茨
芟。兮。右。蒼。龍
之。躍。躍。兮。雷
師。之。闐。闐。兮。
通。飛。廉。之。衝
衝。
前。輕。輦。之。鏘
鏘。兮。後。輻。輳
之。從。從。兮。雲
旗。之。委。蛇。兮。
扈。屯。騎。之。容

願ふらくは不肖の軀を賜りて別離し。放。に。志。を雲中に遊ばしめんことを。精氣の搏搏たるに樂り。諸神の湛湛たるを驚せ。白霓の習習たるを駭にし。羣靈の豐豊たるを歴。

● 身を乞うて去り、愚ふまゝに大界に遊ばんとし ● 日月の雲きに樂り、神々を伴ひ馳せしめ(擲々は闐々に同じ、湛々は厚く集るなり) ● 白霓をモへうまとし羣靈の集れる所を歴(習々は飛び動く貌なり)

朱雀の芟芟たるを左にし。蒼龍の躍躍たるを右にし。雷師の闐闐たるを屬け。飛廉の衝衝たるを通ず。

● 朱雀(南方の星)の飛び舞けるを左にし、蒼龍(東方の星)の躍り進むを右にし ● 習習を従へ、風神に追かし(闐々は鳴る聲、衝々は行く貌なり)

輕輦の鏘鏘たるを前にし。輻輳の從從たるを後にし。雲旗の委蛇たるを載て。扈屯騎の容容たるを屬ふ。計るに専專として化すべからず。願くは遂に推して賊きを爲し。皇天の厚徳に頼りて。還つて君の恙無きに及ばん。

容計專專之
不可化兮願
途推而爲臧
輒皇天之厚
德兮還及君
之無恙。

● 輕車を前にし、輻重車を後にし(輻は密ある車をいふ、輻々從々は共に鈴の聲なり) ● 雲霞を長くなびかせ
從騎を隨へたり ● 余はなほ寡ち君のために計り、棄てて他に行くことを得ず ● 故に今の心を推して善をな
し ● 君の恙なき中にまた歸りて之を輔けん

卷之九

招魂第九

(王)招魂は宋玉の作りし所なり。招とは召なり。手を以てするを招といひ、言を以てするを
召といふ。魂とは身の精なり。宋玉屈原の忠にして斥棄せられ、山澤に愁慙し、魂魄放
佚し、其の命將に落ちんとするを憐哀す。故に招魂を作り、以てその精神を復し、その
年壽を延さんと欲し、外は四方の惡を陳べ、内は楚國の美を崇め、以て懷土を諷諫し、
その覺悟して之を還さんことを冀ふ。

朕幼清以廉
潔兮身服義
而未沫。主此
盛德兮牽於
俗而燕穢。上
無所考此盛
德兮長離殃
而愁苦。

● 屈原に代りていふ ● 道徳を主とするも、俗に引かれて惑ふことあり(自ら戒めていふなり) ● 王我が盛
徳を考へず

帝告巫陽曰。有人在下。我欲輔之。魂魄離散。汝筮予之。

帝巫陽に告げて曰く。人あり下に在り。我之を輔けんと欲す。魂魄離散す。汝筮して之に予へよと。

● 天帝、陽と名くる巫(みこ)に告げていふ ● 下土に賢人(屈原)あり、我之を輔けんと思へり ● その魂魄オデに身を離れたり、汝之をトひて所在を求め、その身に歸り來らしめよと

巫陽對曰。掌蓍。上帝其命。難從。若必筮予之。恐後之謝。不能復用。巫陽焉。

巫陽對へて曰く。掌蓍は。上帝其命に従ひ難し。若し必ず筮して之に予へば。恐くは後謝りて。復た巫陽を用ふることを能はざらんと。

● 夢の吉凶を司る職にて巫陽自らいふなり ● 夢の吉凶は占ふべきも、魂魄の在る所は占ふべからず、よりてその命に従ひ難し ● 善人占筮を輕んじ、之を用ひざるに至るべし

乃下招曰。魂兮歸來。去君之恆幹。何爲乎四方些。舍君之衆處。而離彼不祥些。魂兮歸來。東

乃ち下り招きて曰く。魂や歸り來れ。君の恆幹を去りて。何爲れぞ四方にする。君の衆處を舍いて。彼の不祥に離へる。

● 君の常居を離れ、何故に四方に行けるぞ ● 君の衆處(楚)を離れ、何故に不祥の郷に走れるぞ

魂や歸り來れ。東方には以て託くべからず。長人の千仞なるありて。唯だ魂是れ

方不可託。些。長人千仞。唯魂是索些。十日代出。流金鑠石些。彼皆習之。魂往必釋些。歸來歸來。不可託些。

索む。十日代々出で。金を流し石を鑠す。彼皆之に習る。魂往かば必ず釋けん。歸り來れ歸り來れ。以て託くべからず。

● 身長千仞の巨人あり、人の魂を求めて食へり ● また扶桑の大樹あり、十日代々く上に出で、その鑠きこと金石をも熔せり

魂兮歸來。南方不可止。些。離題黑齒。得入肉而祀。以其骨爲醢。些。蝮蛇秦秦。封狐千里些。雄虺九首。往來愴忽。吞人來。益其心些。歸來歸來。不可久淫些。

魂や歸り來れ。南方には以て止るべからず。離題黑齒あり。人の肉を得て以て祀り。其骨を以て醢と爲す。蝮蛇秦秦として。封狐千里。雄虺九首あり。往來愴忽。人を呑んで以て其の心を益す。歸り來れ歸り來れ。以て久しく淫るべからず。

● 額に入鬚し齒を噛めたる人あり ● 冉蛇集り、大狐千里に走れり ● 虺(蛇の一種)は一身に九つの首あり 走ること速にして人を呑みて身を肥せり

以益其心些。歸來歸來。不可久淫些。

魂兮歸來。四方之害。流沙千里。些。旋入雷淵。些。散而不。可。止。些。秀而得。脫。些。其外。曠。宇。些。亦。蟻。若。象。玄。蠶。若。些。五。穀。不。生。些。菅。是。食。些。其。土。爛。人。求。水。無。所。得。些。彷彿。無。所。倚。廣。大。無。所。極。些。歸。來。歸。來。恐。自。遺。賊。些。

魂や歸り來れ。西方の害。流沙千里。旋りて雷淵に入り、糜散して止るべからず。秀にして脱るゝを得れども。其外曠宇。赤蟻象の若く。玄蠶壺の若し。五穀生ぜず。菅を叢めて是れ食ふ。其土人を爛す。水を求むれども得る所無し。彷彿して倚る所無く。廣大極る所無し。歸り來れ歸り來れ。恐らくは自ら賊を遺さん。

- 雷や沙淵の地あり、恰も淵に墮つる如く、沙土飛散して踏み止り難し
- 四方曠やかなり
- 赤き蠶
- 黒き蟻
- 醜惡人を爛らし、水を求むれども容易に得難し

魂兮歸來。北方不可。以。止。些。增。冰。峨。峨。飛。雪。千。里。些。歸。來。歸。來。不。可。以。久。些。魂。兮。歸。來。君。

魂や歸り來れ。北方には以て止るべからず。増氷峨峨として。飛雪千里。歸り來れ歸り來れ。以て久しくすべからず。

魂や歸り來れ。君天に上ることなかれ。虎豹九關。下人を啄害す。一夫九首。

無。上。天。些。虎。豹。九。關。啄。下。人。些。一。夫。九。首。拔。木。九。千。些。射。血。從。日。往。來。些。仇。仇。些。懸。人。以。娛。些。投。之。深。淵。些。致。命。於。帝。然。後。得。返。些。歸。來。歸。來。往。恐。危。身。些。

木を抜くこと九千。豺狼從目して。往來仇仇たり。人を懸けて以て娛み。之を深淵に投ず。命を帝に致して。然して後に嘆ることを得。歸り來れ歸り來れ。往かば恐らくは身を危うせん。

- 虎豹の類、九重の門を守り、豈り行くものを噛み殺せり
- た一身九首の大犬あり、日に大木九千本を抜けり
- 豺狼從目を懸にし、羆がりて往來し
- 人の頭を楯に掛けて射び、後に深淵に投じ
- 之を天帝に復命し、然る後に返れり

魂兮歸來。君無。下。此。幽。都。些。土。伯。九。約。其。角。鬢。鬢。些。我。朕。血。搏。逐。人。懸。懸。些。參。日。虎。首。其。身。若。牛。些。此。皆。甘。人。歸。來。歸。來。恐。自。遺。災。些。

魂や歸り來れ。君此の幽都に下ることなかれ。土伯の九約。其角鬢鬢たり。我朕血搏逐り來れ歸り來れ。恐らくは自ら災を遺さん。

- 地下の暗き處
- 土伯は身獲九つに屈所し、角甚だ鋭く
- 脊肉厚く、鬢鬢血に染み、走りて人を誘ひ
- 附三つありて首に虎の如し

魂兮歸來入
 脩門些。工祝
 招君背行先
 些。秦篝齊縵
 鄭綿絡些。招
 具該備永嘯
 呼些。魂兮歸
 來反故居些。
 天地四方多
 賊盜些。像設
 君室靜開安
 些。
 高堂邃宇。檻
 層軒些。層臺
 累榭。臨高山
 些。網戶朱綬。
 劉方連些。冬
 有突夏。川谷
 禠復。流澌浚
 些。光風轉蕙。汜崇蘭些。經堂入奧。朱塵筵些。

魂や歸り來つて脩門に入れ。江祝君を招いて背行して先ち。秦の篝齊の縵。鄭の綿絡へり。招具該ね備りて永く嘯呼す。魂や歸り來つて故居に反れ。

楚都郢城の門 男巫の辭に巧なる者、蓋世兼行して君を迎へ 妻妾二國の縵を縵り、鄭の縵を八れて 魂の縵を作り(蓋は糸を入る、暫なり) 長國大呼して、君を招く
 天地の四方賊盜多し。君が室を像設する。靜閑にして安し。

君が室は靜かに安らかに遊ちられたり
 高堂邃宇。檻軒を層ねて。層臺累榭。高山に臨めり。網戸朱綬。方を刻して連れり。冬は突夏あり。夏室は寒し。川谷徑り復り。流れて澌浚たり。光風蕙を轉じ。崇蘭を汜し。堂を經奥に入り。朱の塵と筵とあり。

吳深き家 闕干 門戸に網の目の如き綺を刻み、朱泥を踏む、方形の紋様を通ぬ 奥深き室あり。「夏」朱本「夏」に作る、從ふべし 此一句朱本によりて補ふ 晴る、日の風、蕙を揺がし、雲縵を動かす 朱のなげしと、たかむしりとあり

砥室翠翹挂
 曲瓊些。翡翠
 珠被爛齊光
 些。羅綺張些。纂
 組綺縞結琦
 璫些。
 室中之觀多
 珍惟些。蘭膏
 明燭華容備
 些。二八侍宿
 射遞代些。九
 侯淑女多迅
 衆些。盛鬋不
 同制實滿宮些。

砥室翠翹、曲瓊を掛け。翡翠珠被、蘭として光を齊しうす。蘭阿壁を拂つて、羅綺張れり。纂組綺縞、琦璫を結べり。

石楹の室に翡翠の羽を飾とし、玉鈎を掛け 翡翠の羽と珠玉の衣と、光彩爛々たり 柔なる器にて室隅を飾り、綺縵の帷を垂れ 綉繡ある白綺に組紐を付け、美玉を結ぶ

室中の觀珍惟多し。蘭膏の明燭、華容備る。二八宿に侍し、射へば遞に代る。九侯の淑女、多く迅衆なり。盛鬋制を同じうせずして、實に宮に滿てり。

蘭膏の油を焚き、華かにして美し 美女十六人を侍せしめ、厭く時は互に代りし また九國諸侯の淑女あり、才徳すぐれて衆女に勝れり 髪飾り美しく、その姿各々異れり(朝に雲縵を敷りて下に睡れ、飾とするをいふ)
 容態の好比、順ひ彌りて代る。弱顏固植、審其れ意あり。綺容脩態、洞房に緝れり。蛾眉曼睩、目光を騰ぐ。靡顏膩理、遺視矚なり。離榭脩幕、君の間に

儂頰三洞房一些。
 蛾眉曼睩日
 賦理造視聯
 些。離樹倚幕
 侍君之閒一些。
 翳帷翠條飾
 高堂一些。紅壁
 沙版玄玉之
 梁些。仰觀刻
 柄畫龍蛇一些。
 坐堂伏檻臨
 曲池一些。芙蓉
 始發雜芙蓉一
 些。紫莖屏風
 文緣波些。文異
 豹飾侍二陂陁一
 些。軒轅既低步
 騎羅些。蘭薄戶
 樹瓊木籬些。魂
 兮歸來。何遠
 爲些。

侍す。

① 顔正しく、心堅く、意堅愛すべし ② 美しくして心慈く、旁室に満ちたり ③ 眉長く、美目に光彩あり
 ④ 顔のきめ、こまかにして、光潤あり ⑤ 目を圓げ一還く視る ⑥ 列樹の幕中に坐し、君の清閑に侍す
 ⑦ 翳帷翠條高堂を飾る。紅壁沙版玄玉の梁。仰ぎ觀れば柄を引んで龍蛇を畫
 き。坐堂伏檻曲池に臨む。芙蓉始めて發いて芙蓉を雜へ。紫莖屏風、文波に緣
 る。文異豹飾して陂陁に侍し。軒轅既に低りて步騎羅る。蘭薄戶樹、瓊木籬
 あり。魂や歸り來れ、何ぞ遠きことをなさん。

- ① 赤き壁、丹沙の軒版、黒き玉を飾れし梁
- ② 荷葉風を防ぎ、波紋細かに記り
- ③ 虎豹の皮、異彩の飾をなせる者、長陞に侍し
- ④ 輕車とノマリ、歩騎列る
- ⑤ 蘭の薄戸傍に茂り美しき樹を籬とす

室家遂宗食

室家遂に宗んで、食多方ならん。稻粱麥を稱んで、黄梁を挈ふ。大苦鹹酸辛

甘行る。肥牛の臙、臙若として芳し。酸きと苦きとを和して吳羹を陳ね。龍炮蒸稻漿あり。龍酸丸を臙にし。露雞蠟を臙にし。臙ねて爽れず。

- ① 臙之を臙み、食を説くよりも方法多し
- ② 臙臙として、香し
- ③ 臙法によつてあつものを臙ね
- ④ 煮たる臙(すつば)と焙りたる小羊と甘藷の汁とあり
- ⑤ 臙を煮て臙心を帶びし
- ⑥ 臙のまろ煮を作り
- ⑦ 多く臙ねて臙收せず

多方些。稻粱
 稱麥挈黄梁一
 些。大苦鹹酸
 辛甘行些。肥
 牛之臙臙若
 芳些。和臙若
 苦臙吳羹一些。
 龍臙炮蒸有
 臙臙一些。露
 雞臙臙屬而
 不爽些。

臙臙臙臙屬而不爽些。

相教室何儀儀あり。瑤漿勻を露ひて羽觴に實てり。糟を挫りて凍飲し、耐
 ぐこと清涼なり。華酌既に陳ねて瓊漿あり。歸り來りて故室に反れ。敬んで
 妨げ無けん。

- ① 米の粉を水にこね、環狀にして油煎りにしたるもの
- ② 醴をまぜて作りし餅
- ③ 餗(あめ)
- ④ 美しき飲物を酌み、翠羽を飾れる觴(さかづき)に滿てたり
- ⑤ 冷きま、飲み
- ⑥ また美醴を酌へ、酒の揚きをとむるに用ふ

着羞未通女
樂羅些。激
按鼓造新歌
些。涉江采菱
發揚荷些。美
人既醉朱顏
眩些。娛光眇
視日曾波些。
被文服織麗而

着羞未だ通ぜず女樂羅る。鍾を激ね鼓を按ちて新歌を造る。涉江采菱揚荷を
發し。美人既に酔うて朱顔眩けり。娛光眇視して目波を會ぬ。文を被り織を
服して麗にして奇ならざらんや。長髮曼鬢陸離たり。

● 上き金飾を列ねしよりにて ● 楚の歌曲涉江采菱揚荷等を發し ● 美人の戯るゝ目、波紋の轉する如く ●
對稱(文)羅折(麗)の美しき衣服を著け ● 髮長くしてつや／＼し

二八齊容起
鄭舞些。狂若
交竿撫案下
些。竿瑟狂會
擯鳴鼓些。宮
庭震驚發激
楚些。吳歛蔡
謳奏大呂些。
士女雜坐亂
而不分些。放

二八容を齊うして鄭舞を起す。狂交竿の若く撫案下る。竿瑟狂會して鳴鼓を
擯ち。宮庭震驚して激楚を發し。吳歛蔡謳、大呂を奏づ。

● 十六人の美女の擯ひて鄭國の舞をなし ● 衣冠何轉して竿を交ふる如く、手て抑へて徐行し ● 高く清
き聲を發し ● 吳の歌、蔡の歌、大呂の調に叶ふ

士女雜り坐して亂れて分れず。組纒を放激して班として其れ相紛る。鄭衛の妖玩
來つて雜へ陳ね。激楚の結獨り秀で先つ。

● 座席亂れて男女の區別なく ● 印段と冠の細とを解き亂し ● 美女濼り轉り ● 聲高くして清く、美女
に先ちて進む

激組纒班其
相紛些。鄭衛
妖玩來雜陳
些。激楚之結獨秀先些。

葛藟象茶有
六簾些。分曹
竝進道相迫
些。成桌而率
呼五白些。晉
制犀比費白
日些。鐘鐺搖篋揆粹瑟些。

葛藟象茶六簾あり。曹を分つて竝ひ進んで道つて相迫る。桌を成して率つて五
白と呼ぶ。晉制の犀比白日を費し。鐘を鏗き篋を搖かして粹瑟を揆らす。

● 遊戯の名にさいを投じて勝負を争ふもの ● 勝負の名にて、最も勝てるを犀といひ、倍し勝てるを率といひ
● 晉の製法にて、犀角を煮めて彫りしさい ● 並進に時を費し ● 鐘を架くる木

娛酒不廢沈
日夜些。蘭膏
明燭華燈錯
些。蘭芳假些。人
有所極同心

酒を娛んで廢ます日夜に沈み。蘭膏の明燭華燈錯る。至思を結び撰べて蘭芳
假なり。人極むる所ありて心を同じうして賦ひ。酌飲歡を盡して先故を樂ま
ん。魂や歸り來つて故居に反れ。

● 各詞賦を作り、その妙なること蘭の香の遠く傳はる如く ● 樂みを極め、心を同じうしてうたひ ● 酒を

酒を飲み盡し、舊時の愉快を再びせん

亂に曰く。

獻歲の發春、汨として吾南に征く。葦蕪葉を齊しうして、白芷生ひたり。路廣江を貫き、長薄を左にす。沼に倚り、濼に畦して、遙に望むこと博し。

● 年の初、早春の時、余遙に南方に行く ● 沼に倚り、濼を横ぎり、廣くして目に障るものなし

江一兮左長薄倚沼畦濼兮遙望博。

青驪の結駟千乗を齊しうす。懸火延き起して、玄顔然せり。歩及び驟處、誘き馳せて先つ。驚するを抑へて、若ひ通じて車を引きて、右に還れり。王と夢に趨りて、後先を課す。君王親ら發して、青兕を憚れしむ。

● 曾て楚王の臨せし時、駟車千乘に各々青毛の四馬を羈し ● 火を林木に放ちて天を焦し ● 歩む者あり、走るものあり、止まるものあり ● 余之を驚きて先驅し ● 順序を整へて道を通じ ● 王と夢に走り十卒の先後を考へ ● 王自ら射て青兕牛を得たり(往時の狩獵を懐ひていふ)

青驪結駟兮
齊千乘懸火
延起兮玄顔
然步及驟處
兮誘馳先抑
驚若通兮引
車右還與王
擅夢兮課後
先君王親發
兮憚青兕

朱明夜に承いで時以て淹しうすべからず。臯蘭徑を被ひて、斯に路漸さる。

● 日月空しく過ぎ、久しく河地に止り難し(朱明は日なり) ● 春に入りて、鴈渡りて征を覆ひ、水漲りて路を浸せり(臯は蘭曲なり)

湛湛たる江水上に楓あり。目千里を極めて心を傷ましめて悲む。魂や歸り來れ江南を哀しむ。

● 水深き江上には、たゞ楓樹の茂れるあるのみ ● 千里の廣きを望み、悲しさに心を傷ましむ

朱明承夜兮
時不可以淹
臯蘭被徑兮
斯路漸
湛湛江水兮
上有楓目極
千里兮傷心
悲魂兮歸來
哀江南

卷之十

大招第十

(王) 大招は屈原の作りし所なり。或は景差といふも疑ふらくは明かなる能はず。屈原放逐せらるゝと九年の憂思煩亂、精神越散して形と離別し、命將に終らんとして行ふところ遂げざるを恐る。故に憤然して大に其の魂を招き、盛に楚國の樂しきを稱し、懷裏の德を崇め、以て三王能く賢を任用し、公卿明察して、能く人を薦擧し、宜しく之を輔佐して以て至治を興すべきに比し、因つて以て風譚して、己の志を達す。

青春讞を受けて白日昭かなり。春氣奮發して萬物遽ふ。冥凌決行して魂逃るることなかれ。魂魄歸り徠れ、遠く遙にするなかれ。

- 萬物凋謝の冬につぎ、春の日照かなり
- 萬物奮ひて生育す
- 幽冥の中をかたより走りて
- 遠くは逃るゝなかれ

青春受讞白日昭只。春氣奮發萬物遽只。冥凌決行魂無逃只。魂魄歸徠無遠逝一只。

魂乎歸徠無東無北只。東有大海淵水激激只。螭龍並流上下悠悠只。霧雨淫淫白皓膠只。魂乎無東湯谷宋只。

魂や歸り徠れ、東することなかれ西することなかれ南することなかれ北することなかれ。東に大海あり、淵水激激たり。螭龍並に流れて、上下すること悠悠たり。霧雨淫淫、白くして皓膠たり。魂や東することなかれ。湯谷宋たり。

- 魂を沈留せしむる水
- 廣く流るゝ膠
- 雨久しく止まらず、白く亂れて降る
- 日の出づる所

魂乎無南。南有炎火千里。蜺蛇蜒只。山林險隘虎豹蜿只。鰐鬪短狐王虺鸞只。魂兮無南。賊傷躬只。魂乎無西。四方流沙滂洋只。豕首縱

魂や南することなかれ。南に炎火千里あり蜺蛇蜒たり。山林險隘虎豹蜿たり。鰐鬪短狐王虺鸞たり。魂や南することなかれ賊傷を傷けん。

- 炎路の地千里互れり
- 長くうねる貌
- はらばひ行く貌
- 魚の名
- 鰐ともいふ
- うはばみありて首を縦げたり

魂や西することなかれ。西方には流沙滂洋洋たり。豕首縱目髪を被りて鬣たり。長爪踞牙談しみ笑ひて狂ふ。魂や西することなかれ害傷多からん。

- 沙漠の地廣くして限なし
- 怪しき神あり、頭は、猪の如く目を縦にして、鬣髪を被る

目被髮鬢只。長爪歸牙諛笑狂只。魂乎無兮西多害傷只。

魂乎無兮北極。有寒山一徑。龍漚只。伐水不可涉。深不可測。只。大白顛顛。寒凝凝只。魂乎無兮往北極。只。魂歸徠。閒以靜。只。自志荆楚。安以定。只。送志究兮欲心。安只。窮身安樂年壽延。只。魂乎歸徠。樂不可言。只。

魂や北することなかれ。北に寒山あり、遠龍として絶なり。伐水渉るべからず、深うして測るべからず。天白くして顛顛寒くして凝凝たり。魂や往くことなかれ、北極に益てり。魂魄歸り徠れ、閒に以て静かなり。自ら荆楚に恣にして、安かに以て定かなれ。志を逞しうし欲を究めて心意安からん。身を窮めて安んじ樂しみて年壽延ぶ。魂や歸り徠れ樂言ふべからず。

- 高く登えて草木なし
- 暫望白く歸き、水渉りたり
- 寒に北極に滿つ
- 楚國に居り、心のまゝにし
- 安んじ樂しみて年壽延ぶ
- 安んじ樂しみて年壽延ぶ
- 安んじ樂しみて年壽延ぶ

五穀六切設。菹梁只。鼎臠望。盈望和致芳。只。内鵠鵠鵠。

五穀六切菹梁を設く。鼎臠望に盈ちて和芳を致す。鵠鵠鵠を内れ秋羹を味ふ。魂や歸り徠れ嘗むる所を恣にせん。

- 地肥えて五穀の高き六切に及び
- 臠臠(草の實にて香しくして蒸かなるもの)の飯を備ふ
- 鼎中の肉

味二射羹只。魂乎歸徠。志所。

よく煮附し、羹のまゝに盛滿ち。肉柱、薑等を加へ芳香を添む。臠肉に鵠鵠鵠の肉を入れ、射の肉をも交ふ。

鮮鵠甘鴉和。楚酪只。醢醢。苦狗豨。五尊。只。吳醢。菹。不沽薄。只。魂兮歸徠。志所。

鮮鵠甘鴉和し。豚を醢にし狗を苦にし苴蓐を膾にす。吳醢菹薄ならず。魂や歸り徠れ擇ぶ所を恣にせん。

- 新鮮なる大鵠と鴨を煮、乳汁を交ふ
- 狗の膾を骨にひたし、苴蓐を細く切りてまますとす
- 吳法によりて醢醢を調へ、苴蓐(水菜の名)をとりてあへものにする
- 薄からず薄からず、味甘美なり

炙鵠煮免。鴉鵠臠。雀遽爽存。魂や歸り徠れ麗めて以て先んぜん。

- 臠のあぶりもの鵠のむしもの、鴉の肉を醢ね
- ふきのいりもの、雀の臠を作り、煎丁を促して醢に煮む

四附并。執し、臠に麗らず。清馨凍飲。役しきに歌らしめず。醢醢の白臠楚の澀に和す。魂や歸り徠れ遽かに惕れず。

- 四種の醢酒を和し
- 冷かまゝに飲み、臭しき者にすらしめず
- 臠の醢(ひとよぎ)を楚の酒に和す

(楚はかうぢなり)

代秦鄭衛竿を鳴らして張る。伏戲の駕辨楚の勞商。揚阿を謳ひ和いで趙蕭倡ふ。魂や歸り徠れ空桑を定めん。

● 代秦鄭衛諸國の樂工等を吹きて音樂をなし ● 駕辨楚商揚阿等の曲につぎ續の樂工等を吹く ● 空桑(琴の名)を彈じ、正しき音節を定めん

二八舞を接ねて詩賦に投す。鍾を叩ち磬を調べて人を娛しましめ亂め。四上氣を競ひ聲を極めて變る。魂や歸り徠れ歌謔を聴け。

● 十六人の美女、歩を連ね舞ひて歌に合はせ ● 音樂の調、羽より宮に上り ● 磬を敲め曲を變へてさまざま歌ひ進一ツ所を回け

朱唇皓齒婢かにして以て嬌し。徳を比へて好く聞かに習ひて以て都かなり。豐肉微骨調ひて以て娛しむ。魂や歸り徠れ安かにして以て舒かなり。

● 一人の美女、唇赤く歯白く ● 才器すぐれ、聲に習ひてみやびやかなる ● 曲調かに習得やかに、安んじ、

のひたまぎ樂しむ

嬌目笑むに宜しうして娥眉曼し。容則秀雅、穉き朱顔あり。魂や歸り徠れ靜かにして以て安らかならん。

● また一人の美女、ながしめに眼で笑面よく ● 穉さすぐれ雅かなり

嬌脩滂浩として麗しうして以て佳く。會頰倚耳曲眉規なり。滂心綽態姣麗施す。小腰秀頸鮮卑の若し。魂や歸り徠れ思怨移らん。

● また一人の美女、身の丈高く體大きく ● 頰の肉肥え ● 耳袋(み)たばしなやかに(倚は顔につた、突起せざるなり) ● 眉圓く ● 心腹かに、態度もだやかに ● 同調く頸秀て、鮮卑帯をしめたるに似たり(鮮卑は胡國の名なり) ● 髪も滑を去るならん

易中の利心以て動作し。粉白く黛黒く芳澤を施す。長袂面を拂つて善く客を留む。魂や歸り徠れ以て昔を娛まん。

● また一人の美女は心相けて動作し(易は和の意なり) ● 芳しき香(おぼろ)をつけ ● 長き袖を顔にかざし

訓以娛只。魂手歸徠安以舒只。嬌目宜笑娥眉曼只。容則秀雅穉朱顔只。魂手歸徠靜以安只。嬌脩滂浩麗以佳只。會頰倚耳曲眉規只。滂心綽態姣麗施只。小腰秀頸若鮮卑只。魂手歸徠思怨移只。易中利心以動作只。粉白黛黒施芳澤只。長袂拂面

手歸徠不三逃傷只。代秦鄭衛鳴竿張只。伏戲駕辨楚勞商只。揚阿謳和以趙蕭倡只。魂手歸徠定三空桑只。二八接舞投詩賦只。叩鍾調磬娛人亂只。四上競氣極聲變只。魂手歸徠聽三歌謔只。朱唇皓齒婢以嬌只。比徳好聞習以都只。豐肉微骨

善麗客只。魂
乎歸徠以娛
昔只。
青色直眉美
目媚只。帶
奇牙宜笑媽
只。豐肉微骨
體便娟只。魂
乎歸徠恣所便只。

● 夕を樂しむによろし(昔と夕とは普通なり)
青色の直眉美目媚たり。帶輔奇牙笑むに宜しくして媽たり。豐肉微骨體便娟たり。魂や歸り徠れ便する所を恣にせん。
● また一人の美女、髪(えくぼ)と愛らしく齒を現はし、笑顔にこやかに ● 體輕くして美し

夏屋廣大沙
堂秀只。南房
小壇觀絕靈
只。曲屋步
宜。豐齋只。騰
駕步遊。靈
固只。瓊殿錯
衡英華假只。
蕙蘭桂樹鬱
彌路只。魂乎歸徠恣志慮只。

夏屋廣大にして沙堂秀で。南房小壇觀靈を絶つ。曲屋步壇授齋に宜し。騰駕步遊して春の圃に獵す。瓊殿錯衡英華假なり。蕙蘭桂樹鬱として路に彌れり。魂や歸り徠れ志慮を恣にせん。
● 屋宇廣大にて、丹沙を塗りし堂秀で(夏は廬に同じ) ● 高く聳え ● 周閣長廊のはとりに禽獸を驅らし飼ふによし ● 車に乗って遊び ● 玉の車轂と黄金の衡(よこぎ)と、華かに輝きたり

孔雀盈園。青
鸞鳥只。鷓鴣
羣長雜。鷓鴣
只。鴻鵠代遊
曼。鷓鴣只。魂
乎歸徠鳳皇
翔只。
曼澤怡面血
氣盛只。永宜
厥身。保壽命
只。室家盈廷
爵祿盛只。魂
乎歸徠居室定只。

孔雀園に盈ちて鸞皇を畜ふ。鷓鴣羣り長して鷓鴣に雜へ。鴻鵠代々遊んで鷓鴣を曼れしむ。魂や歸り徠れ鳳皇翔る。
● 鳳に鳴き ● 吉祥を示して飛べり
曼澤怡面血氣盛なり。永く厥身に宜しうして壽命を保ち。室家庭に盈ちて爵祿盛なり。魂や歸り徠れ居室定かならん。
● 肌つや／＼しく顔色榮しげに ● 宗族朝廷に満ち、爵祿榮えたり

接徑千里出
若雲只。三圭
重侯聽類神
只。祭篤天隱
孤寡存只。魂
兮歸徠正始
昆只。

接徑千里出づること雲の若し。三圭重侯聽くこと神に類せり。篤天隱を察かにして孤寡存す。魂や歸り徠れ始昆を正しうせん。
● 楚の境に徑路遠く連なり、民の多きこと雲の如し ● 三圭重侯の位にあるもの、下情を察すること神の如く(三圭は公侯伯に當り、重侯は子男に當るといふ、皆楚の重臣なり) ● 窮む者、天する者、隠る、者を憐み、寡婦孤兒を安らかにせり ● 終始の行を正しうし、その徳世に顯るべし

田邑千畛人阜昌只。美衆流德澤章只。先威後文善美明只。魂手歸徠賞罰當只。名聲若日照四海只。德譽配天萬民理只。北至幽陵南交趾只。西薄羊腸東窮海只。魂乎歸徠尚賢士只。

名聲日めいせいひの若くして四海を照し。德譽天に配して萬民理る。北のかた幽陵いゆうりやうに至り南のかた交趾かうしまでし。西のかた羊腸やうちやうに薄り東のかた海を窮む。魂や歸り徠れ賢士けんしを尚たもばん。

楚の國境次第に廣まり、北は幽州より南は交趾に至り。西は羊腸山より東は海濱に及ぶ。政を發し行を獻りて苛暴を禁じ。傑を擧げ陞を壓して讒罷を誅す。直羸位ちよくいに在つて禹應うゑいに近く。豪傑ごうけつ政を執つて流澤施す。魂や歸り徠れ國家こくが爲らん。

發政獻行禁苛暴只。舉傑傑壓陞誅讒罷只。直羸在位近禹應只。豪傑執政流澤施只。魂乎歸徠國家爲只。

● 楚の國境次第に廣まり、北は幽州より南は交趾に至り ● 西は羊腸山より東は海濱に及ぶ ● 仁義の行を進め ● 傑傑を擧げて、百官の上に置き ● 人を誦るもの、讒を怠るものを誅す ● 行正しく才満つる者位に就き、再王賢臣の臣を取る法に叶ふ

雄雄赫赫赫天德明只。三公穆穆登降堂只。諸侯畢極立九卿只。昭質既設大侯張只。執矢拊魂手歸徠尚三王只。

雄雄赫赫こゝろこゝろとして天德明てんたくとくあきらかなり。三公穆穆ぼくぼくとして堂どうに登降し。諸侯畢しよこく極りて九卿くわいせいを立つ。昭質せうしつ既に設けて大侯張たいこうちやうり。弓ゆみを執り矢やを拊ふみて拊ふして辭讓せじやうす。魂こんや歸り徠れ三王さんおうを尚たもばん。

● 太師・太傅・太保の位を設け、堂に升降せしめ(穆々は和美の聲) ● 諸侯皆楚に朝するを待ち、新に九卿を立て ● 昭質(射的)大侯(まこ)を設け、拊誦して升りて射 ● 三王(禹湯文王)の遺法を賞び、政を天下に布か

卷之十一

惜誓第十一

(王)惜誓は誰の作る所なるかを知らず。或は賈誼なりといふも疑ふらくは明かなる能はず。惜とは哀なり。誓とは信なり約なり。言は懷王已と信約して復た之に背きしを哀惜せるなり。古者君臣將に共に治を爲さんとするや、必ず信誓を以て相約し、然る後言乃ち從ひ、身以て親らするなり。蓋し懷王の始ありて終なきを刺れるなり。

惜むらくは余年老いて日に衰へ。歲忽忽として反らざるを。蒼天に登つて高く舉り。衆山を歴て日に遠し。

● 故郷日に遠し

江河の紆曲を觀。四海の雲霧に離ひ。北極を攀ちて一たび息ひ、沈瀝を吸うて以て虚に充て。朱鳥を飛ばして先驅せしめ。太一の象輿に駕し。蒼龍左驂に動

惜余年老而日衰兮。歲忽忽而不反。登蒼天而高舉兮。歷衆山而日遠。觀江河之紆曲兮。離四海

之雲霧。攀北極而一息兮。吸沈瀝以充虚。飛朱鳥而使先驅兮。駕太一之象輿。蒼龍動於左驂兮。白虎騁於右之墟。

虬たり。白虎騁せて右の驂と爲る。日月を建てて以て蓋となし。玉女を後車に載せ。杳冥の中に馳せ驚せて。崑崙の墟に休息す。

● 四海を涉りて水に衣を濡はし ● 清和の氣を吸ひて、胸に充て ● 太一の神の象牙を飾れる輿に乗り ● 日月を車蓋とし ● 空の中を馳せ崑崙山に休息す

樂窮極而不厭兮。願從容。丹水而涉。一駝騁。大夏之遺風。右にす。鴻鵠の一たび舉るや。山川の紆曲を知り。再び舉るや。天地の四方を略。中國の衆人に臨んで回。尙羊に託き。乃ち少原の壘に至れば。赤松。王喬皆旁に在り。二子瑟を擁いて調均し。余因つて清商を稱ぐ。澹然として自ら樂しみ。衆氣を吸うて翱翔す。我が長生して久しく僊せんことを念へども。余が故郷に反るに如かず。

樂窮極而不厭兮。願從容。丹水而涉。一駝騁兮。大夏之遺風。鴻鵠之一舉兮。知山川之紆曲。再舉兮。略天地之四方。臨中國

之衆人一兮。託回
回。飄乎尙羊。一
乃至少原之
壘。兮。赤松王
喬皆在。兮。二
子擁瑟而調
均兮。余因稱二
乎清商。游然而
自樂兮。吸二衆
氣。而翱翔。念
我長生。而久
僂。兮。不。如。反
余之故。

● 神に従ひ遊ばんとし ● 西爾大豆國の風俗を見 ● 一舉して山川の屈曲を知り、再舉して天地・方圓を見
る(黃鵠は高く飛ぶ鳥なり、自ら嘯よ) ● 下土中國の衆人を見つゝ、回飄(めぐり吹く辻風)につき、流連し ●
赤松子・王子喬の二仙人旁にあり ● 清商の曲を唱ふ ● 多くの清氣を吸ひて遊戯す ● 長生久仙の術を得
たるも、なほ故郷に歸るに如かず

黃鵠後時而
寄處兮。鵠臯
翠而制之。神
龍失水而陸
居兮。爲二螻
蟻之所。夫黃
鵠神龍猶如
此兮。況賢者
之逢二亂世
一哉。

黃鵠時に後れて寄り處れば。鵠臯翠りて之を制し。神龍水を失ひて陸居すれ
ば。螻蟻の裁する所となる。夫れ黃鵠神龍すら猶ほ此の如し。況んや賢者の亂
世に逢へるをや。

● 時を失ひて宿りを求むれば ● けちありにも割取せらる

澹冉冉而日

澹冉冉として日に衰へ。固に儻回して息はず。俗流従して止らず。衆枉衆り

哀兮。固。儻。回
而。不。息。俗。流
從。而。不。止。兮。
衆。枉。衆。而。矯。
直。兮。
或。儻。合。而。苟
進。兮。或。隱。居
而。深。藏。苦。下。稱
量。之。不。審。兮。
同。權。槩。而。就
衡。兮。
或。推。逐。而。苟
容。兮。或。直。言
之。謬。譎。傷。誠
是。之。不。察。兮。
井。切。茅。絲。以
爲。索。方。世。俗
之。幽。昏。兮。眩
白。黑。之。美。惡。
放。二。山。淵。之。龜

て直きを矯む。

或は儻も合うて苟も進み。或は隠れ居て深く藏る。稱量の審かならず。
權槩を同じうして衡に就くに苦しむ。

● 物の輕重多少を考へず、同一に計量せらるゝを苦しむ(衡器を分たず同一視せらるゝにたとふ、權槩はかりの
錘、槩は秤のとかさ、衡は平かなり)

或は推し逐りて苟も容れられ。或は直言して謬譎たり。誠に是を之れ察せず。
茅絲を井せ切んで以て索となすを傷む。世俗の幽昏に方つて。白黒の美惡に眩
ひ。山淵の龜玉を放つて。相與に夫の礫石を貴ぶ。梅伯は數々諫めて醜にせ
らるゝに至り。來革は志に順つて國に用ひらる。悲いかな仁人の節を盡し
て。反つて小人の賊する所となること。

● 俗に従ひて容れらんとするものあり、直言を避めて察れざるものあり ● 茅と絲とを同一視し如く、正邪賢

玉兮相與貴
夫礫不一梅伯
數諫而至醜
兮來革順志而用國
悲仁人之盡節兮
反爲小人之所賊

● 玉の別なきを認しむ ● 崑崙山の玉大源の龜を棄てて價なき小石を貴ぶ如く、賢人を斥けて愚人を用ふ ● 小人來革射王に陥ひ願ひ、遂に重く用ひられたり ● 仁人は忠節を盡し、却つて小人に害せらる

比干忠諫而
剖心兮箕子
被髮而佯狂
水背流而源
竭兮木去根
而不長非重
軀以慮難兮
惜傷身之無
功

比干は忠諫して心を剖かれ。箕子は髪を被りて佯り狂す。水は流に背いて源竭き。木は根を去つて長からず。軀を重んじて以て難を慮るに非ず。身を傷くるの功無きを惜む。

已矣哉獨不
見下夫鸞鳳之
高翔兮乃集
太皇之桴二循二四
極二而回周兮
見盛德二而後下一

已んぬるかな。獨り夫の鸞鳳の高く翔りて。乃ち太皇の桴に集り。四極を循りて回周し。盛德を見て後に下るを見ずや。

● 鷹々前に出づ ● 仁義に背くものは遂にその身を亡ぼすに喩ふ ● 身を傷けて難に當るも寸效なきを認しむ ● 大宛廣漠の野に居り ● 四方のはてを回りにて遊び ● 遠徳の王あるを見て、始めて降り來るを見ずや

彼聖人之神
德兮遠濁世
而自藏使麒麟
可得二羈二而
係一兮又何以
異二淳犬羊一

彼の聖人の神徳ある。濁世に遠りて自ら藏る。麒麟をして羈して係ぐことを得べからしめば。又何を以て犬羊に異ならん。

● 聖人は濁世に還かり危殆を避けて隠るゝなり ● 麒麟を東歸して飼ふことを得しめば、その平凡なること、牛羊と異なる所なからん(聖人と雖もまた然りとすの意)

卷之十一

招隱士 第十二

(王)招隱士は淮南小山の作りし所なり。昔淮南王安、博雅にして古を好み。天下俊偉の士を招懐し、八公の徒より咸その徳を慕ひてその仁に歸し、各々才智を竭して篇章を著作し、辭賦を分造し、類を以て相從ふ。故に或は小山と稱し、或は大山と稱す。その義猶ほ詩に小雅大雅あるが如し。小山の徒、風原を闋傷し、又その文、天に昇り雲に乗じ、百神を役使して仙者の若きに似、身沈没すと雖も名徳顯聞し、山澤に隱處するものと異なるなきを惟む。故に招隱士の賦を作り、以てその志を章にするなり。

桂樹叢生兮
山之幽。偃蹇
連。山氣崑崙
巖。石嵯峨。谿

桂樹山の幽に叢生す。偃蹇連蹇として枝相繚れり。山氣崑崙として石嵯峨たり。谿谷崩巖として水會ねて波たち。猿狖羣嘯して虎豹嘯ゆ。桂枝を攀ぢ援いて聊か淹留す。

谷巖巖兮水
曾波。猿狖羣
嘯兮虎豹嘯。
攀援桂枝兮
聊淹留。王孫
遊兮不歸。春
草生兮萋萋。歲
暮兮不自聊。蟪蛄
鳴兮啾啾。塊
兮札。山曲
兮。心港留兮洞
荒忽兮。罔兮
恻。虎豹
兮。叢薄深
林兮。人上
慄。

人豎稀なる地。枝葉刈交り巻曲し茂る。山氣重疊し、石嶮しく峙つ。桂樹の芳潔なるを愛し、その枝を援いて暫くと、まる。王孫遊んで歸らず。春草生ひて萋萋たり。歳暮れて自ら聊からず。蟪蛄鳴いて啾啾たり。塊札として山曲嶮し。心淹留して洞んで荒忽たり。罔として恻れ、慄として慄き虎豹吠せり。叢薄深林人上り慄る。

● 屈原をいふ ● 春草妻々たる時より、歳暮れんとする時まで、自ら安んじたのしむを得ず ● 今や秋蟪蛄(ひぐらし)鳴いて啾々たり(啾々とは虫の響のかまびすしき貌) ● 蟪蛄は深山曲して山盤曲し ● 心なほ留らんとするも、いたみ憂ひて慄慄たり ● 失意する貌 ● 心ひそみかくる、也 ● 懼る、貌

● 人豎稀なる地 ● 枝葉刈交り巻曲し茂る ● 山氣重疊し、石嶮しく峙つ ● 桂樹の芳潔なるを愛し、その枝を援いて暫くと、まる

● 王孫遊んで歸らず。春草生ひて萋萋たり。歳暮れて自ら聊からず。蟪蛄鳴いて啾啾たり。塊札として山曲嶮し。心淹留して洞んで荒忽たり。罔として恻れ、慄として慄き虎豹吠せり。叢薄深林人上り慄る。

● 屈原をいふ ● 春草妻々たる時より、歳暮れんとする時まで、自ら安んじたのしむを得ず ● 今や秋蟪蛄(ひぐらし)鳴いて啾々たり(啾々とは虫の響のかまびすしき貌) ● 蟪蛄は深山曲して山盤曲し ● 心なほ留らんとするも、いたみ憂ひて慄慄たり ● 失意する貌 ● 心ひそみかくる、也 ● 懼る、貌

● 人豎稀なる地 ● 枝葉刈交り巻曲し茂る ● 山氣重疊し、石嶮しく峙つ ● 桂樹の芳潔なるを愛し、その枝を援いて暫くと、まる

● 王孫遊んで歸らず。春草生ひて萋萋たり。歳暮れて自ら聊からず。蟪蛄鳴いて啾啾たり。塊札として山曲嶮し。心淹留して洞んで荒忽たり。罔として恻れ、慄として慄き虎豹吠せり。叢薄深林人上り慄る。

● 屈原をいふ ● 春草妻々たる時より、歳暮れんとする時まで、自ら安んじたのしむを得ず ● 今や秋蟪蛄(ひぐらし)鳴いて啾々たり(啾々とは虫の響のかまびすしき貌) ● 蟪蛄は深山曲して山盤曲し ● 心なほ留らんとするも、いたみ憂ひて慄慄たり ● 失意する貌 ● 心ひそみかくる、也 ● 懼る、貌

儻兮或騰或倚。狀貌嶮嶮兮峨峨。淒淒兮澹澹兮。鬪猴兮熊羆。慕類兮以悲。

攀援桂枝兮聊淹留。虎豹關兮熊羆咆。禽獸駭兮亡其曹。王孫兮歸來。山中兮不可久留。

桂枝を攀ぢ援いて聊か淹留す。虎豹關ひて熊羆咆え。禽獸駭いて其曹を亡ふ。王孫歸り來れ。山中には以て久しく留るべからず。

禽獸驚き走りて羆を失ふ

卷之十三

七諫 第十三

(王)七諫は東方朔の作りし所なり。諫とは正なり。法度を陳べて以て君を諫正するを謂ふなり。古者人臣三たび諫めて従はざれば、退いて放を待つ。屈原は楚と同姓なり。相去るの義なし。故に加へて七諫をなす。懇懇の意忠厚の節なり。或は曰く、七諫は天子に争臣七人あるに注るなりと。東方朔、屈原を追憫し、故にこの辭を作りて以てその志を述ぶ。忠信を昭にし、曲朝を矯むる所以なり。

初放

平國に生れて原椹に長ず。言語訥澀にして。又彊輔なし。淺智褊能にして。聞見又寡し。數く便事を言ひて。門下に怨まる。

平生於國兮長於原椹。言語訥澀兮又無彊輔。淺智

福能兮。聞見
又寡。數言二便
事一兮。見二想二門
下。

● 屈原楚國に生れ、君に遠けられて原野に住む ● 言語に拙く、朋友の輔けもなし ● 智識く能少く ● 隱々忠言を進め、國政に便せんと思せしも、却つて近臣に怨まれたり

王不察其長
利兮。卒見棄
乎原壘。伏念
思過兮。無可
改者。羣衆成
朋兮。上浸以惑。

王其長利を察せず。卒に原壘に棄てらる。伏して念ひ過を思ふも。改むべき者無し。羣衆朋を成し。上浸以て惑ふ。
● 王その言の利あるを察せず ● 自ら審みるに改むべき過なし ● 衆人羣をなし王之に惑へるなり

巧佞在前兮。
賢者滅息。堯
舜聖已沒兮。
孰爲忠直。

巧佞前に在れば。賢者滅息す。堯舜の聖已に没しぬ。孰か忠直を爲さん。
● 愚弊の聰明今已に没せり、誰が爲むにか忠直を盡まん

高山崔嵬兮。
水流湯湯。死
日將至兮。與
麋鹿同坑。塊

高山崔嵬たり。水流湯湯たり。死する日將に至らんとす。麋鹿と坑を同じうせん。塊鞠として道に當りて宿す。舉世皆然り。余將に誰にか告げんとする。
● 塊鞠の盛なる説 ● 鹿の類と同じ穴に落ちんとす ● 孤獨にして輔なき貌 ● 世人みな歸りを行ひ、忠信

の情を告ぐべきものなし

鴻鵠を斥逐し。鷓鴣を近習し。橘柚を斬伐し。苦桃を列樹す。便娟の脩竹。江潭に寄生す。上戩戩して露を防ぎ。下泠泠として來り風く。孰か其の合はざるを知らん。竹栢の心を異にするが若し。

● 凡て賢を遠け邪を近くるに喩ふ ● 美しき竹ありて潭上に寄生せり(屈原に喩ふ) ● 上は茂りて雨露を蔽ひ下は涼くして清風を送る(王に勸め民を憐むに喩ふ) ● 王と屈原との合はざるは竹と栢との心異なるが如し

鞠兮。當道宿。
舉世皆然兮。
余將誰告。
斥逐鴻鵠兮。
近習鷓鴣。斬
伐橘柚兮。列
樹苦桃。便娟
之脩竹兮。寄
生乎江潭。上
戩戩而防露
兮。下泠泠而
來風。孰知其
不合兮。若竹
栢之異心。

往者は及ぶべからず。來者は待つべからず。悠悠たる蒼天。我を振理する莫し。竊に君の寤らざるを怨む。吾獨り死して後已まん。

● 古人はすでに進ふべからず、未來の知己は待つべからず ● 蒼天余を救ふことなし

沈江

惟れ往古の得失。私微の傷ふ所を覽る。堯舜の聖にして慈仁なる。後世稱し

失兮。覽私微

之所傷。堯舜

聖而慈仁兮。

後世稱而弗

忘。

齊桓失於專

任兮。夷吾忠

而名彰。晉獻

惑於驪姬兮。

申生孝而被

殃。

偃王行其仁

義兮。荆文寤

而徐亡。紂暴

虐以失位兮。

周得佐乎呂

望。修往古以

行恩兮。封比

干之丘隴。賢

俊慕而自附兮。日漫淫而合同。

て忘れず。

● 古代より道に願ふものは榮え、道に背くものは衰へ、私曲隱微の言議は遠は國を亡すを思ふ

齊桓專任に失し。夷吾忠にして名彰る。晉獻驪姫に惑ひ。申生孝にして殃せ

らる。

● 齊の桓公重く馬牙賢刁の二人を用ひ、政を之に委ねて國を亂し ● 管仲(字は男吾)桓公を諫めて納れられざりしりも、獨り忠名を顯はせり ● 晉の獻公驪姫に迷ひて太子申生を廢し、遂に國亂の基をなし、申生孝にして國に遺へり

偃王其仁義を行ひ。荆文寤りて徐亡ぶ。紂暴虐にして以て位を失ひ。周佐を呂望に得。往古を修めて以て恩を行ひ。比干の丘隴を封ず。賢俊慕ひて自ら附き。日に漫淫して合同せり。

● 徐の偃王、よく仁道の道を行ひ、諸侯の歸服するもの三十餘國に及べり ● 楚の文王、徐國の次第に榮ゆるを思へ、兵を起して之を擊ち、遂に之を亡せり ● 周は太公望呂尚の輔けを得 ● 古聖人の道を修めて恩を施し、比干の墓を封じ ● 暴日に遠に、遂に四海を合せ保てり

俊慕而自附兮。日漫淫而合同。

法令を明にして修理すれば。蘭芷幽にして芳あり。衆人の予を妬むを苦む。

箕子寤りて伴り狂し。地を顧みずして以て名を食り。心佛鬱として内に傷む。

● 幽地の蘭も香る如くに、隱士みな賢名を揚ぐ ● 國を棄て、去り潔白の名を食るとも ● 心は妬まれて傷む

蕙芷を聯ねて以て佩と爲すも。鮑肆を過ぐれば香を失ふ。正臣其操行を端しうするも。反つて謗に離ひて攘けらる。

● 乾魚の市(極臭深きをいふ)

世俗更りて變化し。伯夷首陽に餓う。獨り廉潔にして容れられず。叔齊久しうして逾々明なり。

● 伯夷叔齊の名、年を經ていよいよ、顯はる

於首陽。獨廉潔而不容兮。叔齊久而逾明。

浮雲陳而蔽
晦兮使日月
手無光忠臣
貞而欲諫兮

浮雲陳じて蔽晦し。日月をして光なからしむ。忠臣貞にして諫めんと欲するも。讒諛毀りて旁に在り。

秋草榮其將
實兮微霜下
而夜降商風
肅而害生兮

秋草榮えて其れ將に實らんとし。微霜下りて夜降る。商風肅として害生じ。百草育して長ぜず。衆並び諧ひて以て賢を妬み。孤聖特にして傷み易し。

懷計謀而不
見用兮巖穴
處而隱藏成
功而不卒兮

懷計謀を懷きて用ひられず。巖穴に處りて隱藏す。成功嗟れて卒へず。子胥死して葬られず。

世從俗而變
化兮隨風靡
而成行信直
而

世俗に従ひて變化し。風に隨ひて靡きて行を成さん。信直退けられて毀敗し。虚偽進みて當を得。

退而毀敗兮
虚偽進而得
當

退りて毀敗す。虚偽の人、進みて當路の高位を得

追悔過之無
及兮豈盡忠
而有功廢制
度而不用兮

追悔するも及ぶ無し。豈忠を盡して功あらんや。制度を廢して用ひず。務めて私を行ひて公を去る。虚偽の臣を重用し國家傾危す、追悔するも及ぶなし。已れ忠直の節を盡さんと欲するも其功を成す能はず。公正に背きて私利を専らとす。終に忠貞の道を變へず、節義に死せんとし。天壽未だ盡きざるに、禍に逢へるを惜む。王の萬一にも惑より覺ゆん事を望む。忠言の耳に逆ふを痛み。申子の江に沈むを恨む。心の聞くところを悉さんことを願ひ。君の聰ならざるに遭値す。

不閉寤而難道兮。不別橫之與縱。聽奸臣之浮說兮。絕國家之久長。誠規架而不用兮。背繩墨之正方。

開寤せずして道き難し。横と縦とを別たす。奸臣の浮説を聴き。國家の久長を絶ち。規架を滅して用ひず。繩墨の正方に背く。

● 王はなほ前非を悟らず、故に善に惡き續し ● 古人の遺法を用ひず、仁義の道に背く

憂患に離ひて乃ち寤るも。火を秋蓬に縦つが若し。業に之を失ひて救はず。尚ほ何ぞ禍凶を論ぜん。

● 國憂へ、憂に遭ひて後に悟るも、火を秋草に放てり如く之を救ふこと難かるべし（秋草は枯れて燃え易ければなり） ● さてに道を失ひ身を危うせば、國の禍を論ずるも詮なし

彼離畔而獨行兮。獨行之士其何望。日漸染而不白兮。秋毫微哉而變容。衆知兮。秋毫微哉而變容。衆

● 離畔の徒道にそむきて相朋離す ● 日に邪惡に染みて、自ら覺らざ ● 微細の事も積れば容を變じ ● 輕きものも、多くを積れば重輪を折る ● 小き過も、集れば身の累を重ぬ

輕積而折軸兮。原咎雜而累重。

湘沅の流漸に赴くも。恐らくは波を逐ひて復た東せん。沙磧を懷きて自ら沈み。君の蔽壅を見るに忍びず。

● 東に流れて大海に入らん ● 君の惑さるゝを見るに忍びず

怨世

世沈淖而難論兮。俗崢嶸而難入。冷而殘滅兮。澗澗而日多。臯鷓既以成羣兮。玄鶴翼而屏移。蓬艾親入御於床第兮。馬蘭蹠蹠而日

● 世人利慾に留れて事理を論じ難く ● 清康の人は日に少く、濁濁の人は日に多し ● 惡草の蓬艾馬蘭蹠

加。寤。捐。葯。芷。與。杜。衡。兮。余。奈。世。之。不。知。芳。何。何。周。道。之。平。易。兮。然。

如く、佞人親近せられ忠良の輩時を得たり（床第に御すは君に親まるとをいひ、謀略ははしいまゝに長じ茂るをいふ）
① 詩に「周道既の如く、その直きこと矢の如し」とあり、周の政道の平易公正なるをいふ
② 蘭、高陽氏は共工氏と天下を争ひ放るくして靡に汚され
③ 蕙、蕙は徳明かなるも、なほ不惑の諫を受けたり
④ 蘭、蘭は臣人ありしも、小人の諫を拒ぐことを得ず

皇。天。保。其。高。兮。后。土。持。其。久。服。清。白。以。道。遊。兮。偏。與。手。玄。英。異。色。

皇天其高きを保ち。后土其久しきを持す。清白を服して以て逍遙し。偏に玄英と色を異にせん。

西。施。媸。媸。而。不。得。見。兮。蔡。母。勃。屑。而。日。侍。桂。蠹。不。知。所。淹。留。兮。蓼。蟲。不。知。徙。兮。潛。潛。葵。菜。處。澹。澹。

西施媸媸として見ゆるを得ず。蔡母勃屑して日に侍す。桂蠹淹留する所を知らず。蓼蟲葵菜に徙ることを知らず。澹澹の濁世に處り。今安んぞ吾が志を達する所あらん。

之。濁。世。兮。今。安。所。遣。乎。吾。志。

意載する所ありて遠く近く。固より衆人の識る所に非ず。驥弊鞅に躊躇し。係陽に遇ひて代るを得。呂望窮困して生を聊んぜず。周文に遭ひて志を舒ぶ。寓戚牛を飯ひて商歌す。桓公聞きて置かず。

飯。牛。而。商。歌。兮。桓。公。聞。而。弗。置。

路室の女の方に桑する。孔子之に過ぎて以て自ら侍す。吾獨り乖刺して當る無し。心悼愴して耄思す。比干の併併たりしを思ひ。子胥の事を愼みしを哀む。

路。室。女。之。方。桑。兮。孔。子。過。之。以。自。侍。兮。吾。獨。乖。刺。而。無。當。兮。心。悼。愴。而。耄。思。思。比。干。之。併。併。兮。哀。子。胥。之。愼。

● 孔子出て遊びし時、齊舎の女まことに桑を探り、心を專一にして他を見ず、孔子之を哀び己に侍せしめたり
● 余ひとり明君に知られず、心傷み悲む
● 比干の直直なりしを思ひ、伍子胥の死後まで國を憂ひしを悲む

事。悲楚人之和氏兮。獻寶玉以爲石。遇厲武之不察兮。羌兩足以畢新。

楚人の和氏を悲む。寶玉を獻じて以て石とせらる。厲武の察せざるに遇ひ。羌兩足以て畢く断らる。

小人之居勢兮。視忠正之何若。改前聖之法度兮。喜讒譏而妄作。親譏諷而疏賢聖兮。訟謂閻姫爲醜惡。偷近習而蔽遠兮。孰知其黑白。卒不得效其心容兮。安眇眇而無所歸。薄專精爽而

小人の勢に居る。忠正を視る何若ぞや。前聖の法度を改め。讒譏を喜んで妄作し。讒諷を親んで賢聖を疏んじ。閻姫を訟謂して醜惡と爲し。近習を偷んで蔽遠す。孰か其黑白を知察せん。

以明兮。晦冥冥而壅蔽。年既已過。太半兮。然帛柯而留滯。欲高飛而遠集兮。恐離岡而滅敗。獨冤抑而無極兮。傷精神而壽夭。皇天既不純命兮。余生終無所依。願自沈於江流兮。絕橫流而徑逝。寧爲江海之泥塗兮。安能久見此濁世。

心を通ずるを得ず。東西にさまよひて依り所なし。専ら忠を盡し、耳目を閉にして君を助げんとするも。小人に蔽蔽せられて進むを得ず。年既に己に大半を過ぎ。然も帛柯して留滯す。高く飛びて遠く集らんと欲するも。恐らくは岡に離りて滅敗せん。獨り冤抑して極なし。精神を傷けて壽夭せん。

眇而無所歸。薄專精爽而

● 心を君に通ずるを得ず ● 東西にさまよひて依り所なし ● 専ら忠を盡し、耳目を閉にして君を助げんとするも ● 小人に蔽蔽せられて進むを得ず

年既已過。太半兮。然帛柯而留滯。欲高飛而遠集兮。恐離岡而滅敗。獨冤抑而無極兮。傷精神而壽夭。皇天既不純命兮。余生終無所依。願自沈於江流兮。絕橫流而徑逝。寧爲江海之泥塗兮。安能久見此濁世。

● 年すでに五十を過ぎ、不遇にして逆境にとままる ● 遠く他方に逃れんとするも、罪に觸れ、忠厚の志を敗壞すべし ● 心を傷め、年壽短からん ● 皇天既に純命ならず。余が生終に依る所なし。願くは自ら江流に沈み。横流を絶りて徑に逝かん。寧ろ江海の泥塗と爲るとも。安んぞ能く久しく此の濁世を見んや。 ● 天命明かならず ● 寧ろ江中の泥となるも、久しく濁世を見るに忍びず

賢士窮而隱
處兮。廉方正
而不容。子胥
諫而靡驅兮。
比干忠而剖
心。子推自剖
面。伏君兮。德
日忘而怨深。
行明白而日黑兮。荆棘聚而成林。

怨思

賢士窮して隠處し。廉方正にして容れられず。子胥諫めて驅を靡し。比干忠にして心を剖かれ。子推自ら剖きて君に伏はしめ。徳日に忘れられて怨深し。行明白にして日に黒く。荆棘聚りて林を成す。

● 身を失ひ ● 晉の文公齊楚に走り、路に餓えんとせし時、介子推自ら腹を剖きその肉を獻ぜしも ● その徳日に忘れられ、子推をみて汶上の山に隱る ● いばち集りて林をなす如く、衆人集りて君を惑はす

江離蕪於窮
巷兮。蒺藜蔓
乎東廂。賢者
蔽而不見兮。
讒諛進而相
朋。臬鴞並進
而俱鳴兮。以

江離窮巷に棄てられ。蒺藜東廂に蔓る。賢者蔽はれて見えす。讒諛進みて相朋せり。臬鴞並び進んで俱に鳴き。鳳皇飛んで高く翔る。願くは壹たび往きて徑に逝かん。道壅絶して通ぜず。

● 香草蕪く棄てられ、雜草近くはびこる(廂はひさしなり) ● 一たび君に見え、忠言を進めんとするも、衆人に妨げられて果さず

鳥飛而高翔。願壹往而徑逝兮。道壅絶而不通。

自悲

愁勉に居りて其れ誰にか告げん。獨り永く思うて憂悲す。内に自ら省みて慙ぢず。操愈々堅くして衰へず。願ふこと三年にして決するなし。歳忽忽として其れ頽るゝが若し。余が身の以て意を辛ふるに足らざるを憐み。冀くは一たび見えて復た歸らん。

● 願ふこと三年に及びしも、運命未だ定まらず

居愁勉其誰
告兮。獨永思
而憂悲。内自
省而不慙兮。
操愈堅而不
衰。願三年而
無決兮。歲忽
忽其若頽。憐
余身不若足。以
卒意兮。冀一見而復歸。

哀人事之不
幸兮。屬天命
而委之咸池。
身被疾而不
問兮。心沸熱

人事の不幸を哀む。天命に屬して之を咸池に委す。身疾を被りて問えず。心沸熱して其れ湯の若し。

● 運命を天に委ぬ(咸池は天の神なり) ● 少しの快き間もなし ● 心わきかへりて湯の如し(もたえ苦しみて堪へがたきをいふ)

其若湯。

氷炭不可相並兮。吾固知乎命之不可長。哀獨苦死之無樂兮。惜予年之未央。

氷炭以て相並ぶべからず。吾固より命の長からざるを知る。獨り苦死して樂なきを哀み。予が年の未だ央きざるを惜む。

● 年未だ盡きざるに、非命に死するを悲む

悲不反余之所居兮。恨離予之故鄉。鳥獸驚而失羣兮。猶高飛而哀鳴。狐死必首丘兮。夫人孰能不反其真情。

余の居る所に反らざるを悲み。予の故郷に離るゝを恨む。鳥獸驚きて羣を失ふも。猶ほ高飛して哀鳴す。狐死するときは必ず丘に首す。夫れ人孰か能く其真情に反らざらん。

● 死する時、懐郷の情を起さざるものなからん

故人疏而日忘兮。新人近而愈好。莫能行於杳冥兮。

故人疏んぜられて日に忘れ。新人近きて愈々好せらる。能く杳冥に行ふ莫し。孰か能く無報に施さん。衆人の皆然るを苦み。風に乗りて遠く遊ぶ。

孰能施於無報。苦衆人之皆然。兮。乘風而遠遊。

● 故舊の忠臣は日に疎んぜられ、新進の佞人は日に親まる ● 人の見ざる所に善を行ふものなく、君の報いざる所に忠を盡すもの少し ● 惡く天外に遊ぶ

凌恆山其若陋兮。聊愉娛以忘憂。悲虛言之無實兮。苦衆口之鑠金。過故鄉而一顧兮。泣歔歔而霑衿。

恆山を凌ぎ其れ陋なるが若し。聊か愉娛して以て憂を忘る。虚言の實なきを悲み。衆口の金を鑠すを苦む。故郷を過ぎて一顧し。泣歔歔して衿を霑す。

● 恆山に登れば、高き峰も低く見ゆ ● ナリなきして涙のため衿をぬらす

厭白玉以爲面兮。懷琬珠以爲心。邪氣入而感内兮。施玉色而外淫。

白玉を厭けて以て面と爲し。琬珠を懐きて以て心と爲す。邪氣入りて内に感じ。玉色を施して外淫ふ。

● 行を深くし、内心外貌、ともに玉の如し ● 邪氣外より入るも、心少しも變らず、玉の外うるはひて内則なかるが如し

何青雲之流澗兮。微霜降之蒙蒙。徐風

何ぞ青雲の流澗なる。微霜降りて蒙蒙たり。徐風至りて徘徊し。疾風過ぎて湯湯たり。

● 盛なる貌(佞人羣聚して虚辭を造作するに似よ)

至而徘徊兮。疾風過之湯湯。南藩樂而欲往兮。至會稽而且止。見韓衆而宿之兮。問天道之所存在。

南藩の樂しきを聞きて往かんと欲し。會稽に至りて且く止る。韓衆に見えて之に宿り。天道の在る所を問ふ。

● 南藩の樂しきを聞きて往かんとし、會稽山に至りて暫く留る ● 仙人韓衆に見え、天道長生の道を問ふ

借浮雲以送予兮。載雌霓而爲旌。駕青龍以馳驚兮。班行行之冥冥。忽容容其安之兮。超慌忽其焉如。苦衆人之難信兮。願離羣而遠舉。

浮雲を借りて以て予を送り。雌霓を載てて旌となす。青龍に駕して以て馳驚し。班行行として冥冥たり。忽容容として其れ安にか之く。超慌忽として其れ焉にか如く。衆人の信じ難きを苦み。願はくは羣を離れて遠く舉らん。

● 長くうねる貌 ● 遠かなる貌 ● 忽容容として其れ安にか之く。超慌忽として其れ焉にか如く。衆人の信じ難きを苦み。願はくは羣を離れて遠く舉らん。 ● 世俗を離れて遠を去らん事を願ふ

登巒山而遠望兮。好桂樹之冬榮。觀天火之炎揚兮。聽大壑之波聲。引八維以自道兮。含沈瀼以長生。

巒山に登りて遠く望み。桂樹の冬榮を好し。天火の炎揚を觀。大壑の波聲を聽。八維を引ききて以て自ら道き。沈瀼を含みて以て長生す。

● 八維を引ききて以て自ら道き。沈瀼を含みて以て長生す。

● 天火の燃ゆるを見、大海の波聲を聽き ● 天の八維をとりて進み（維はつななり） ● 仙界清和の氣を吸ひて長生す

居不樂以時思兮。食草木之秋實。飲菌若之朝露兮。構桂木而爲室。雜橘柚以爲圃兮。列辛夷與椒植。鷓鴣孤而夜號兮。哀居者之誠貞。

居樂まず以て時に思ひ。草木の秋實を食ひ。菌若の朝露を飲み。桂木を構へて室となし。橘柚を雜へて以て圃となし。辛夷と椒植とを列す。鷓鴣孤にして夜號き。居者の誠貞を哀む。

● 居所を潔くし、飲食を香しくするをいふ ● 余の隠れて誠出なるを思ひむ

哀命

時命の合はざるを哀み。楚國の憂多きを傷む。内情の潔白を懷き。亂世に遭ひて尤に離ふ。耿介の直行を惡むは。世濁濁して知らざればなり。何ぞ君臣

哀時命之不合兮。傷楚國之多憂。内懷

情之潔白兮。遭亂世而離尤。惑耿介之直行兮。世溷濁而不知。何君臣之相失兮。上沉湘而分離。

の相失へる。沉湘に上りて分離す。

● 忠直の人の惑まるゝは、君の心暗くして、之を用ふるを知らざるに依る ● 忠臣は沉湘に放逐せられ君臣分離す

測汨羅之湘水兮。知時固而不反。傷離散之交亂兮。送側身而既遠。處玄舍之幽門兮。穴巖石而窟伏。從水蛟而爲徒兮。與神龍二乎休息。

測る汨羅の湘水。知る時固にして反らざるを。離散の交々亂るゝを傷み。遂に身を側てて既に遠さかる。 ● 長沙、羅縣の川にして湘水に注ぐ ● 身を汨羅の水に沈め、楚國に歸らざるべし ● 玄舍の幽門に處り。巖石に穴して窟伏し。水蛟に従うて徒を爲し。神龍と休息せん。 ● 已れ徳を修むれども用ひられず、返きて巖穴の中に伏せんと欲すと也

何山石之嶄巖兮。靈魂屈

何ぞ山石の嶄巖たる。靈魂屈して偃蹇す。素水を含みて蒙深。目眇眇として既に遠し。

面偃蹇兮。含素水而蒙深兮。目眇眇而既遠。哀形體之離解兮。神罔兩而無合。惟椒蘭之不反兮。魂迷惑而不知。路願無過之設。行兮雖滅沒之自樂。痛楚國之流亡兮。哀靈脩之過到。

● 山石嶄巖、已の居るべき所に非ず、魂偃蹇くして止まり難し、之を去らんと欲す ● 白水也、運行すとも清白の節を失はずと也 ● 形體の離解を哀み。神罔兩として舍する無し。惟椒蘭の反らざる。魂迷惑して路を知らず。過なきを願ひて行を設け。滅没すと雖も自ら樂まん。楚國の流亡を痛み。靈脩の過到を哀む。 ● 精神の操依して舍止する所なきを哀む ● 行に過なきを願ひ、身亡ぶるも安んじ樂む ● 國土をさしてい

固時俗之溷濁兮。志瞽迷而不。知路念私門之正匠兮。遙涉江而違去。念女類之嬋

固より時俗の溷濁なる。志瞽迷して路を知らず。私門の正匠を念ひ。遙に江を涉りて遠く去る。 ● 心迷ひて行く所を知らず ● 匠は教也、衆臣皆其私を爲み相教ふるに利を以てす、之を念ひて忍びず遠く去らん ● 女類の嬋媛たるを念ひ。涕泣流れて於悒す。我死を決して生きず。重ねて追ふと

媛兮。涕泣流
乎於悒。我決
死而不生兮。
雖重追吾何
及。戲疾瀨之
素水兮。望高
山之蹇產。哀高
丘之赤岸兮。遂沒身而不反。

雖も吾れ何ぞ及ばん。疾瀨の素水に戯れ。高山の蹇産を望み。高丘の赤岸を哀
み。遂に身を没して反らず。

● 姉女顔の引き留めしを思ひ ● 再び追ひ來るも、余は故郷に歸らざるべし

謬 諫

怨靈修之浩
蕩兮。夫何執
操之不固。悲
太山之爲隍
兮。孰江河之
可涸。

靈修の浩蕩たるを怨む。夫れ何ぞ執操の固からざる。太山の隍と爲るを悲む。
孰か江河の涸ぐべけんや。

● 楚王の心定りなく、志操の固からざるを悲しむ ● 泰山崩れて隍(はり)となり、江河決して塞ぎ難きが如く、
同漸く涸れ亡びんとせり

願承問而效
志兮。恐犯忌
而干諱。卒撫

願はくは問を承けて、志を效さんことを。恐くは忌を犯して諱を干さんことを。
卒に情を撫して以て寂寞たり。然く悵悵して自ら悲む。

情以寂寞兮。
然悵悵而自
悲。

● 王の問を承けて、志を效さんことを願ふも ● その心に淫ひ、怒りに觸れんことを恐る ● よりて心
を抑へて言はず、ひとり痛み悲しむ

玉與石而同
匱兮。貫魚眼
與珠璣。騶駿
雜而不分兮。
服罷牛而駘

玉と石と匱を同じうし。魚眼と珠璣とを貫く。騶駿雜りて分れず。罷牛を服
にし、駘を駘にす。

● 凡て賢愚正邪の區別なきをいふ(匱はひつ、駘牛は疲れたる牛なり)

年滔滔而日
遠兮。壽冉冉
而兪衰。心悵
悼而煩冤兮。
蹇超搖而無

年滔滔として日に遠く。壽冉冉として兪々衰ふ。心悵悼して煩冤す。蹇超搖し
て冀ふなし。

● 年月は流水の如く去り ● 懼ひ煩ふ ● 心安からず

冀。固時俗之工
巧兮。滅規槩
而改錯。却駘
驥而不乘兮。
策驚駘而取

固より時俗の工巧なる。規槩を滅して改め錯き。駘驥を却けて乗らず。驚駘に
策ちて路を取る。當世豈に駘驥無からん。誠に王良の善く馭する無し。轡を
執る者を見るに其人に非ず。故に駟跳りて遠く去る。

● 九辨に解す

路。當世豈無騏驥兮。誠無王良之善馭。見執轡者非其人兮。故駒跳而遠去。

不量鑿而正柄兮。恐架燧之不同。不論世而高舉兮。恐操行之不調。弧弓弛而不張兮。孰云知其所至。無傾危之患難兮。焉知賢士之所死。俗推佞而進富兮。節行張而不著。賢良蔽而不羣兮。朋曹比而黨譽。邪說飾而

鑿を量らずして柄を正すも。恐らくは架燧の同じからざらんを。世を論ぜずして高く舉るも。恐らくは操行の調はざらんを。
● 離騷に解す ● 世の覆れるを知らず、行を高くするも、衆人と調和し難からん
弧弓も弛めて張らざれば。孰か云に其の至る所を知らん。傾危の患難無くんば。焉んぞ賢士の死する所を知らん。

● 矢の遠きに達するを知らず ● 賢士の義のために死するを知らず
● 俗佞を推して富を進む。節行張りて著れず。賢良蔽はれて羣せず。朋曹比して黨譽し。邪說飾りて曲多く。正法弧りて公ならず。直士隠れて辟匿し。讒諛明堂に登る。
● 佞人を推して賢しといひ、富者を進めて能ありといひ ● 節操あるものは顯れず ● 賢士は孤立し、小人は黨を結びて互に譽む

多曲兮。正法弧而不公。直士隱而辟匿兮。讒諛登乎明堂。

棄彭咸之娛樂兮。滅巧倕之繩墨。葛落難於廢蒸兮。機蓬矢以射革。駕蹇蹇而無策兮。又何路之能極。以直鍼而爲釣兮。又何魚之能得。伯牙之絕絃兮。無鍾子期而聽之。和璞而泣血兮。安得良工而剖之。

彭咸の娛樂を棄て。巧倕の繩墨を滅し。葛落難に雜り。蓬矢を機ちて以て革を射る。
● 潔白の行を棄て、先王の法に背く(彭咸巧倕は前に解せり) ● 香草也 ● をがらと竹也 ● 蓬の莖の矢也、隨きをいふ

● 愚人に高位を與ふるをいふ(蹇はあしなへ也、策は鞭なり) ● 賢士を招くに暇を知らざるをいふ(鍼は針也)
● 伯牙の弦を絶つは。鍾子期にして之を聴く無ければなり。和璞を抱いて血に泣く。安ぞ良工を得て之を剖かん。

● 伯牙琴を破り絃を断ちしは、鍾子期すでに死し、その音を聴くものなればなり ● 卞和なり、前に解す ● 治むるに同じ

同音者相和兮。同類者相似。飛鳥其羣。鹿鳴其友。故叩宮而宮應兮。彈角而角動兮。虎嘯而谷風至兮。龍舉而景雲往。音聲之相和兮。言物類之相感也。

音を同じうする者は相和し。類を同じうする者は相似る。飛鳥其羣に鳴き。鹿鳴いて其友を求む。故に宮を叩いて宮應じ。角を弾じて角動く。虎嘯いて谷風至り。龍舉りて景雲往く。音聲の相和する。物類の相感するを言ふなり。

● 五音の一なり ● 同上 ● 光彩ある雲

夫方圓之形兮。勢不可二以相錯。列子隱身而窮處兮。世莫可二以寄託。衆鳥皆有二行。翔而無所薄。經濁世而不得志兮。願側身巖穴而自託。

夫れ方圓の形を異にする。勢以て相錯るべからず。列子身を隠して窮處せしは。世以て寄託すべき莫ければなり。
● 世に偏り多く、身を託し難ければなり
● 衆鳥皆行列あるも。鳳獨り翱翔して薄る所なし。濁世を経て志を得ず。願くは身を巖穴に側て自ら託せん。
● 我一人世俗と異なる高遠の志を抱きて遂に之を展ぶるを得ず

欲闔口而無言兮。嘗被君之厚德。獨便情而懷毒兮。愁鬱鬱之焉極。念三年之積思兮。願壹見而陳詞。不君而聘說兮。世孰可爲明。日愁兮。情沉抑而不揚。衆人莫可與論道兮。悲精神之不流通。

口を闔ちて言ふ無からんと欲するも。嘗て君の厚德を被る。獨り便情として毒を懷く。愁鬱鬱として焉にか極らん。
● 獨、善行をなし、却つて禍に逢ふ
三年の積思を念ひ。願くは壹たび見えて詞を陳べん。君に及んで説を聘せずんば。世孰か爲に之を明にすべけんや。身疾に寝ねて日に愁ふ。情沉抑して揚らず。衆人は與に道を論すべき莫し。精神の通ぜざるを悲む。
● 日に弊君に遭ひて忠説を馳する能はず、則ち時世闇蔽、爲めに眞實を明かにすべき難し

亂に曰く。

鸞皇孔鳳日に以て遠かり。畜鳧鴛鴦。鷄鶩堂壇に滿つ。龍咆華池に遊び。要衷奔亡し。蒙駝を騰駕し。鈇刀進み御し。遙に太阿を棄つ。女芝を抜き寒け。芋荷を

裏奔亡兮。騰駕
駕棄。馳銛刀
進御兮。遙棄
太阿。拔擗玄
芝兮。列樹芋
荷。橘柚萎枯
兮。苦李旃旗。
願臨登於明堂兮。周鼎潛乎深淵。自古而固然兮。吾又何怨乎今之人。

列ね樹う。橘柚萎枯し。苦李旃旒す。願臨明堂に登り。周鼎深淵に潛む。古よりして固より然り。吾又何ぞ今の人を怨みん。

- 孔雀なり
- 駮馬と蛙なり
- 駮馬逃れ、駮馬用ひらる
- 鈍刀進み用ひられ、太阿の名劍棄てらる
- 神草なり
- 賤草なり
- 瓦器賣まれ、賤草深淵に沈めらる
- 古來みな此の如し、小人用ひられ賢士斥けらる、古來の世の賢ひのみ、余何ぞ今の人を怨みんや

卷之十四

哀時命 第十四

哀時命之不
及古人兮。夫
何予生之不
遇時。往者不
可扳援兮。倅
者不可與期。
志憾恨而不
送兮。杼中情
而屬詩。夜炯
炯而不寐兮。

時命の古の人に及ばざるを哀む。夫れ何ぞ予が生の時に遇はざる。往く者は扳ち援くべからず。倅る者は與に期すべからず。志憾み恨みて送からず。中情を杼べて詩を屬す。夜炯炯として寐ねられず。隱憂を懐いて茲を歴。心鬱鬱として告ぐるところ無し。衆孰か與に深く謀るべき。敢として愁へ忤れて委情すれば。老冉冉として之に逮べり。

(王)哀時命は嚴夫子の作りし所なり。夫子名は忌、司馬相如と俱に辭賦を好み、梁に客遊し、梁の孝王甚だ之を奇重す。忌、屈原性を受くること忠貞なるも、明君に遭はずして暗世に遇へるを哀み、斐然とし一辭を作し、歎じて之を述ぶ。故に哀時命と曰ふ。

- この世に生れ、古聖賢と時を同じうせざるを悲しむ
- 將來の事は豫期すべからず
- 情を述べ詩を賦す
- 心澄む
- 心倦む

懷憂而歷茲。心鬱鬱而無告兮。衆孰可與深謀。欲愁悴而委情兮。老冉冉而逝之。

居處愁以隱約兮。志沈抑而不揚。道壅塞而不通兮。江河廣而無梁。願至崑崙之懸圃兮。采鍾山之玉英。擊瑤木之擘枝兮。望閭風之板桐。弱水涘其爲難兮。路中斷而不可通。勢不能凌波以徑度兮。又無羽翼而高翔。然隱憫而不達兮。獨

愁に居處して以て隱約し。志沈抑して揚らず。道壅塞して通ぜず。江河廣うして梁なし。願くは崑崙の懸圃に至り。鍾山の玉英を采らん。瑤木の擘枝を撃りて。閭風の板桐を望む。弱水涘として其れ難を爲し。路中斷して通ぜず。勢波を凌いで以て徑に度ること能はず。又羽翼して高く翔るなし。然して隱憫して達せず。獨徒倚して彷徨す。悵として憫悶して目て永く思ふ。心紆ひ軫んで傷を増す。倚つて躊躇して以て淹留し。日に饑餓して糧を絶つ。廓として景を抱いて獨り倚り。超として永く故郷を思ふ。廓落として寂にして友なし。誰か與に此遺芳を玩ぶべき。白日晚晩して其れ將に入らんとし。余が壽の將からざるを哀む。車既に弊れて馬罷れ。蹇遺徊して行く能はず。身既に濁世に容られず。進退の宜く當るべきを知らず。冠崔嵬として雲を切り。劍淋離として從横なり。衣攝葉して以て備與し。左の祛搏桑に挂り。右の枉不周を拂ふ。六合以て

徙倚而彷徨。悵兮。心紆軫而增傷。倚躊躇日以淹留兮。日饑餓而絕糧。廓抱景而獨倚兮。超永思乎故鄉。廓落寂而無友兮。誰可與玩此遺芳。白日晚晚。其將入兮。哀余壽之弗將。車既弊而馬罷兮。蹇遺徊而不能行。身既不容於濁世兮。不知進退之宜。當冠崔嵬而切雲兮。劍淋離而從橫。衣攝葉以備與兮。左祛祛搏桑而式高兮。志猶卑夫禹湯。雖知困其不改操兮。擊柝於伏戲兮。下合矩矱於虞唐。願擘節而式高兮。志猶卑夫禹湯。雖知困其不改操兮。終不以邪枉害方。世並舉而好朋兮。壹斗斛而相量。衆比周以肩迫兮。賢者遠而隱藏。

肆（さい）に行くに足らず。土鑿柄を伏戲（ふし）に同じくし。下矩矱を虞唐に合す。願くは節を尊んで高きに式らん。志猶ほ夫の禹湯を卑しむ。困しめらるゝを知ると雖も其れ操を改めず。終に邪枉を以て方を害せず。世並び舉りて朋を好すれども。斗斛を壹にして相量る。衆比周して以て肩迫し。賢者遠さかりて隠れ藏る。

● 憂へ痛み ● 仕進の道塞がり、江河の渡り難きに似たり ● 崑崙山西北の山、淮南子に「鍾山の玉、之を燒くこと三日なるも、その色變ぜず」とあり ● 木の名 ● 閭風板桐の諸山を謂む ● 水中を行くことを得ず、又空中を翔ることを得ず ● 失意する貌 ● 獨、形影を守りて立ち ● 誰ととも正道を守らん ● たゆちひて進まず ● 曠よりて軫びざる貌 ● 不周山なり ● 廣き天地も容れ行くに足らず ● 徳を伏戲に同じし、法を懸臂に合す ● 志高より高く ● 邪を以て正を害せず ● 賢者正邪を同一視す ● 多くの小人、羣を結びて親しむ

爲鳳皇一作鸞。雖翕翅翕。其不容靈皇靈。其不寤寤。知兮。焉陳詞而效效。忠俗嫉妬而嫉。蔽賢兮。孰知孰。余之從容。願願。舒忠而抽馮馮。兮庸詎知其其。吉凶。璋珪雜雜。於甌窰兮。隴隴。廉與孟傲孟。同同。宮。舉世以爲爲。恆俗兮。固將將。愁苦而終窮。幽獨轉而不寐兮。惟煩懣而盈匈。魂眇眇而馳騁兮。心煩寃之懷懣。

志欲懣而不懣。僧兮。路幽昧幽。而甚難。塊獨塊。而而。其難。塊獨塊。

鳳皇のために鶴の籠を作る。翅を翕すと雖も其れ容れず。靈皇其れ寤り知らず。焉んぞ詞を陳べて忠を效さん。俗嫉妬んで賢を蔽ふ。孰か余の從容を知らん。願くは志を舒べて馮を抽んでん。詎を庸つてか其吉凶を知らん。璋珪甌窰に雜り、隴廉と孟傲と宮を同じくす。世を擧げて以て恆の俗となし、固に將に愁苦して終に窮らんとす。幽にして獨り轉じて寐ねられず。惟煩懣して匈に盈つ。魂眇眇として馳騁す。心煩寃して懣懣たり。

- 鳳皇を鶴の籠に入れし如く、賢者を亂世に置く ● 身を屈するも容れられず ● 王之を悟らず ● 道に安んずる貌 ● 玉と土器とまじる ● 醜陋の名 ● 美女の名 ● 憂ふる貌 ● 王之を悟らず ● 道に

志欲み懣んで僧かなならず。路幽昧にして甚だ難し。塊獨にして此曲隅を守り、然く欲切して永く歎く。脩夜を愁へて宛轉し。氣消滯して其れ波の若し。劍劍

を握りて用ひす。規渠を操りて施す所なし。

- 廻り山郭に居る ● 長き夜を徒に過ごし、あちろこちろに寝返す ● 湧きかへる ● 道徳法度あるも、指いて用ひざるをいふ、劍劍は劍刀なり

守此曲隅兮。然欲切而永永。歎。愁脩夜而宛轉兮。氣消滯滯。其若波。握握。劍劍而不用兮。操規渠渠。而無所施。

騁馭於中庭兮。焉能極夫遠道。置置。狡于楯檻兮。夫何以責其捷巧。騶騶。而上山兮。吾固知其不能陞。釋釋。管晏而任任。箴之能稱。何楯衡衡。箕箒雜於於。巖

馭馭を中庭に騁す。焉んぞ能く夫の遠道を極めん。狡抗を楯檻に置く。夫れ何を以てか其捷巧を責めん。

騶を騶にして山に上る。吾固に其の陞ること能はざらんことを知る。管晏を釋てて箴獲に任す。何ぞ權衡を之れ能く稱らん。

箕箒を巖に雜り、蓬矢を機ちて以て革を吹る。負ひ擔ひ荷うて丈尺を以てす。要を伸べんと欲するも得べからず。外機臂に迫り脅され、上矰維に牽聯す。肩

蒸兮。機蓬矢以
以敷革。負擔荷
以二丈尺兮。欲
伸要而不。可
得。外迫脅於
機臂兮。上牽
聯於縮維。肩傾
側而不容兮。固
隱腹而不得息。

傾き側ちて容れられず。固に隱腹にして息ふことを得ず。

● 矢竹を箭幹に纏へ、蓬矢を以て革を射る ● 物を負ひ荷ひて丈尺の下(低くつかへる處)を行けば、腰を伸すことを得ず ● 外は機臂(弩身)に迫られ、上はいづるかに繋がる ● 肩を傾け、腹を縮め、息する外なし

務光自投於深淵兮。不獲世之塵垢。孰魁摧之可久兮。願退身而窮處。鑿山楹而被衣於水渚。霧露濛濛其長降兮。雲依斐而承宇。虹霓紛其朝霞兮。夕淫淫而

務光自ら深淵に投じ。世の塵垢を獲ず。孰か魁摧の久しかるべき。願はくは身を退けて窮處せん。山楹を鑿ちて室となし。被衣を水渚に下す。霧露濛濛として其れ晨に降り、雲依斐として宇に承く。虹霓紛として其れ朝の霞あり。夕に淫淫として雨を淋ぐ。招茫茫として歸するなし。恨として遠く此曠野を望む。下つて釣を谿谷に垂れ。上つて僊者を求め求む。赤松と友を結び。王喬に比して耦をなす。臬楊をして先導せしめ、白虎之が前後を爲す。雲霧に浮んで冥きに入り。白鹿に騎つて容與す。

● 古の清士なり ● 推きくだかれ、久しく身を保ち難し ● 岩を鑿ちて室となし、衣服を水渚に洗ふ ●

雲霧りて野に入る ● 深く依るべき所なし ● 仙人赤松子と交り、王子喬と對す ● 山神なり ● 心のまよひに遊ぶ

淋雨。招茫茫而無歸兮。恨遠望此曠野。下垂釣於谿谷兮。上要求於僊者。與赤松而結友兮。比王喬而爲耦。使臬楊先導兮。白虎爲之前後。浮雲霧而入冥兮。騎白鹿而容與。

魂匪匪以寄獨兮。汨徂往而不歸。處卓卓而日遠兮。志浩蕩而傷懷。鳳翔於蒼雲兮。故矯繼而不能加。蛟龍潛於旋淵兮。身不挂於罔羅。知貪餌而近死兮。不

魂匪匪として以て寄獨なり。汨として徂き往いて歸らず。處ること卓卓として日に遠し。志浩蕩として傷み懷ふ。

● 孤獨の貌 ● 高きに居り、日に故郷に遠ざかる

鷹鳳蒼雲に翔る。故に矯繼も加ふること能はず。蛟龍旋淵に潛る。身罔羅に挂らす。餌を貪れば死に近づくことを知る。清波に下り遊ぶに如かず。寧ろ幽隱して以て禍に遠ざからん。孰か侵辱すること爲すべき。子胥死して義を成し、屈原汨羅に沈めり。體解すと雖も其れ變ぜず。豈忠信の化ふべけんや。志怛怛として内直し。繩墨を履んで頗ます。權衡を執つて私なし。輕重を稱りて差はず。塵

鷹鳳蒼雲に翔る。故に矯繼も加ふること能はず。蛟龍旋淵に潛る。身罔羅に挂らす。餌を貪れば死に近づくことを知る。清波に下り遊ぶに如かず。寧ろ幽隱して以て禍に遠ざからん。孰か侵辱すること爲すべき。子胥死して義を成し、屈原汨羅に沈めり。體解すと雖も其れ變ぜず。豈忠信の化ふべけんや。志怛怛として内直し。繩墨を履んで頗ます。權衡を執つて私なし。輕重を稱りて差はず。塵

如三下二游乎清
波。寧幽隱以
遠。禍兮孰侵
辱之可爲。子
胥死而成義
兮。屈原沈於
汨羅。雖二體解
其不變兮。豈
忠信之可化。
志怛怛而內
直兮。履繩墨
而不頹。執權
衡而無私兮。
稱二輕重而不
差。概二塵垢之
枉擗兮。除二穢
累兮。反眞形
體白而質素
兮。中皎潔而
淑清。時厭飲

垢の枉擗を概ぎ。穢累を除きて眞に反る。形體白うして質素に、中皎潔にして淑清なり。時厭飲して用ひず。且く隱伏して身を遠ざけ。聊か端を竄し述を匿し。嘆として寂黙して聲なし。獨り便愴として煩毒す。焉んぞ憤を發して情を抒べん。時曖曖として其れ將に罷めんとす。遂に悶歎して名なし。伯夷首陽に死し。卒に天隱して榮えず。太公文王に遇はざれば。身死に至るまで逞きことを得ず。瑤象を懷いて瓊を佩にし。陳列せんことを願へども正すことなし。天墜に生れて過ぐるが若く。忽ち爛漫として成ることなし。邪氣余の形體を襲ふ。疾憚して萌生す。願はくは壹たび陽春の白日を見ん。恐くは永年を終へざらんことを。

- 水の旋回する淵 ● 身死するも節操を變へず ● 穢を除き、清明の猶にかへる ● 時の王諛言にあきて之を用ひず ● 頭をかくし、足をかくし ● 忠直の心を抱き、獨り悶歎す ● 時明ならず、善を行ふに便む ● 忠信を守り、志を違へんとするも ● 宮庭いて行を正さず ● 天地に生れて年徒に過ぐ ● 忽ち老いて成ることなし ● 永壽を保ち離からん

而不用兮。且隱伏而遠身。聊竄端而匿迹兮。嘆寂默而無聲。獨便愴而煩毒兮。焉發憤而抒情。時曖曖其將罷兮。遂悶歎而無名。伯夷死於首陽兮。卒天隱而不榮。太公不遇文王兮。身至死而不得逞。懷瑤象而佩瓊兮。願陳列而無正。生天墜之若過兮。忽爛漫而無成。邪氣襲余之形體兮。疾憚怛而萌生。願壹見陽春之白日兮。恐不終乎永年。

處。鯨鱗兮幽潛。從。暇兮遊。陸。

乘。虬兮登。陽。載。象兮上行。朝。發兮蕙。嶺。夕。至兮明。光。北。飲兮飛。泉。南。采兮芝。英。宜。遊兮列。宿。順。極兮衍。洋。紅。采兮駢。衣。翠。綵兮爲。裳。舒。佩兮緝。纆。練。余劍兮干。將。騰。蛇兮後。從。飛。龍兮步。旁。微。觀兮玄。圃。覽。察兮瑤。光。啓。匱兮探。英。悲。命兮相。當。初。蕙兮永。同。將。離兮所。思。浮。雲兮容。與。道。余兮何。之。遠。望兮。任。眠。聞。雷兮。閩。關。陰。憂兮。感。余。惆。悵兮。自。怡。

虬に乗りて陽に登り。象に載りて上り行く。朝に葱嶺を發し。夕に明光に至る。北飛泉に飲み。南芝英を采る。列宿に宣遊し。極に順ひて彷徨す。紅采駢衣。翠綵を裳となす。佩を舒べて緝纆。余が劍の干將を煉つ。騰蛇後に從ひて。飛龍旁に歩す。微かに玄圃を觀。瑤光を覽。匱を啓き策を探り。悲命相當る。蕙を初んで永詞し。將に所思に離れんとす。浮雲容與し。余を導きて何にか之く。遠く任眠を望めば。雷の閩關たるを聞く。陰憂余を感せしめ。惆悵して自ら恰む。

● 西嶺の山 ● 東嶺の山 ● 赤き衣 ● 衣裳の垂る、貌 ● 劍の石 ● 勇よき神蛇 ● 鱗に似たる獸 ● 金匱を開き、蓋を取りて占ひ ● 身の福を知る ● 香草を結んで誓をさし、幽王に別る ● 遠く楚國の暗きを見

危 俊

林。不。容兮。鳴。淵。余。何。留兮。中。州。陶。嘉。月。兮。總。駕。寧。玉。英。兮。自。脩。結。榮。芷兮。透。逝。將。去。烝。兮。遠。遊。徑。岱。土。兮。魏。闕。歷。九。曲。兮。牽。牛。聊。假。日。兮。相。伴。遺。光。耀。兮。周。流。望。太。一。兮。淹。息。紆。余。轡。兮。自。休。晡。白。日。兮。皎。皎。彌。遠。路。兮。悠。悠。顧。列。學。兮。縹。縹。

林鳴蜩を容れず。余何ぞ中州に留らん。嘉月に陶して駕を總べ。玉英を牽けて自ら脩む。榮芷を結んで透逝し。將に烝を去りて遠く遊ばんとす。岱土を徑りて魏闕。九曲を歴て牽牛。聊か日を假りて相伴し。光耀を遺して周流す。太一を望んで淹息し。余が轡を紆べて自ら休す。白日に晡かせば皎皎たり。遠路を彌れば悠悠たり。列學を顧みれば縹縹たり。幽雲を觀れば陳り浮ぶ。鉅寶遷りて礪礪し、雉咸く雖いて相求む。決莽莽として志を究め。吾が心を懼れしめて驚愕たり。余が馬を飛柱に歩ませ。與に匹儔すべきを覽んに。卒に纖介ある莫し。永く余思ひて袖袖たり。

● 楚王野土を養はざるに喩ふ(蜩は秋歸なり) ● 吉時に及びて、車を馳せ、瓊華を探りて自ら飾る ● 香草を結びて偕とし、君を去りて遠く遊ばんとす ● 北荒を出でて九天星宿のほとりを行く ● 懸星を見ればかなり ● 太歳星轉じ移る ● 雉鳴いて離離相求む ● 遠く廣く天地周遊の志を成し ● 心を憂ひ傷ましむ ● 神山の名 ● 同氣の友を求むるも、遂に一人もなし ● 憂極りなき哀

觀幽雲兮陳浮。鉅寶遷兮研礪。維成唯兮相求。決非非兮究志。懼吾心兮憐憐。步余馬兮飛柱。覽可與兮匹儔。卒莫有兮繼介。永余思兮抽袖。

世淵兮冥昏。違君兮歸眞。乘龍兮偃蹇。高翔兮上。縹緲兮英衣。縹緲兮披華裳。兮芳芬。登羊角兮扶輿。浮雲漢兮自娛。握精神兮雍容。與神人兮相胥。流星墜兮成雨。進隣盼兮上丘墟。覽舊邦兮涕泣。

昭世

世淵りて冥昏なり。君を違りて眞に歸す。龍に乗りて偃蹇し。高く回翔して上り臻る。英衣の縹緲たるを襲ね。華裳の芳芬たるを披き。登りて扶輿に羊角し。浮雲漢として自ら娛しむ。精神を握りて雍容し。神人と相胥つ。流星墜ちて雨を成し。進みて瞻盼して丘墟に上る。舊邦の滄鬱たるを覽。余安んぞ能く久しく居らんや。志懷逝きて心憫慄し、余が轡を紆べて躊躇す。素女の微歌を聞き。王后の竿を吹くを聴く。魂悽愴として哀を感じ。腸回り回りに盤紆す。余が佩の繽紛たるを撫し。高太息して自ら憐む。祝融をして先づ行かしめ。昭明をして門を開かしめ。六蛟を馳せて上り征き。余が駕を竦して冥に入る。九州を歴て合を索め。誰か與に生を終ふべき。忽ち西園を反顧し。軫丘の崎傾するを觀る。

横垂する涕泣流し。余が後の靈を失ふを悲む。

- 袖の赤きを重ぬ
- 彩衣の髣上きを曳き
- 高山に登りて顧み
- 神明を待して、容儀を動かし
- 楚國の暗く亂るゝを見
- 心いたみおそれ
- 神女のかすかに歌ふを聞き
- 伏妃の竿を吹くを聞く
- 南方の神に祈願せしめ
- 從神に路を開かしめ
- 空中に入る
- 天下を周遊して友を求め
- 隨御へ地を見る
- 山陵の險しきを見る
- 我が君の大法に違ふを悲しむ

余安能兮久居。志懷逝兮心憫慄。紆余轡兮躊躇。開素女兮微歌。聽王后兮吹竿。魂悽愴兮感哀腸。腸回兮盤紆。撫余佩兮縹緲。高太息兮自憐。使祝融兮先行。令昭明兮開門。馳六蛟兮上征。竦余駕兮入冥。歷九州兮索合。誰可與兮匹儔。終生忽反顧兮四顧。視軫丘兮崎傾。橫垂涕兮泣流。悲余后兮失靈。

尊嘉

季春陽陽たり。列草行を成す。余蘭生を悲む。委積して從横たり。江離遺捐せられ。辛夷擠臧せらる。伊れ往古を思ふに。亦多く殃に遭へり。伍胥江に浮び。屈子湘に沈む。余を運らして茲を念ふ。心内傷を懷く。淮を望むに油沛たり。流に濱して則ち逝く。舫に榜して流を下れば。東注すること礧礧たり。蛟龍導

亦多兮遭殃。伍胥兮浮江。風子兮沈湘。運余兮念茲。心內兮懷傷。望淮兮浦浦。濱流兮則逝。榜舫兮下流。東注兮砥礪。蛟龍兮導引。文魚兮上瀨。容裔兮河伯兮開門。迎余兮歡欣。顧念兮舊都。懷恨兮艱難。竊哀兮浮萍。汎淫兮無根。

引し。文魚瀬に上る。蒲を抽きて坐に陳し。芙蓉を援りて蓋と爲す。水余が旌に躍り。繼ぐに微察を以てす。雲旗電驚し。愴忽として容裔す。河伯門を開き。余を迎へて歡欣す。舊都を顧み念ひ。恨を懷きて艱難す。竊かに浮萍の。汎淫して根無きを哀む。

● 曉春三月 ● 關の枝葉擡折し、根腐たるを悲しむ ● 積賢を思ふに、多く關に遊へり ● 我心をめぐりして之を思ふ ● 流る、既 ● 舟に掉して下れば ● 蒲を抜きて坐に敷き、芙蓉(はず)を採りて笠とす ● つまいて荇芥を舟に入る ● たなびき動く ● 浮萍に根なく、水のまゝに漂ふを悲しむ

著英

秋風兮蕭蕭。舒芳兮振條。微霜兮嗚蜩。病歿兮辭歸。玄鳥兮辭歸。

秋風蕭蕭たり。芳を舒べて條を振ふ。微霜嗚蜩として。鳴蜩を病歿せしむ。玄鳥辭し歸り。靈丘に飛翔す。谿を望めば滄鬱たり。熊羆嗚呼す。唐虞存せず。何の故にか久しく留らん。淵に臨めば汪洋たり。林を顧れば忽荒たり。余が袿衣を修め。寃に騎りて南に上る。雲に棄りて回り回る。豐豊として自ら強む。將に蘭皋

飛翔兮靈丘。望谿兮滄鬱。熊羆兮嗚呼。唐虞兮不存。何故兮久留。臨淵兮汪洋。顧林兮忽荒。修余兮袿衣。驚思兮君兮無聊。身去兮意存。憤恨兮懷愁。

に息はんとし。志を失ひて悠悠たり。蕪蘊たる鬱鬱。君を思ひて無聊なり。身去りて意存し。憤恨して愁を懷く。

● 百草を動かし、芳野せしむ ● 蕪蘊りて神山に飛ぶ ● 熊羆すてに世になし ● 上願を盡へ ● 以上昇りて自ら力む ● 關の茂るつゝみ ● 面に指づき照む ● 君を念ひて樂なし

思忠

登九靈兮遊神。靜女歌兮微晨。悲皇丘兮積葛。衆體錯兮交紛。貞枝抑兮枯槁。枉車登兮慶雲。感余志兮

九靈に登りて神を遊ばしむ。靜女微晨に歌ふは皇丘の積葛。衆體錯りて交紛するを悲む。貞枝抑せられて枯槁し。枉車慶雲に登る。余が志を感じて慘慄し。心愉愉として自ら憐む。玄螭に駕して北征し。擲く吾蕙嶺に路し。五宿を連ねて施を建て。氛氣を揚げて旌となす。廣漠を歴て馳騫し。中國を覽るに冥冥たり。玄武水母に歩し。吾と南榮に期す。華蓋に登りて陽に乗り。聊か逍遙して光を播

慘慄。心悄悄兮自憐。駕玄螭兮北征。歸吾路兮蕙嶺。連五宿兮建旆。揚氛氣兮爲旌。歷廣漠兮馳騖。覽中國兮冥冥。玄武步兮水母。與吾期兮南榮。登華蓋兮乘陽。聊逍遙兮播光。抽庫婁兮酌醴。接鰲瓜兮接纒。畢休息兮遠逝。發玉軛兮西行。惟時俗兮疾正。弗可久兮此方。靡辟標兮永思。心佛鬱兮內傷。

く。庫婁を抽きて醴を酌み。鰲瓜を援りて纒を接ぐ。畢に休息して遠く逝き。玉軛を發して西行す。惟れ時俗の正を疾む。此方に久しうすべからず。靡辟標して永く思ひ。心佛鬱して内に傷む。

- 九天に上り、精神を聚ましむ
- 神女、夜歌ふ
- 大丘の高茂り、枝葉いたづらに亂るゝを思しむ
- 正しき枝節へちれて枯る
- 泥車を美しき雲に載す
- 衆星を列ねて旗となし
- 錫を擧げて塵(はた)となす
- 天龍と水神と歩し
- 余に南方の野に會せんと約す
- 北北斗に懸ぎて房星を望み
- 庫婁二星を引き、酒を酌み
- 鰲瓜(神車なり)を探りて醴を酌ぐ
- 車を發して西行す
- 時俗、正士を離ひ、久しくこゝに止り難し
- 陶を指ちて考ふ

陶壑

覽杳杳兮世惟。余惆悵兮何歸。傷時俗

覽る杳杳たる世惟。余惆悵として何にか歸せん。時俗の淵亂を傷み。將に翼を奮つて高飛せんとす。八龍の連螭たるに駕し。虹旌の威夷たるを建つ。中宇の浩

兮淵亂。將二奮翼兮高飛。駕二八龍兮連螭。建二虹旌兮威夷。觀二中字兮浩浩。紛翼翼兮上躋。浮二湖水兮舒光。淹低二個兮京沚。屯二余車兮索友。觀二皇公兮問師。道莫遺兮歸眞。羨二余術兮可夷。吾乃逝兮南嶽。道二幽路兮九疑。越二炎火兮萬里。過二萬首兮巖巖。濟二江海兮蟬蛻。絕二北梁兮永辭。浮雲鬱兮晝昏。霾土忽兮塵塵。息二陽城兮廣夏。哀

浩たるを觀。紛翼翼として上に躋る。湖水に浮びて光を舒べ。淹しく京沚に低徊す。余が車を屯めて友を索め。皇公を觀て師を問ふ。道遺るゝ莫くして眞に歸し。余が術の夷ぶべきを羨む。吾乃ち南嶽に逝き。幽路に九疑に道す。炎火を萬里に越え。萬首の巖巖たるを過ぎ。江海を濟りて蟬蛻し。北梁を絶りて永く辭す。浮雲鬱として晝昏し。霾土忽として塵塵たり。陽城の廣夏に息ひ。衰色罔として中に怠る。意曉陽して燎寤し。乃ち軫を息めて茲に在り。堯舜の輿ぎ興れるを思ひ。咎繇の謀を獲んことを幸ふ。九州の君靡きを悲み。軼を撫し歎じて詩を作る。

- 世俗の覆れるを見
- 光輝の亂るゝを觀
- 虚空の廣きを見つゝ、盛氣を瀆ひて昇る
- 高き洲に徘徊す
- 天帝に見えて教を乞ひ
- 南方陽地に行く
- 九疑山に至り、舜の墓を過ぐ
- 海中に登ゆる諸山を越
- 俗界を超越し
- 炎土の廣原にこゝ
- 志倦み、身疲る
- 心、明かに覺め
- 車に伏し、歎じて詩を作る(軼は車前の横木なり)

色阿兮中忘。意曉陽兮燎寤。乃息軫兮在茲。思堯舜兮製輿。幸三谷縣兮獲謀。悲九州兮靡君。撫賦歎兮作詩。

株 昭

悲哉于嗟兮。心内切嗟兮。歎冬而生兮。凋彼葉柯兮。瓦礫進賣兮。捐棄隨和兮。鈇刀厲御兮。頓棄太阿兮。頓棄兩耳兮。中坂蹉跎兮。蹇蹇服駕兮。無用日多兮。修潔處幽兮。貴麗沙淵兮。鳳皇不翔兮。鴉鵲

悲 かな于嗟。心内切嗟す。歎冬而して生じ。彼の葉柯を凋ましむ。瓦礫を寶と進め。隨和を捐棄し。鈇刀厲御し。太阿を頓棄す。驥兩耳を垂れ。中坂に蹉跎し。蹇蹇服駕し。無用日に多し。修潔幽に處り。貴麗沙淵す。鳳皇翔らず。鴉鵲飛揚し。虹に乗り蜺を驢にし。雲に載りて變化す。鶴鵬路を開き。後に青蛇を屬す。桂林に歩驟し。卷阿を超驤す。丘陵翔り憚り。谿谷悲み歎ふ。神章靈篇。曲に赴いて相和す。余私に茲を娛み。孰か復た加へん。世俗を還顧すれば。罔羅を壞敗す。卷佩して將に逝かんとし。涕流滂沱たり。

● 名玉の名 ● 名劍の名 ● 賢臣斥けられ、龍臣行を志す ● 河圖洛書、緯讀の文 ● 樂山の碑に和す ● 之にまさるものなし ● 仁義の大法を破る ● 東帝して去らんと欲し

飛揚。乘虹騰蜺兮。載雲變化。鶴鵬開路兮。後屬青蛇。步驟桂林兮。超蹇蹇卷阿。丘陵翔舞兮。谿谷悲歎。神章靈篇兮。赴曲相和。余私娛茲兮。孰哉復加。還顧世俗。壞罔羅。卷佩將逝兮。涕流滂沱。

亂曰。

皇門開兮照。下土。株穢除兮。蘭芷親。四佞放兮。後得禹。聖舜攝兮。昭堯緒。孰能若兮。願爲輔。

亂に曰く。

皇門開きて下土を照す。株穢除かれて蘭芷親の。四佞を放ちて後に禹を得。聖舜攝して堯緒を昭にす。孰か能く若のごとくならん。願くは輔と爲らん。

● 小人除かれ、君子顯る ● 堯、四凶(共工・驩兜・三苗・鯀)を放ち ● 舜、政を攝し、堯の徳業を明にす

卷之十六

九歎第十六

(王)九歎は左都水使者光祿大夫劉向の作りし所なり。向博古敏達を以て、經書を典校し、舊文を篇章し、屈原忠信の節を追念す。故に九歎を作る。歎とは傷なり、息なり。屈原放たれて山深に在り、猶ほ君を傷み念ひ、歎息じむなきを言ふ。所謂賢を讃して以て志を輔け、詞を聘せて以て徳を囁す者なり。

逢紛

伊伯庸之末
胃兮諒皇直
之風原云余
肇祖于高陽
兮惟楚懷之
嬋連原生受
命于貞節兮
鴻永路有嘉

伊伯庸の末胃。諒に皇直の屈原。云に余祖を高陽に肇む。惟れ楚懷の嬋連。原生れて命を貞節に受け。鴻永の路嘉名あり。名字を天地に齊しうし。光明を列星に並ぶ。精粹を吸ひて氛濁を吐き。横邪の世にして容を取らず。誠を叩つを行ひて阿らず。遂に排せられて讒に逢ふ。后虚を聽きて實を黜け。吾を理めずして情に順ふ。腸憤悁して怒を含み。志遷蹇して左に傾く。心儻慌して我與

名齊名字於
天地兮皇直
明於列星吸
精粹而吐氛
濁兮横邪世
而不取容行
叩誠而不阿
兮遂見排而
逢讒而不我
與兮躬遠運

せず。躬遠運として吾に親まず。靈修を辭して意を隄し。澤畔の江濱に吟す。

● 後 ● 忠直 ● 楚の懷王の調原 ● 行、大海に合し、名あり ● 吾平は天を君とせ、皇の一は地を意味す ● 徳明かに行高く、天に列星あるに同じ ● 苟も容れらんとして人に傾び語はず ● 吾は諒を符れず、私情に順ふ ● 志移り、身置く去る ● 心あわたし ● 君と別れ一心せしめ

椒桂羅目顛
覆兮有端信
而歸誠讒夫
謫讒而曼著
兮曷其不舒
予情始結言
於廟堂兮信
中塗而叛之
懷離憲與蕭
芷兮行中壘
而散之聲哀

椒桂羅りて目て顛覆す。信を竭して誠に歸するあり。讒夫謫讒として曼著し。曷ぞ其れ予が情を舒べざる。始めて言を廟堂に結び。信に中塗にして之に叛く。離憲と蕭芷とを懷にし。中壘に行きて之を散す。聲哀哀として高丘を懷ひ。心愁愁として舊邦を思ふ。願くは間を承けて自ら恃まんことを。徑淫靡にして道廢がる。顔微黧にして以て沮敗し。精越裂して衰老す。裳襜褕として風を含み。衣納納として露を掩ふ。江湘の湍流に赴き。波濤に順つて下り降る。徐に山阿を徘徊すれば。飄風來りて洶洶たり。

懷之皇祖兮。愬靈懷之鬼神。靈懷曾不吾知兮。即聽夫譏人之諛辭。余辭上參於天墜兮。旁引之於四時。指日月使延照兮。撫招搖曰實正。立師曠俾端詞兮。命咎繇使並馳。屯出名曰正則兮。卦發字曰靈均。余幼既有此鴻節兮。長愈固而彌純。不從俗而該行兮。直躬指而信志。不枉繩以追曲兮。屈情素以從事。

し。旁ら之を四時に引く。日月を指して延照せしめ。招搖を撫して曰て實正す。師曠を立てて詞を端さしめ。咎繇に命じて並び聽かしむ。屯名を出して正則と曰ひ。卦字を發して靈均と曰ふ。余幼にして既に此の鴻節あり。長じて愈々固く彌々純なり。俗に従ひて該行せず。躬を直くし指して志を信ぶ。繩を枉けて以て曲を追ひ。情素を屈して以て事に從はず。

● 靈王 ● 堯を靈王の祖先に許ふ ● 天地 ● 四時の神 ● 長く照さしめ ● 北斗七星 ● 晉平公の時の人、耳のさときを以て聞ゆ ● 楚の臣にして五刑を問かにす ● 生れて形兆あり、正則(原)と名けて天に則り ● また卜筮に依り、靈均(平)と字して地に決る ● 大節あり ● 俗人に從ひ邪行をなさず ● 道を枉げて曲事をさし情を偽りて類に從はず

端余行其如玉兮。遠皇輿之躡跡。羣阿

余が行を端しうして其れ玉の如く。皇輿の鐘跡を述ぶ。羣阿容して以て光を晦し。皇輿覆うて以て幽辟す。輿中塗にして以て回畔し。羣馬驚きて横奔す。組を

容以晦光兮。皇輿覆以幽辟。輿中塗以回畔兮。羣馬驚而橫奔。執組者不能制兮。必折軛而摧轅。斷繩銜曰聽。驚兮。暮去次而敢止。路蕩蕩其無人兮。遂不禦。手千甲。身銜陷指兮。方冀壹偷而錫還。哀僕夫之坎毒兮。屢離愛而逢患。

執る者制する能はず。必ず軛を折りて轅を摧く。繩銜を断ちて曰て聽驚し。暮に去り次して敢て止る。路は蕩蕩たるも其れ人なし。遂に千里を禦がす。身銜陷して下り沈み。獲て復た登るべからず。身の卑賤を顧みず。皇輿の輿らざるを惜む。國門を出でて端指し。方に登たび窮りて還を錫はんことを冀ふ。僕夫の坎毒を哀む。屢々憂に離りて患に逢ふ。

● 先王の正法を述ぶ ● 多くの小人阿りて言を暗ます(曲所は暗きをいふ) ● 國人中塗に背り、對に驚き走る(剛馬を賢人に諭す) ● 御者も固することを得ず、車被れ摧く ● くつわを斷ちて走る ● 平馬なるも賢臣の遅く去るを防がず ● 君、非行をさとり、召還の思命あらんことを冀ひ

九年の中吾を反さず。彭咸の水遊を思ひ。師延の渚に浮ぶを惜み。汨羅の長流に赴く。曲江の透移たるに違ひ。石碣に觸れて衝逆す。波濤漚として澆を揚ぐ。長瀨の濁流に順ひ。黃沱を凌ぎて下低す。還流して復り反らんことを思ひ。

長流。遶曲江之遷移兮。觸石礫而衡遊。波濤漣而揚澆兮。順長瀨之濁流。凌黃沱而下低兮。思還流而復反。玄與馳而並集兮。身容與而日遠。權舟杭以橫瀾兮。溢湘流而南極。立江界則長吟兮。愁哀哀而累息。情慌忽以忘歸兮。神浮遊以高厲。志蚤蚤而懷顧兮。魂眷眷而獨逝。

歎曰。余思舊邦。心依違兮。日暮黃昏。嗟幽悲兮。去郢東遷。余誰慕兮。讎

女輿馳せて並び集る。身容與して日に遠し。舟杭に權して以て横に瀾り。湘流を溢りて南に極まる。江界に立ちて長吟す。愁哀哀として累息し。情慌忽として以て歸るを忘る。神浮遊し高厲す。志蚤蚤として懷顧し。魂眷眷として獨り逝く。

● 殷の紂王の臣にして、紂王のために河暨北里の醜を作り、紂王亡ぶる後、自らその樂器を拍き、濁水に投じて死せり ● 長き眼 ● 湘流に同じ ● 湘を巻く ● 江の別名なり ● 水を車とし、輿と並び馳す(玄は水なり) ● 太息す ● 高く舞り、遠く行く ● 憂ひ悲しむ貌 ● 顧る

歎に曰く。

余舊邦を思ひて心依違す。日暮れて黃昏なり。嗟幽悲す。郢を去りて東に遷る。余誰をか慕はん。讎夫黨旅す其れ茲を。目ての故なり。河水淫淫として情の願ふところ。郢路を願瞻して終に返らず。

● 心ためらふ ● 詭人朋黨のまき故なり ● 湘を瀾の、貌 ● 心に顧ふ所なり(投じて死せんとする意)

離世

惟れ鬱鬱たる憂毒。志坎塊して進はず。身憔悴して且を考へ。日黃昏にして長く悲む。空宇の孤子を閔み。枯楊の宛鴉を哀む。孤雌高塘に吟じ。嗚嗚桑榆に棲み。玄蟻潛林を失ひ。獨り偏奔して遠放せらる。征夫徂行に勞し。處婦慎りて長く望む。誠信を申ねて遠ふ悶く。情素潔より潔く。光明日月に齊しく。文采玉石より耀く。

● 不遇のれども忠信を忘れず ● 身衰せ衰へ暇まで眠るを得ず ● 情素の潔 ● 一羽の雌鳥(鴉の母)高き枝に鳴く ● 鳩鳴きて桑榆の枝に棲む(小人時を待たぬ大、檢はこれなり) ● 旅人遠路に勞る ● 東にたはる朝より潔く ● 文采玉石よりか々やく

夫黨旅其日。茲故兮。河水淫淫。情所願兮。願不返兮。惟鬱鬱之憂毒兮。志坎塊而不進兮。身憔悴而考且兮。日黃昏而長悲。閔空宇之孤子兮。哀枯楊之宛鴉。孤雌鳴於高塘兮。嗚嗚桑榆。棲於桑榆。玄蟻失於潛林兮。獨徂奔而遠放。征夫勞於周行兮。處婦憤而長望。申誠信而悶遠兮。情素潔於初帛。光明齊於日月兮。文采耀於玉石。

傷朕次而不發兮。思沈抑而不揚兮。芳懿而不終敗兮。名靡散而不彰兮。玉門以掩兮。塞難而尤而于。龍逢之沈首兮。王子比干之逢難兮。反爲讎而見怨。思國家之離沮兮。昭獲而結難。若青蠅之爲質兮。恐登階之逢殆兮。故退伏於末庭。孽子之號咷兮。木朝燕而不治。犯顏色而觸諫兮。反蒙辜而被疑。

菀蔭燕與蘭

朕次を傷みて發せず。思沈抑して揚らず。芳懿懿として終に敗れ。名靡散して彰れず。玉門に背きて以て掩蔽し。塞尤に離ひて詭を干む。龍逢の首を沈め。王子比干の難に逢ふが若し。社稷の幾たびか危きを念ひ。反つて讎とせられて怨まる。國家の離沮を思ひ。昭愆を獲て難を結ぶ。青蠅の質を偽り。晉驪姫の情に反くが若し。恐くは階に登るの殆きに逢はんことを。故に退いて末庭に伏す。孽子の號咷する。木朝燕して治らず。顔色を犯して觸諫し。反つて辜を蒙りて疑はる。

- 但正しきも終に敗れ
- 名謂えて謂れず
- 玉門に背きて走り
- 破滅を思ふ
- 青蠅の質を偽り
- 昭愆を獲て難を結ぶ
- 驪姫の情に反く
- 恐くは階に登るの殆きに逢はんことを
- 故に退いて末庭に伏す
- 孽子の號咷する
- 木朝燕して治らず
- 顔色を犯して觸諫し
- 反つて辜を蒙りて疑はる

蔭燕と蘭若とを菀み。菀本を汚漬に漸し。芳芷を腐井に澆し。雞駭を筐籠に

若兮。漸菀本於汚漬。淹芳芷於腐井兮。弄雞駭於筐籠。執棠藟曰。朝蓬兮。乘于將曰。割肉。雀澤瀉曰。約鄰兮。破荆和曰。繼楚時。濁猶未。清兮。世殺亂猶未。察。秋容與曰。時兮。懼年歲之既晏。願屈節以從。流兮。心翠翠而不夷。寧浮沉而馳騁兮。下江湘曰。遲迴。

歎に曰く。

山中に檻檻として余傷懷す。征夫皇皇として其れ孰にか依らん。原野を經營すれば存に冥冥たり。騏に乗り騏を聘せ吾が情を舒べん。骸を舊邦に歸するも誰

杳冥冥兮。乘

騏驎兮。舒

情兮。馳

邦。莫

長辭遠逝。乘

湘去兮。

志隱隱而鬱

鬱兮。愁

而寬結。腸

紆日。縈

涕。漸

漸。漸。其

情。愴。愴。而

長。懷。兮。信

皇。而。實。正。合

五。嶽。與。八。靈

兮。訊。九。魁。與

六。神。指。列。宿

曰。白。情。兮。訴

五。帝。曰。置。詞

北。斗。爲。我。質

にか語るべき莫し。長く辭し遠く逝き湘に乗りて去らん。

● 車の走らば ● あわたしき貌 ● 原野の中を行く(南北を指といふ、東西を指といふ)

怨 思

志隱隱として鬱鬱たり。愁獨り哀んで宛結す。腸紛紆として目て線轉し。涕漸漸として其れ屑の若し。情愴愴として長く懷ふ。上皇を信じて質し正さん。五嶽と八靈とを合せ。九魁と六神とに訊ねん。列宿を指して目て情を白にし。五帝に訴へて目て詞を置かん。北斗我が爲めに中を質し。太一余が爲に之を懸け。云く陰陽の正道を服せよ。后土の中和に御し。蒼龍の蜺虬たるを佩び。隱虹の透蛇たるを帶び。彗星の皓旰たるを曳き。朱爵と鳩鷺とを撫し。清霧の颯戾なるに遊び。雲衣の披披たるを服し。玉策と朱旗とを杖き。明月の玄珠を垂れ。霓旌の瑤駉を擧げ。黄昏の總旗を建て。船純粹にして愆罔く。皇考の妙儀を承く。

● 五方の山(崑山・衡山・衡山・崑山・崑山)と八方の神 ● 北斗七星と六宗の神 ● 二十八宿 ● 五方の帝

● 長く大なる虹 ● 白く輝く ● 高く飛ぶ鳥 ● 清涼の貌 ● 長き貌 ● 五色の珠 ● 先人巧事の法を承く

中兮。太一爲

余聽之。云服

陰陽之正道

兮。御后土之

中和。佩蒼龍

之蜺虬兮。帶

隱虹之透蛇

兮。曳彗星之

皓旰兮。撫朱

爵與鳩鷺之

瑤駉兮。建二

昏之總旗。船

純粹而罔愆

兮。承皇考之

妙儀。

惜往事之不

合兮。橫汨羅

而下。厲乘隊

波而南度兮。

往事の合はざるを惜み。汨羅に横りて下厲し。隆波に乗りて前に度り。江湘の順流を逐ひ。陽侯の潢洋に赴き。石瀨を下りて洲に登れば。陸魁堆として目て視を蔽ひ。雲冥冥として前に闇し。山峻高しにて目て垠なく。遂に會閔して身に迫り。雪雰雰として木に薄り。雲霏霏として隕ち集る。阜隘狹にして幽險に。石嵒嵒として目て日を翳ふ。故郷を悲みて忿を發し。余が邦を去ること彌々久し。龍門に背きて河に入り。大墳に登りて夏首を望む。

● 身を沈む ● 大波 ● 高くして目を蔽ひ ● 取つて大なり ● 郭の東門 ● 高地に上り、夏水の口を望む

雪雰雰而薄木兮。雲霏霏而隕集。阜隘狹而幽險兮。石嵯峨而日曷。日。悲故鄉而發忿兮。去余邦之彌久。背龍門而入河兮。登大墳而望三夏首。

橫舟航而過湘兮。耳聊嗽而愴愴。波淫淫而周流兮。淫而周流兮。鴻溶溶而滔漫。路曼曼其無端兮。周容容而無識。引日月以指極兮。少須臾而釋思。水波遠且冥冥兮。眇不睹其東西。願風波之目南北兮。霧宵晦目紛闇。日杳杳以四顧兮。路長遠而窘迫。欲酌醴目娛意兮。蹇蹇而不釋。

舟航を横へて湘を過れば。耳聊嗽として愴愴す。波淫淫として周流し。鴻溶溶として滔蕩す。路曼曼として其れ端なく。周く容容として識るなし。日月を引きて目て極を指し。少須臾して思を釋く。水波遠くして目て冥冥たり。眇として其東西を暗す。風波に順ひて目て南北すれば。霧宵のごとく晦く目て紛闇なり。日杳杳として以て西に顧れ。路長遠にして窘迫す。醴を酌みて目て意を娛ましめんと欲するも。蹇蹇として釋けず。

① 耳聊り心憂ふ ② 廣く遠く(河は大に同じ) ③ 遠く、幽りし ④ 日月を引き北極星を指し、情の鬱ふ ⑤ 心苦しむ ⑥ 憂ふを説

歎曰。飄風蓬龍埃。拂拂兮。甲木搖落時。槁悴兮。遭傾遇禍兮。不可救兮。長吟永歎涕亮亮兮。舒情散鬱兮。冀白日免兮。頽流下逝兮。身日且遠兮。悲余性之不。可改兮。屢意艾而不。服。覺皓日殊俗兮。貌揭揭目。巍巍。譬若下王。僑之乘雲兮。載赤霄而凌。

歎に曰く。飄風蓬龍して埃拂拂たり。甲木搖落して時に槁悴す。傾に遭ひ禍に遇ひて救ふべからず。長吟永歎して涕亮亮たり。情を舒べ詩を散べて目て自ら免れんことを冀ふ。頽流下逝し身日々に目て遠し。

遠逝

① 風の強き貌 ② 草木の搖落ち、枯れ衰ふ ③ 長く泣きて ④ 涙止まらず

余が性の改むべからざる。屢々懲艾せらるも逆らざるを悲しむ。覺皓に服して目て俗に殊なり。貌揭掲として目て巍巍たり。譬へば王僑の雲に乗り。赤霄に載りて太清を凌ぐが若し。天地と壽を參し。日月と榮を比せんと欲す。崑崙に登りて北首すれば。靈園を悉して來り謁す。鬼神を太陰に選み。閭闔に立闕に登り。朕が車を回して西に引かしめ。虹旗を玉門に褰ぐ。六龍を三危に馳せ。西嶽を九濱に朝し。余が軫を西山に結らし。飛谷に横りて目て南に征く。都廣

太清欲下與天
地參游兮與
日月而比榮
登崑崙而北
首兮悉靈園
而來謁遊鬼
神於太陰兮
登幽闔於玄

を絶りて以て直に指し。祝融を朱冥に歷。玉衡を炎火に枉け。委に兩比咸唐に館す。鴻濛を貫きて目て東に竭り。六龍を扶桑に維ぐ。

● 苦しめらるゝも心を變へず ● 高即知大の徳を養ひ、世俗に異る ● 高き貌 ● 大なる貌 ● 崑崙山
諸神、登く來り謁す ● 天門に登り天門に入る ● 虹の橋、門山にかゝる ● 三危山に廻す ● 西方の神
を言し、大海九曲の流に會す ● 日の行く所の道 ● 西南の廣野の長、方三百里 ● 崑崙の神を言すの野
に謂ふ ● 玉車 ● 再び咸唐に宿る ● 祝融を指す

周流覽於四
海兮志升降
目高馳微九
神於回極兮
建虹采目指
指驚鳳目指
上遊兮從玄
鶴與鶴朋孔

周く四海を流覽し。志升降して目て高く馳す。九神を回極に微し。虹采を建てて目て招指し。鸞鳳に駕して目て上り遊び。玄鶴と鶴朋とを従ふ。孔鳥飛んで送迎し。翠鶴を瑤光に騰く。帝宮と罷闔とを排し。懸圃に升りて目て眩滅す。瓊枝を結んで目て雜佩し。長庚を立てて目て日に繼ぎ。驚鳳を凌ぎて目て駭電を軼ぎ。東谷を北辰に緜け。風伯を鞭ちて先驅せしめ。崑崙を咸淵に囚へ。高風

鳥飛而送迎
兮鸞羣鶴於
瑤光持帝宮
與羅罔兮升
懸圃目眩滅
結瓊枝目雜
佩兮立長庚
日繼日從驚
鳳目軼駭電
兮綴東谷於
北辰鞭風伯
使先驅兮囚
靈玄於咸淵
過高風目律
徊兮覽周流
於朔方就顯
頭而徹詞兮
考玄冥於空
桑旋車逝於
崇山兮奏虞
舜於蒼梧兮
乘揚舟於會
稽設就中香
於五湖見南
郢之流風兮

に週りて目て徘徊し。朔方に覽周流す。顯頭に就きて詞を徹す。玄冥を空桑に考へ。車を旋して崇山に逝き。虞舜に蒼梧に奏し。揚舟を會稽に洩し。申香に五湖に就き。南郢の流風を見。余が躬を沅湘に殞さん。舊邦の黯黯たるを望めば。時瀟瀟なるも猶ほ未だ尖きず。蘭芷の芬芳を懷き。妬被離して之を折く。絳帷を張りて目て澹澹たるも。風色色として之を徹す。日曠曠として其れ西に舍し。陽炎炎として復た顯る。聊か日を假りて以て須臾せん。何ぞ騷騷として故に自る。

● 北極星を中央に會し、虹鳳を建てて明輝をせむ ● 崑崙を從へ、日光の星を過ぐ ● 天
帝の苑 ● 懸圃の山に升り、眼、眩滅す ● 長庚星を以て日に繼ぎ ● 百鬼を北極星につまぐ ● 太陽の
神を咸淵(日の入り處)に囚ふ ● 太陽の神と物産山に過ひ、何故に賢人を害するかを問ふ(太陽は河間を司る神
なり、善は司るなり) ● 神化なほ過きず ● 忠信の心を抱くも、小人妬みて絶をなす ● 王、朱轡を乘
れ、節制をなす ● 威信無く、その約法はス(色々は絶き絶) ● 暫く餘年を假り心のまゝに遊ばんと
心憂ひて善に相し

桑。旋車逝於崇山兮。奏虞舜於蒼梧兮。乘揚舟於會稽設。就中香於五湖。見南郢之流風兮。頽余躬於沅湘。望三湘之黯黯兮。時瀟瀟猶未尖。懷南郢之芬芳兮。妬被離而折之。張絳

帷二目稽滯兮。風邑邑而蔽之。日噉噉其西舍兮。陽炎炎而復顧。聊假日目須臾兮。何騷騷而自故。

款曰。譬彼蛟龍乘雲浮兮。汎淫涇澗浴紛若霧兮。游溪膠輻雷動電發。高舉兮。升虛凌冥沛。濁浮清入帝宮兮。搗翅奮羽。隨風馳雨。遊無窮兮。

款に曰く。譬へば彼の蛟龍の雲に乗り浮ぶごとく。汎淫涇澗浴紛として霧の若し。游溪膠輻雷動電發。高き舉る。虚に上り冥を凌ぎ濁を沛ぎ清に浮び帝宮に入り。翅を搗かし羽を奮ひ風を馳せ雨を馳せて無窮に遊ばん。

覽屈氏之離騷兮。心哀哀而傷鬱。嗷嗷以寂寥兮。顧僕夫之世。

惜賢

屈氏の離騷を覽れば。心哀哀として傷鬱す。嗷嗷として以て寂寥。僕夫の憔悴を顧み。詭譎を撥めて邪を斥し。澗澗の流俗を切し。浪溘の姦咎を盪し。蕙蕙たる濁濁を夷く。芬香を懷きて蕙を扶み。江離の菲菲たるを佩び。申椒と杜若とを握り。浮雲の峨峨たるを冠し。長陵に登りて四望し。芷圃の蕙蕙たるを覽る。蘭皋と蕙林とに遊び。玉石の嵯峨たるを睨し。精華を揚けて目て眩耀し。芳馨渥として純美なり。桂樹の旖旎たるを結び。荃蕙と辛夷とを紉ぶ。芳茲の若くにして御せられず。林薄に捐てられて苑死す。

● 呼ぶ聲 ● 濁れる世俗を正し、離れたる蕙をきよむ ● 列をなす取 ● 光明に目を試す ● 茂れる貌 ● 此の如くし一用ひられず

悴。履詭譎而區邪兮。切澗浪溘之姦咎兮。夷蕙蕙之濁濁。懷芬香而挾蕙兮。佩江離之菲菲。搴申椒與杜若兮。冠浮雲之峨峨。登長陵而四望兮。覽芷圃之蕙蕙。芳馨渥而純美。結桂樹之旖旎兮。紉荃蕙與辛夷。芳若茲而不御兮。捐林薄而苑死。

子儔の奔走を驅り。申徒狄の淵に赴く。夷由の純美なるが若く。介子推の山に隠る。晉の申生の殃に離ふ。荆和氏の血に泣く。吳子胥の眼を抉ぐる。王子比干の横廢する。身を卑くし體を下さんと欲せるも。心隱惻して置かず。方圓殊にして合はず。鈎繩用つて態を異にす。時を俟たんと欲して須臾す。日陰暝し

て其れ將に暮れんとす。時遅遅として其れ日に進み。年忽忽として日に度る。

● 王子喬に従ひて登仙せんとし、また申徒狄、世を避けて水に赴けるを見る ● 伯夷許由の行、純潔剛美なるが如し ● 皆九思に解す ● 身を卑くし、衆俗に混ぜんとするも ● 心痛み、忠正の行を棄つるを得ず ● 方と圓とは形異なる ● 鉤は曲り圓は直く、その體を異にせり ● 時の來るを待たんとするも、君の徳暗く、年又老いんとせり(日を君に諭す)

離_レ殃_レ兮。荆和氏之泣_レ血。吳子胥之抉_レ眼兮。王子比干之橫_レ靡。欲_レ卑身而下_レ體兮。心隱惻而不置。方_レ闕_レ珠而不合兮。鈎繩用而異_レ憲。欲_レ疾時於須臾兮。日陰暝其將_レ暮。時遲遲其日進。年忽忽而日度。

妄周容而入_レ世兮。内_レ距_レ閉而不_レ開。疎_レ時風之清_レ激兮。愈_レ氛_レ霧_レ其_レ如_レ塵。進_レ雌_レ鳩_レ之耿_レ耿兮。護_レ紛紛_レ而_レ蔽_レ之。順_レ風_レ目_レ僂_レ仰兮。尙_レ由_レ由_レ而

妄に周容して世に入る。内_レ距_レ閉して開けず。時風の清_レ激を_レ疎_レてば。愈々_レ氛_レ霧_レして其れ塵の如し。雌_レ鳩_レの耿_レ耿を進むれば。護_レ粉_レ粉として之を蔽ふ。默して風に順ひて目_レ僂_レ仰す。尙ほ_レ由_レ由として之を進む。心_レ懼_レ懼として目_レ僂_レ結し。情_レ外_レ錯して目_レ僂_レ憂す。雌_レ鳩_レを_レ山_レ野_レに_レ察_レけ。樛_レ枝_レを_レ中_レ州_レに_レ采_レり。高_レ丘_レを_レ望_レんで_レ歎_レ涕_レし。悲_レ吸_レ吸として長_レく_レ懷_レふ。孰_レか_レ契_レ契として_レ棟_レを_レ委_レせん。日_レ陰_レ暝_レとして_レ下_レ顔_レす。 ● 妄に人に阿り、世に容れられんとするも、心の不快なるに堪へず ● 時俗の清く改まるを待つも、いよく

進_レ之_レ。心_レ懼_レ懼。目_レ僂_レ結兮。情_レ外_レ錯兮。目_レ僂_レ憂。寧_レ薛_レ荔_レ於_レ山

亂れて塵の如く ● 儻かなん忠節を顧さんとするも同人しかりに如く、(鳩は小鳥なり、小なき忠節に喩ふ) ● 時俗に従ひ、衆人ともに浮沈せんとし、なほためらひて進まず ● 賢草(薛荔樛枝)を山野に採り、善を修めて忘らず ● 誰か國を憂ひ、君の輔けとなるものぞ

野_レ兮。采_レ薛_レ荔_レ於_レ山

中_レ州_レ望_レ高_レ丘_レ而_レ歎_レ涕_レ兮。悲_レ吸_レ吸_レ而_レ長_レ懷_レ。孰_レ契_レ契_レ而_レ委_レ棟_レ兮。日_レ陰_レ暝_レ而_レ下_レ顔_レ兮。

歎_レ曰_レ。油_レ油_レ江_レ湘_レ長_レ流_レ汨_レ兮。挑_レ揄_レ揚_レ波_レ盪_レ兮。憂_レ心_レ展_レ轉_レ兮。憂_レ心_レ展_レ轉_レ兮。愁_レ佛_レ鬱_レ兮。冤_レ結_レ未_レ舒_レ長_レ隱_レ兮。丁_レ時_レ逢_レ殃_レ孰_レ可_レ奈_レ何_レ兮。勞_レ心_レ惜_レ惜_レ涕_レ滂_レ沲_レ兮。

歎に曰く。油_レ油_レたる_レ江_レ湘_レ長_レ流_レ汨_レたり。挑_レ揄_レ揚_レ波_レ盪_レして_レ迅_レ疾_レなり。憂_レ心_レ展_レ轉_レして_レ愁_レへて_レ佛_レ鬱_レたり。冤_レ結_レ未_レだ_レ舒_レび_レず_レ長_レく_レ隱_レ念_レす。時に_レ丁_レり_レ殃_レに_レ逢_レふ_レ孰_レか_レ奈_レ何_レす_レべき。勞_レ心_レ惜_レ惜_レとして_レ涕_レ滂_レ沲_レたり。

憂 苦

余が心の_レ惜_レ惜_レたる_レを_レ悲_レし_レみ。故_レ邦_レの_レ殃_レに_レ逢_レふ_レを_レ哀_レし_レむ。辭_レして_レ九_レ年_レにして_レ復_レらず。獨_レり_レ費_レ費_レとして_レ南_レに_レ行_レく。余が俗_レの_レ流_レ風_レを_レ思_レひ。心_レ紛_レ錯_レして_レ受_レけ_レず。楹_レ芬

悲_レ余_レ心_レ之_レ惜_レ兮。哀_レ故_レ邦_レ之_レ逢_レ殃_レ。九

年而不復兮。獨載鞶而南行。思余俗之流風兮。心紛錯而不受。遊壑莽目呼風兮。步從容於山蔽。巡陸夷之曲衍兮。幽空虛以寂寞。倚石巖以流涕兮。憂憔悴而無樂。登嶺巘兮。望南郢而闕之。山修遠其遠遼兮。塗漫漫其無時。聽玄鶴之晨鳴兮。于高岡之峨峨。獨憤積而哀娛兮。翔江洲而安歌。

に違ひて目て風に呼び、歩して山藪に從容す。陸夷の曲衍を巡れば、幽空虛にして以て寂寞たり。石巖に倚りて目て涕を流し。憂へて憔悴して樂なし。嶺巘に登りて目て長く企て、南郢を望んで之を闕ふ、山修遠にして其れ遠遼たり。塗漫漫として其れ時なし。玄鶴の晨に鳴き。高岡の峨峨たるに于てするを聽く。獨り憤積して哀娛し、江洲に翔りて安歌す。

● 孤獨の貌 ● 楚の風俗の悲しきを思ひ ● 隅りを受くるを闕す ● 大阜行遠をめぐれば ● 阻レ山

三鳥飛飛以自南兮。覽其志而欲北。願寄言於三鳥兮。去驅疾而

三鳥飛び飛んで以て南よりす。其志を覽て北せんと欲す。言を三鳥に寄せんことを願ふも、去ること驅疾にして得べからず。志を遷して操を改めんと欲するも、心紛結して未だ離れず。外彷徨して遊覽するも。内惻隠して哀を含む。聊か須

不可得。欲遷志而改操兮。心紛結而未離。外彷徨而遊覽兮。內惻隱而含哀。聊須臾以時忘兮。心漸漸其煩錯。願假簧以舒憂兮。志軒鬱其難釋。歎離騷以揚意兮。猶未殫於九章。長嘯吸以於他兮。涕橫集而成行。傷明珠之赴泥兮。魚眼璣之堅藏。同三駕羸與乘駟兮。雜疢疾與關茸。高臺於桂樹兮。鳴鴉集於木蘭。促談於廊廟兮。律魁放乎山間。

不可得。欲遷志而改操兮。心紛結而未離。外彷徨而遊覽兮。內惻隱而含哀。聊須臾以時忘兮。心漸漸其煩錯。願假簧以舒憂兮。志軒鬱其難釋。歎離騷以揚意兮。猶未殫於九章。長嘯吸以於他兮。涕橫集而成行。傷明珠之赴泥兮。魚眼璣之堅藏。同三駕羸與乘駟兮。雜疢疾與關茸。高臺於桂樹兮。鳴鴉集於木蘭。促談於廊廟兮。律魁放乎山間。

災して以て時に忘るゝも。心漸漸として其れ煩錯す。願くは簧を假りて以て憂を舒べん。志軒鬱して其れ釋き難し。離騷を歎じて以て意を揚ぐれば、猶ほ未だ九章を殫さず。長く嘯吸して以て於他し。涕橫集して行を成す。明珠の泥に赴き。魚眼璣の堅藏せらるゝを傷み。駕羸と乗駟とを同じうし。疢疾と關茸とを雜ふ。葛藟桂樹に藟ひ、鳴鴉木蘭に集り、促談廊廟に談じ。律魁山間に放たる。

● 鳥の如くに歸らんと欲す ● 三鳥に託し君に忠言を寄せんと ● 鳥の飛び去ること疾く、忠言を託するを稱す ● なほ忠信の念を忘れず ● 山野にさまよひ遊ぶ ● 暫く憂を忘るゝも、漸にして又思ふ ● 雲を吹き、憂を忘れんとす(雲は空の中に西あるものなり) ● 離騷を吟じ、己の意を揚ぐ ● 未だ九章を讀み盡さざるにまた詠む ● 明珠(忠臣)棄てられ、魚眼(佞人)尊重せらる ● 駕羸と駟馬とを同一視し ● 雜色と羸弱とを交ふ ● 惡草、香木にまじはり、食鳥桂樹に集る ● 小人、朝廷に談じ、賢者山間に放たる

惡虞氏之簫

虞氏の簫韶を惡み。遺風の激楚を好む。周鼎を江淮に潛め。土鬻に中字に爨く。

詔兮好遺風
之激楚。潛周
則於江淮兮。
墨士鸞於中
宇。且人心之
有舊兮。而不
可保。長。遠。彼
南道兮。以征夫宵行。思念郢路兮。還顧瞻瞻。涕流交集兮。泣下漣漣。

且つ人心の舊ある、而も保長すべからず。彼の南道を遶り。以て征夫宵行す。郢路を思念し。還顧瞻瞻して。涕流交集し。泣下りて漣漣たり。

● 咸陽郡の正樂を頌み、淫伏散漫の俗樂を好む ● 費卿を江淮の水中に沈め、士蓋を堂上に置きて飲む ● 賈人君子の三す所古法焉則あり ● 江陵の道にめぐり、夜々日に離れて行く

歌曰。登山長望中
心悲兮。菀彼
青青泣如頰
兮。留思北顧
涕漸漸兮。折
銳摧矜凝汜
濫兮。念我榮
華誰求兮。
僕夫慌悴散

歎に曰く。

山に登り長く望み中心悲しむ。菀たる彼の青青泣くこと頰るゝが如し。留り思ひ北を顧み涕漸漸たり。銳を折り矜を摧き凝りて汎濫す。念ふ我が榮華たる魂誰をか求めん。僕夫慌悴し散じて流るゝが若し。

● 青く茂れる草木を見、傷み悲しみ、涙亂れ落つ(菀は盛なる貌) ● 矜鋭の志を折り、忠貞の心を屈し、僂人と共に浮沈す ● 僕御の人情少少を離れ去ること流水の如し

若流兮。

愍命

昔皇考之嘉
志兮。喜登能
而亮賢情純
潔而烈蕙兮。
委盛質而無
愆。放佞人與
諂諛兮。斥讒
夫與便嬖。親
忠正之悃誠
兮。招貞良與
明智心溶溶
其不可量兮。
情澹澹其若
淵。回邪辟而
不能入兮。誠
願藏而不可

昔皇考の嘉志。能を登して賢を亮するを喜ぶ。情純潔にして蕙蘭く。委盛質にして愆なし。佞人と諂諛とを放ち。讒夫と便嬖とを斥く。忠正の悃誠を親しむ。貞良と明智とを招く。心溶溶として其れ量るべからず。情澹澹として其れ淵の若し。邪辟を回けて入る能はず。誠に藏を願ひて遷すべからず。下秩を後堂に逐ひ。忠妃を伊雉に迎へ。讒賊を中廂に刺り。呂管を榛蕪に選び。叢林の下怨士なく。江河の畔隱夫なく。三苗の徒は以て放逐し。伊臯の倫は以て廬に充てたり。

● 我が父嘉徳あり、能ある者を譽り、賢人を愛せり ● 忠臣正士の厚き誠を固しむ ● 心廣くして量るべからず、情深くして淵の如し ● 邪辟の言を棄け、小人入ることを得ず ● 君に事へんことを固ひ、心永く離れず ● 隠しき妾御を後堂に斥け、忠女忠妃を水に迎ふ ● 讒者を堂中に斬り、賢士(太公望、管仲の如きもの)を草野の中に逐む ● 山林江沔の中に、怨み念るものなし ● 三苗(楚の佞臣)の如き小人を逐ひ、伊臯

遷。逐^二下^一扶於後堂^三兮迎^二忠妃於伊熊^一。割^二讒賊於中庸^一兮。選^二呂管於椿薄^一。叢林之下無^二怨士^一兮。江河之畔無^二隱夫^一。三苗之徒以放逐兮。伊臯之倫以充^二虜^一。

今反表以爲裏兮。顧裳以爲衣。成宋萬於兩楹兮。廢周邵於遐夷。却駟驥以轉運兮。驅羸羸以馳逐。蔡女黜而出。韓兮戎婦入。而綵服。處忌囚於閉室兮。陳不占戰而赴。伯牙之號鐘兮。挾人箏而彈緯。蘇若石於金匱兮。捐赤瑾於中庭。韓信蒙於介冑兮。

- 東昌(宋開公の臣)の如き臣と近づけしむ
- 周倉(呂公の如き賢)と近づけしむ
- 楚國の女(魯女)戸外に斥けられ、戎狄の女入りて窮むす
- 屈原(楚の公子)の如き烈士を曲因し、陳不占(楚の臣)の如き忠義を取はしむ
- 名工伯牙の製鐘(琴)の如き名を破り、凡人の小器を執り強く(鐘は有りたる故)
- 蘇若石(玉に次ぐもの)を金の匱に納め、美玉を匣中に納つ
- 韓信(漢の將)甲冑を被り、屯軍を守り、行伍の凡才、恥として敵城を攻む

行夫將而攻城。

莞芎棄於澤洲兮。馳騁於陸。九臯之奔於九臯兮。熊羆羸於園。折芳枝以爲醢兮。練與薪柴。茶蕙與芎藭兮。鞅靈菑與蕙。其何殊兮。遠近思而不。或沉淪其。所達兮。或清激其無。哀余生之不。以茲爲厲兮。懷。聊之藹藹兮。乃逢紛以罹。話。

- 莞芎(澤洲)に棄てられ、馳騁(陸)に逐す。騏驎九臯に奔り、熊羆羸りて園に逸す。芳枝と瑤華とを折り、根棘の薪柴とを樹る。茶蕙と射干とを搗り、藜藿と蕙とを耘る。惜むらくは今の世其れ何ぞ殊なる。遠近思つて同じからず。或は沉淪して其れ達する所なく、或は清激して其れ通ずる所なし。余が生の當らざる。獨り毒を蒙りて尤に逢ふを哀む。茶蕙として以て志を申ぬと雖も、若乖差して之を屏く。誠に芳の非非たる。反つて茲を以て厲となすを惜む。椒聊の藹藹たるを懐き、乃ち紛に逢ひ以て話に罹る。
- 香草を瀆せに墜て、醜類の類を供(方)に取(固)に取む
- 香草を瀆り墜て、醜類を瀆り
- 今世の人、賢愚を異にす
- 思慮或は遠く、或は近く、管籥同じからず
- 忠誠を盡し志を達するも、君をむき斥く
- 香の芳しきを懐く(誠意を抱く)に喩ふ

歎曰。嘉皇既歿。終不返兮。山中幽寂。路遠兮。讒人譏議。孰可忍兮。征夫問極。誰可語兮。行險累歎。聲喟喟兮。懷憂含戚。何佗佗兮。冥冥深林兮。樹木鬱鬱。山參差以嶺嶺兮。草杳杳以蔽口。悲余心之悄悄兮。日眇眇而遺泣。風颺屑以搖木兮。雲吸吸

歎に曰く。

嘉皇既に歿して終に返らず。山中幽險にして鄂路遠し。讒人譏議たるも孰にか忍ぶべき。征夫極問きも誰にか語るべき。行險累に歎きて聲喟喟たり。憂を懷き戚を含み何ぞ佗佗する。

思古

冥冥たる深林。樹木鬱鬱たり。山參差として以て嶮巖。杳杳として以て日を蔽ふ。余が心の悄悄たるを悲しみ。日眇眇として泣を遺す。風颺屑として以て木を搖し。雲吸吸として以て淚戾す。余が生の歎なきを悲しみ。愁へて山陸に惶惚す。且に長阪に徘徊し。夕に彷徨して獨宿す。髮披披として以て鬢鬢。躬劬勞して瘁悴す。魂低低として南に征き。泣襟を霑し袂を濡す。心嬋媛として告ぐるなく。口噤閉して言はず。鄂部の蕪閭を違ひ。湘沅を回ひて遠く遷る。

- ① 高く、樹木目を蔽ふ
- ② 鬱鬱と、卷き戻る
- ③ 山野に困苦す
- ④ 髮の解け亂る、貌
- ⑤ 苦しむ、展ふ
- ⑥ 懐しく廻り行く
- ⑦ 心傷むも告ぐる所なし

以淚戾。悲余生之無歡兮。愁悵悵於山陸。且徘徊於長阪兮。夕彷徨而獨宿。髮披披以鬢鬢兮。躬劬勞而瘁悴。魂低低而南行兮。泣霑襟而濡袂。心嬋媛而無告兮。口噤閉而不言。違鄂都之蕪閭兮。回湘沅而遠遷。

余が邦の横陷して。宗鬼神の次なきを念ひ。先嗣の中絶するを闕み。心惶惑して自ら悲む。聊か山陔に浮遊し。歩して江畔に周流し。深水に臨んで長嘯し。且く僞伴して汎觀す。離騷の微文を興し。靈修の壹たび悟らんことを冀ふ。余が車を南野に還し。往軌を初古に復せんとす。道修遠にして其れ遷り難し。余が心の已む能はざるを傷む。三五の典刑に背き。洪範の辟紀を絶て。規架を播てて以て度に背き、權衡を錯きて意に任す。

- ① 整頓危く、御廟の神次第を失ひて祀られず
- ② 山陔に遊ぶ
- ③ 離騷なる神靈の文を興す
- ④ 車を南野に還せんとす
- ⑤ 二皇五帝の常法に背き、洪範(尚書の篇名)の法記を棄て
- ⑥ 曲直輕重を考へず、たゞ私意を認む

還余車於南郢兮復往軌於初古。道修遠其難遷兮傷余心之不能已。背三五之典刑兮絕洪範之辟紀。播規箒以背慶兮錯權衡而任意。

操繩墨而放棄兮傾容幸幸而侍側。甘棠枯於豐草兮藜藿棘於中庭。西施斥於北宮兮此惟倚於彌楹。烏獲戚而驂乘兮燕公操於馬園。彌楹登於清府兮答繇棄於壁外。蓋見茲以永歎兮欲登階而狐疑。乘白水而高驚兮因徙池而長詞。

歌曰。備伴墟阪沼水深兮容與

歎に曰く。備伴墟阪沼水深し。漢渚に容與すれば涕淫淫たり。鍾牙已に死す、誰か聲を作

漢渚涕淫淫兮鍾牙已死誰作聲兮。纖阿不遇焉舒情兮曾哀悽歎心離離兮。還顧高丘泣如灑兮。

さん。纖阿遇はずんば焉んぞ情を舒べん。曾ねて哀み悽歎して心離離たり。高丘を還顧すれば泣灑ぐが如し。

① 備伴の山、阪土高懸なり ② 濁水のはとりにさまよへば ③ 鍾子期も伯牙もすでに死し、よく琴を弾くものなし ④ 古の名高き御者 ⑤ 心破れ裂く

卷之十七

九思第十七

(王)九思は王逸の作りし所なり。屈原終没してより後、忠臣介士、遊覽學者、離騷九章の文を讀み、愴然として心ために悲感し、その節行を高しとし、その麗雅を妙とせざるはなし。劉向王褒の徒に至るまで、咸その義を慕し、賦を作り辭を聘せ、以てその志を盡す、則ち皆諸録に列り、世世相傳ふ。遠風原と、土を同じうし國を共にし、悼傷の情凡と異なるあり。竊かに向裏の風を慕ひ、頌一篇を作り、號して九思と曰ひ、以てその辭を稱ふ。未だ解説あらず、故に聊か誼を調ず。

逢 尤

悲兮愁哀兮
憂。天生我兮
當。閨時。被。詠
體。兮。虛。獲。尤。

悲み愁ひ哀み憂ふ。天我を生みて閨時に當る。詠語を被りて虚しく尤を獲。心煩憤して意聊むなし。嚴載駕して出でて戲遊す。八極を周くして九州を歴。軒轅を求め重華を索む。世既に卓く遠く眇眇たり。佩玖を握りて中路に踞ふ。卓

心煩憤兮意
無聊。嚴載駕
兮。出。戲。遊。周
八。極。兮。歷。九
州。求。軒。轅。兮
索。重。華。世。既
卓。兮。遠。眇。眇
路。踏。漢。華。錄
兮。建。興。謨。懿
風。后。兮。受。瑞
圖。懸。余。命。兮
遭。六。極。委。中。玉
質。兮。於。泥。塗。遊
丁。文。兮。聖。明。哲

離の典謨を建てしを羨み。風后の瑞圖を受けしを懿とし。余が命の六極に遭ひ。玉質を泥塗に委するを感む。遽に俦違して林澤に驅り。歩して屏營して丘阿に行く。車軌折れて馬虺類す。恚恨して立てば涕滂沱たり。文の聖明哲に丁らんことを思ひ。平差の謬愚に迷へるを哀む。

① 屈原に代りていふ ② モレリを望り ③ 武帝神帝の如き聖者を求む ④ 志徳を懐きて、空しくまじまじよに離ふ(佩玖は佩玉なり) ⑤ 風后(黃帝の師)天瑞を受けしを羨み ⑥ 放逐せられ、道賈を抱きて居めらる、を憐む ⑦ 馬何み驅る ⑧ 文王の時に遇はんことを願ひ ⑨ 楚の平王、吳王夫差の迷へるを哀む(平王は忠臣伍奢を討し、夫差は害子伍子胥を殺せり)

活復蘇。虎兇爭兮於廷中。豺狼鬪兮我之閉。雲霧會兮日冥晦。飄風起兮揚塵埃。走壘堂兮作東西。欲京伏兮其焉如。念靈閣兮與重深。飄願鳩兮隔終朝。

にか如かん。靈閣を念ふも奥重深なり。輒ち節を踏さんことを願ふも隔てて由なし。舊邦を望めば路委隨たり。憂心悄として志勤劬し。魂煢煢として寐ぬるに違あらず。日眩眩として寤めて終朝す。

● 周の太公望尚と殷の傅説 ● 楚の大夫賈無忌と吳の大夫伯賈 ● 楚と吳(郭は楚の部なり) ● 憤悶して死せんとし、また後に甦る ● 憂歎の如き靈臣、朝廷に事ふ ● 多くの小人、我が傍にあり ● 閔王の崩を思ふも、奥深くして運するを得ず ● 路遠し ● 夜の明くるまで眠らず

怨上

令尹兮警警。羣司兮譴譴。哀哉兮同瀟瀟。上下兮瀝瀝流。菰藿兮蔓衍。芳蘭兮挫枯。

令尹警警たり。羣司譴譴たり。哀しいかな瀟瀟として。上下流を同じうす。菰藿蔓衍し。芳蘭挫枯し。朱紫雜亂し。會て諸を別つ莫し。此巖穴に倚り。永く思ひて竊怒たり。懐の眩惑して。志を用ふる。昭ならざるを嗟く。將に玉斗を喪ひ。鉦欄を遺失せんとす。我が心煎熬し。惟是れ用つて憂ふ。九句に集慕し。

朱紫兮雜亂。會莫兮別譴。倚此兮巖穴。永思兮竊怒。嗟懷兮眩惑。用志兮不昭。將下張兮玉斗。遺中失兮鉦欄。我心兮煎熬。惟是兮用憂。集慕兮九句。退顧兮彭務。擬斯兮二蹤。未之知兮所投。

退いて彭務を顧る。斯の二蹤に擬せんとするも。未だ投ずる所を知らず。

● 令尹(楚官)徒に安んず ● 羣司、輔佐を譴ふ ● 一國並に瀟瀟 ● 小菰はびこり、香草枯れ ● 君子(朱)小人(紫)亂れ雜る ● 政衰へ賢臣を失はんとするにたとふ ● 彭成務光(古の君子)の行を思ふ ● 二賢の行に效はんとするもなほ行くべき所を知らず

謠吟兮中壘。上祭兮璇璣。大火兮西睨。攝提兮運低。雷霆兮碾碾。雷電兮光晃。涼風兮愴愴。鳥獸兮驚駭。相從兮宿棲。鴛鴦兮嘯嘯。

中壘に謠吟し。上璇璣を祭すれば。大火西に睨し。攝提運ること低し。雷霆碾碾として。宿棲す。鴛鴦嘯嘯たり。狐狸嶽嶽たり。吾が介特にして。獨處して依る罔きを哀む。蟪蛄東に鳴き、螽蟴西に號び、最我が裳に縁り。蝸我が懐に入り。蟲多余を夾み、惆悵して自ら悲む。佇立して忪怛し、心結結して折摧す。

● 天上を望めば、大火星西流し、蟄星低く運る ● 雷霆和鳴し、風塵相隨ふ ● 蝸、山野に居り、蝸と伍をなす ● 佇立して歎息し、心結ばれ氣折れ摧く

狐狸兮嶽嶽。哀吾兮介特。獨處兮罔依。蝶蜺兮鳴東。蚤獸兮號四。裁緣兮我裳。錮入兮我懷。蟲豸兮夾余。惆悵兮自悲。佇立兮切怛。心結緒兮折摧。

疾世

周徘徊兮漢澹。求水神兮靈女。嗟此國兮無良。媒女諷兮譏謔。鴉雀列兮譁譁。鳩鵲鳴兮呼。余抱昭華兮寶璋。欲取言逝兮莫取。言逝邁兮北徂。叫日陰噎兮配耦。光。聞哨罷兮靡。曙。紛載驅兮高馳。將詣詢兮皇義。還河臯兮周流。路變易兮時乖。

- 楚國に良臣なく、なかだちの者正しからざるを歎く
- 小鳥羣れて喧しき如く、同人余を苦しむ
- 重玉を抱き、貴らんとすれども買ふものなし(忠諫すれども用ひられざるに喩ふ)
- 友を尋ねてともに遊ばんとす
- 暗き中をうかがへども、何物も見えず
- 伏羲に問ひ、自ら安んぜんとなす
- 志を得ず、空しく時に背く

瀟滄海兮東遊。沐盥浴兮天池。訪太昊兮道要。云靡貴兮仁義。志欣樂兮反征。就周文兮邠岐。秉玉英兮結誓。日欲暮兮心悲。惟天諒兮不再。背我信兮自違。論隴堆兮渡澗。過桂車兮合黎。赴崑山兮帶馳。從印遊兮樓遲。吮玉液兮止渴。齧芝華兮療饑。居膠廓兮眇眇。遠梁昌兮幾迷。望江漢兮渡渚。心緊素兮傷懷。時臙臙兮且且。塵漠漠兮未晡。憂不暇兮寢食。吒增歎兮如雷。

滄海を瀟りて東に遊び。天池に沐盥浴し。太昊に道要を訪ふ。云く仁義より貴きは靡しと。志欣樂して反り征き。周文に邠岐に就き。玉英を秉りて誓を結ぶ。日暮れんと欲して心悲む。惟天祿は再びせず。我が信に背くに自ら違ふなり。隴堆を踏えて澗を渡り。桂車と合黎とを過ぎ。崑山に赴きて驂を駟ぎ。印に従ひ遊びて樓遲す。玉液を吮ひて渴を止め。芝華を齧みて饑を療す。膠廓に居りて眇眇し。遠く梁昌して幾たびか迷ふ。江漢の渡渚を望み。心緊素して傷懷す。時臙臙として且に且けんとし。塵漠漠として未だ晡えず。憂へて寢食に暇あらず。吒して歎を増して雷の如し。

- 東方の神
- 天道の祕要を問ふ
- 文王に邠岐(周の本國)に就き
- 議は再び返らず
- 忠信に背くは、我が本心に違ふなり
- 驂馬の石
- 淋しき地に居て、伴侶なく
- 遠るべき所を失ひ、幾たびか迷ふ
- 大なるを望み
- 心結ばれ傷む
- 光明未だ盛ならず
- 闇深くしゝ消えず

哀世兮嗚呼。謔譏兮嗚呼。衆多兮阿媚。貪枉兮黨比。貞良兮楚獨。鶴寡兮枳棘。鶻集兮帷帳。蕪葉兮青蒼。棄木兮萎落。觀斯兮慙慙。心爲兮隔錯。途巡兮罔覿。半被兮踰隙。川谷兮淵淵。山岳兮嶮嶮。叢林兮嶮嶮。林樾兮嶮嶮。

惆上

哀世の嗚呼として。謔譏嗚呼たるを。衆多く阿媚し。貪枉黨比し。貞良楚獨なり。鶴枳棘に竄れ。鶻帷帳に集り。蕪葉青蒼し。棄木萎落し。斯の僞惑を觀、心爲に隔錯す。罔覿に遠巡し。彼の踰隙に率ふ。川谷淵淵たり。山岳嶮嶮たり。叢林嶮嶮たり。林樾嶮嶮たり。霜雪濯濯たり。水凍洛澤たり。東西南北。歸り薄る所罔し。枯樹に鹿麋し。巖石に芻芻し。踏躡して寒局數し。獨處して志申びず。年齒盡きて命迫促し。魁鬣擠摧して常に困辱す。憂を含み老を強ひて慙みて樂なし。鬚髮憂頓して顏鬢白し。濯濯を思ひて膏沐をにし。蘭英を懷きて瓊若を把り。天明を待ちて立ちて躑躅す。雲濛濛たり電熒熒たり。孤鶻驚きて鳴くこと嚶嚶たり。思怫鬱として肝切剝し。忿として惛惛して孰にか訴へ告げん。

● 羸に語りて嬌を容る ● 面玉俗を成す ● 心亂れて性を失ふ ● 山野田圃に徘徊し ● 淫き貌 ● 長くして多き貌 ● 多き貌 ● 木の多き貌 ● 積り集る ● 水説く次となる ● 身を曲げちよめ ● 促り屈し ● 天の隅ひ(徳政に縁也)に浴せんとし ● 足をつまだけ

霜雪兮濯濯。水凍兮洛澤。東西兮南北。罔所兮歸薄。庭庭兮枯樹。芻芻兮巖石。踰躡兮寒局。獨處兮志不申。年齒盡兮命迫促。魁鬣擠摧兮常困辱。含憂兮老兮惛。無樂兮鬢髮憂頓兮顏鬢白。思濯濯兮一膏沐。懷蘭英兮把瓊若。待天明兮立躑躅。雲濛濛兮電熒熒。孤鶻驚兮鳴嚶嚶。思怫鬱兮肝切剝。忿惛惛兮孰訴告。

遭厄

屈子の厄に遭ひて。玉躬を湘汨に沈めしを悼む。何ぞ楚國の化し難き。今に迄るまで易らず。士羔裘に志す莫く。佞諛を競ひて譏罔闕たり。正義を指して曲れりとなし。璧玉を詆りて石となし。鶻鳴華屋に遊び。鶻躑柴蔭に棲み。起つて奮迅して奔走し。羣小に逢ひて譏詢せらる。青雲に載りて上昇し。昭明の處る所に逸く。天衢を躡みて長驅し。九陽に躡りて戲蕩し。雲漢を越えて南に濟り。余が馬に河鼓に秣ひ。霄霓紛として瞻翳し。參辰回りて顛倒す。

悼屈子兮遭厄。沈玉躬兮湘汨。何楚國兮化難。今兮不遇。士莫志兮羔裘。佞諛兮譏罔闕。正義兮指曲。鶻鳴兮華屋。鶻躑兮柴蔭。起兮奮迅。奔走兮天衢。羣小兮逢。青雲兮載。昭明兮處。余兮馬。河鼓兮秣。霄霓兮紛。瞻翳兮參辰。回兮顛倒。

騶遊兮華屋。鵝籬樓兮柴。蕩起奮迅兮。奔走。遊羣小兮。誤詢。載青雲兮。上昇。適昭明兮。所處。懸天衢兮。長驅。躡九陽兮。戲蕩。越雲漢兮。南濟。抹余馬兮。河鼓。霄霓紛兮。唳。參辰兮。回顧。倒。

① 遊行に志すものなく ② 羣小人に背き 諍り辱めらる ③ 日に近づき行き ④ 日の出づる處に行き ⑤ 遊牛羣の別名 ⑥ 星宿の名 ⑦ 顛倒して、路を失ふ

逢流星兮問路。願指我兮。從左。徑。御者。兮直馳。御者。迷兮失軌。遂。與日月兮殊。道。志闕絕兮。安如。哀所求。兮不。攀。階兮下。視。見。鄒郢兮舊宇。意道遙兮欲歸。衆穢盛兮杳杳。思哽。澗兮。澗。涕流。澗兮。如雨。

流星に逢ひて路を問へば。我を願指して左よりせしむ。姫荷を徑りて直に馳せ。御者迷ひて軌を失ひ。遂に踴達して邪に造る。日月と道を殊にし。志闕絶して安にか如かん。求むる所耦はざるを哀み。天階に攀ちて下視し。鄒郢の舊宇を見。意道遙して歸らんと欲するも。衆穢盛にして杳杳たり。思哽澗して澗澗し。涕流澗して雨の如し。

① 回り過ぎて邪路に至る ② 意絶え行くべき所なし ③ 楚都の舊居を見る ④ 旅人多くその勢盛なり ⑤ 思澗によさがる

悼亂

嗟嗟兮悲夫。般亂兮紛拏。第絲兮同。冠履兮共。督萬兮侍。周邵兮負。白龍兮見。靈龜兮執。仲尼兮困。鄒郢兮念。伊余兮念。奔通兮。將升兮高。上有兮。欲入兮。下有兮。左見兮。右睹兮。呼。

嗟嗟悲しいかな。般亂し紛拏す。第絲綵を同じうし。冠履絢を共にす。督萬宴に侍し。周邵菊を負ふ。白龍駭られ。靈龜執拘せられ。仲尼困厄し。鄒郢幽囚せらる。伊余茲を念ひ。奔遁し隱居す。將に高山に升らんとすれば。上に猴猿あり。深谷に入らんと欲すれば。下に虺蛇あり。左に鳴鶴を見。右に呼梟を睹る。惶悸して氣を失ひ。顛躍して距離す。中原に便旋し。天を仰ぎて歎を増す。營。

我が窮獨にして。匹倫あるなきを哀み。意沈吟せんと欲し。日の黄昏に迫る。玄鶴高く飛び。増々青冥に逝く。鷓鴣啼たり。山鵲嚶嚶たり。鴻鵠翅を振ひ。歸鴈子に征く。吾が志覺悟し。我が聖京を懷ひ。殿を垂れて將に起たんとし。跼蹐して明を須つ。

① 善惡を混同し、上下の別なきに喩ふ ② 宋の大夫、華督と宋萬(君を弑せし逆臣) ③ 周公・孤公 ④ 靈

惶怍兮失氣。踊躍兮距跳。
 便旋兮中原。仰天兮增歎。菅圃兮墜葑。菴葦兮千眠。鹿蹊兮躡蹌。蒲路兮蟬蟬。鷓鴣兮軒軒。鴝鵒兮鸛鸛。哀我兮寡獨。靡有兮匹倫。意欲兮沈吟。迫日兮黃昏。玄鶴兮高飛。增逝兮青冥。鸛鵒兮嘒嘒。山鵲兮嚶嚶。鴻鸕兮振翅。歸鴈兮于征。吾志兮覺悟。懷我兮聖京。垂屣兮將起。跼蹐兮須明。

人孔子、陳蔡の間に苦しみ、賢人無節、野に因へらるる ① 鳥の名(伯勞) ② 草の茂る貌 ③ 相隨ふ貌 ④ 止ちんとする貌 ⑤ 小鳥の飛ぶ貌 ⑥ 天上に行く ⑦ 清く鳴く貌

惟昊天兮昭靈。陽氣發兮清。明。風習習。蘇煴。百草萌。兮華榮。董荼。芟兮敷疏。菌。芟彫兮登。慙。慙。良良兮遇。害。將天折兮

傷時

惟れ昊天昭靈。陽氣發して清明なり。風習習として蘇煴に。百草萌して華榮す。董荼茂りて敷疏たり。芟芟彫んで登煴たり。貞良の害に遇ひ。將に夭折して碎糜せんとするを慙む。時混混として澆儂し。當世の知る莫きを哀む。往昔の俊彦を覽るに。亦訕辱せられて係繫す。管束縛せられ桎梏せられ。百貿易して傳賣し。桓纏に遭ひて識り擧げられ。才徳用ひられて列施す。且に従容として自ら慰め。琴書を玩んで遊戯し。中國に迫りて追蹙し。吾九夷に之かんと

欲す。

① 苦菜茂り榮ゆ ② 香草、湖み蘘ふ ③ 混濁し亂れ、忠臣を知るものなし ④ 管仲 ⑤ 百里奚 ⑥ 野の相公、乘の驪公 ⑦ 中國にありて志を得ず、九夷(まびす)の地に往かんとなす

超五嶽兮嵯峨。觀浮石兮崔嵬。陟丹山兮炎野。也。余車兮黃支。就視融兮積疑。嘉己行兮無爲。乃回矯兮北逝。遇神媯兮宴娛。欲靜居兮自娛。心愁感兮不能。

五嶽の嵯峨たるを超え。浮石の崔嵬たるを觀。丹山と炎野とを陟り。余が車を黃支に屯し。祝融に就きて疑を稽へ。己の行を嘉して爲す無し。乃ち回り矯つて北に逝く。神媯に遇ひて宴娛し。靜居して自ら娛まんと欲す。心愁感して能はず。余が轡を放ちて馴に策つ。忽風騰り雲浮び。飛杭に蹠して海を越え。安期に蓬萊に従ひ。天梯に緣りて北に上り。太一の玉臺に登り。素女をして簧を鼓せしめ。乘戈蘇して謳謠し。聲噉誦して清和に。音安衍して要姪す。咸欣欣として酣樂し。余春春として獨り悲む。章華を顧みて太息し。志戀戀として依依たり。

放余響兮策。忽風騰兮雲浮。離飛杭兮越海。從安期兮蓬萊。緣天梯兮北上。登太一兮玉臺。使素女兮鼓簧。乘戈蘇兮謳謠。聲嗷訥兮清和。音晏衍兮要妙。咸欣欣兮酣樂。余眷眷兮獨悲。顧章華兮太息。志戀戀兮依依。

● 黃支(南極の國)に止まり、赤帝に就きて疑をたゞず。● 北方の神に遇ひ、宴に侍す。● 崑崙山に仙人安期生に従ふ。● 仙人梁支、和して歌ひ。● 聲清く暢び。● 音長く引きつゝ舞ふ。● 楚の章華を顧み、憂ひて太息す。

哀歲

晏天清涼兮。玄氣高朗兮。北風冽烈兮。草木蒼唐兮。缺兮。嗷嗷兮。蟬忽兮。積穢兮。暮余感兮。時兮。悽愴兮。傷俗兮。泥濁兮。曠蔽兮。

晏天清涼にして。玄氣高朗なり。北風冽烈にして。草木蒼唐たり。蟬缺嗷嗷たり。蟬忽積穢として。惟れ暮れ。余時に感じて悽愴たり。俗の泥濁たる。曠蔽して。草ならざるを傷む。彼の沙磧を寶とし。此の夜光を捐つ。椒瑛汗汗し。菜耳房に充つ。衣を振けて帯を緩うし。我が墨陽を採り。車に昇り。僕に命じ。將に四荒に馳せんとす。堂を下りて壘を見。門を出でて蠶に觸る。巷に蚰蜒あり。邑に螻蛄多し。斯の嫉賊を暗。心爲に切傷す。

● 秋冬の天高く朗かきなり。● 草木凋初む。● 夜光の名玉を棄つ。● 草木朽され、惡草、房に滿つ。● 墨陽の劍を揮る。● 海蟲の如き小人を見、心ために傷む。

不章寶彼兮。沙磧捐此兮。夜光椒瑛兮。涅汗菜耳兮。充房攝衣兮。緩帶操我兮。墨陽并車兮。命僕將馳兮。四荒下堂兮。見蠶出。門兮。觸蠶。巷有蚰蜒兮。邑多螻蛄兮。斯兮。嫉賊。心爲兮。切傷。

俛念子兮。青兮。仰憐兮。比干兮。投劍兮。脫冕兮。龍屈兮。蜿蟺兮。潛藏兮。山澤兮。匍匐兮。澗澗兮。流兮。見兮。溪澗兮。流兮。水兮。云兮。龍兮。延兮。欣兮。鱣兮。延兮。羣行兮。上下兮。駢羅兮。列陳兮。自恨兮。無友兮。特處兮。氛氛兮。冬夜兮。陶陶兮。雨雪兮。冥冥兮。神光兮。頽頽兮。魚火兮。熒熒兮。脩德兮。因控兮。愁不聊兮。遺生兮。憂紆兮。鬱鬱兮。忠所兮。寫情。

俛して子青を念ひ。仰いで比干を憐み。劍を投じ冕を脱ぎ。龍屈して蜿蟺たり。山澤に潛藏し。匍匐して叢播す。溪澗を窺ひ見れば。流水沄沄たり。龍屈欣欣たり。匍匐延延たり。羣行上下し。駢羅列陳す。自ら友なく。特處して熒熒たるを恨む。冬夜陶陶たり。雨雪冥冥たり。神光頽頽たり。鬼火熒熒たり。徳を脩めて困控し。愁へて聊むに遺あらず。憂紆ひて鬱鬱たり。悪んぞ情を寫す所ぞ。● 龍の如く屈しちまざる。● 湧き流る。● 並びつらなる。● 長き貌。● 山川の精の光。● かまやかく貌。● 光の弱き貌。● 原文「生」の字は助辭。

陟玉巒兮道
遙覽高岡兮
嶢嶢桂樹列
兮紛敷吐紫
華兮布條實
孔鸞兮所居
今其集兮惟
鳴鳥鳴兮惟
啞啞余顧瞻
兮惘惘彼日
月兮開昧障
覆天兮凝氣
伊我后兮不
聽焉陳誠兮
効忠懃羽翮
兮超俗遊陶
遊兮養神乘
六蛟兮婉蟬
遂馳騁兮陞
雲揚華光兮
爲旌乘電策
兮爲鞭朝晨
發兮郢郢食
時至兮增泉

守志

玉巒に陟りて道遙し。高岡の嶢嶢たるを覽る。桂樹列りて紛敷し。紫華を吐き條を布く。實に孔鸞の居る所なり。今其の集は惟れ鸞。鳥鳴驚きて啞啞たり。余顧瞻して惘惘たり。彼の日月の開昧なるは。天を障へ覆ふの凝氣あればなり。伊れ我が后聰ならず。焉ぞ誠を陳べ忠を効さん。羽翮を據べて俗を超え。遊んで陶遊して神を養ふ。六蛟の婉蟬たるに乗り。遂に馳騁して雲に陞り。華光を揚げて旌と爲し。電策を乗りて鞭と爲し。朝晨に郢郢を發し。食時に増泉に至る。

● 崑崙山 ● 特に高さ ● 孔雀鳥 ● 惡氣あればなり ● 心のま、にす ● 曲の角なきもの ● 長くうねる貌 ● 群鳥の光 ● 晨に郢郢を發し、食時に天湧に至る

繞曲阿兮北
次造我車兮
南端馮女黃
兮納費崇忠
貞兮彌堅歷
九宮兮福觀
晴祕藏兮寶
珍就傳說兮
騎龍與織女
兮合婚舉天
軍兮掩邪殺
天弧兮射姦
隨真人兮翻
翔食元氣兮
長存望太微
兮穆穆三階
兮炳分相輔
政兮成化建
烈業兮垂勳
日警警兮四
沒道遐迴兮
阻歎志穡積
兮未通恨敵
罔兮自憐

曲阿を繞りて北に次し。我車を南端に造し。玄黃に調して彌々堅し。九宮を歴て徧く觀。祕藏の寶珍を嗜。傳説に就女と婚を合せ。天軍を擧げて邪を掩ひ。天弧を射して姦を馭。翔し。元氣を食ひて長く存し。太微の穆穆たるを望み。三階の相輔けて化を成し。烈業を建てて勳を垂れんとす。日警警として遐迴にして阻歎す。志穡積して未だ通ぜず。恨として敵罔して自ら憐

● また兩方に行く ● 中央の帝 ● 殷王武丁の相、天に登りて星となる ● 星の名 ● 上に回 ● 仙人に従ひて遊ぶ ● 天宮の和順せるを望み ● 天宮三階の明かなるを見る ● 道遠く、志の通ぜず

亂曰。天庭明兮雲霓藏。三光朗兮雲霓藏。三光朗にして萬方を鏡す。蜥蜴を斥けて龜龍を進め。

兮鏡萬方。斥
蜥。策謀從兮
龍。策謀從兮
翼機衡。配機
契兮恢唐功。
嗟英俊兮未
爲雙。

策謀從ひて機衡を翼け。機契に配して唐功を恢にせんとし。英俊の未だ雙を
爲さざるを嗟く。

- 天明かに鏡清ゆ
- 日月星細に天地を照す
- 小人を斥け賢人を擧ぐるに喩ふ
- ともに謀りて、善政を輔く
- 賢き輔佐に伴ひ、聖主の功を大にせんとす（機契は魏の臣、唐は魏帝なり）
- 賢俊の士は未だ

楚辭終

昭和三年九月七日
昭和三年九月十日
發行

漢文叢書
古文眞寶 楚辭
(非賣品)

編輯者

塚本哲三

印刷者兼
發行者

東京市神田區錦町一丁目十九番地
三浦捷一

印刷所

東京市神田區錦町三丁目九番地
有朋堂印刷所

發行所

東京市神田區錦町一丁目十九番地
有朋堂書店

不許複製

(本製)

375

42

終